國風のものは丸木を疊みて土着的に構成するも內部に至りては依然舊習を保ち一個の爐を中央に設け土間には板を布き爐を擁して寢食するを常とす室內の結構は宛も北海道の「アイヌ」人種に似て全く野蠻の外套を脫せざるが如し容貌は男女共に概して顏廣く平たきも肥ゆるにあらず眼細く口大に鼻低くして瞳孔碧色を帶ぶ男女共に騎馬に巧みにして悍馬を縱橫に操縱するの卓絕なると牧畜に熱心なるとは彼等の特技と謂つべく旅行者は「ブリヤーツキ」婦人が胡馬に跨り鞭を振ひ峻嶮なる山坂を馳驅つゝ平氣にて「ブリヤーツキ」歌を調子面白く鐵蹄に和するを見ば如何に彼等が騎馬に巧なるかを驚かざるものはなかるべし人情概して質朴なるも其露化せるものは幾分か陰險の性質を有せり男子は支那人と同じく辮髮をなし女子は一種異樣の髮飾りをなせり被服は朝鮮婦人の服裝に似て上下の衣裳は之を連續し頸邊には棘物の珠球を懸け或は銀細工の鎖物を胸邊に垂れ平素は帽を用ゆ宗敎は蒙古人と等しく「ラマ」敎にして各戶には土爐に對して幾段楷を設け高き中央には千手觀音の繪像を安置し第二段楷には摩利支天の繪像を安置す佛前には眞鍮製の器物を幾個ともなく据ゑ或は牛乳或は酒を供物となし禮拜する際は香を燒き燈を點じ左手に珠數を携へ右手を擧げ或は立ち或は屈むと宛も眞言宗の拜佛に髣髴たり

午後一時半此處を出發し二露里許を進みたりしに屢々熱風起りて土砂を捲き炎塵高く揚がり煩悶に堪へざりしが「ウラル」に一鞭を加へ辛ふじて開けたる原野にと出でたり此處には「ブリヤーツキ」及露人の混住部落あり之を右左に見過し七八露里にして「セレンギンスク」町にと達したり

「セレンギンスク」町は北緯三十一度六分東經百二十四度三十三分に位し露清の境界を距る國道に因るときは陸路殆んど九十五露里餘「ウエルフネウシスク」町に達する陸路百二十二露里半其「イルクーツク」府に至る貝加爾湖の橫斷を加へて正さに三百九十九露里あり地勢北方より傾き來りたる峽谷の盡くる處にあり南に「セレンガ」河を隔てゝ山脈を控へ東西の二面は「セレンガ」河の圍谷遠く兩方に開きつゝあり地味頗る豐饒にして農耕に適し麥類の如きは最も發育善良成熟亦完全なるを以て產物として「セレンギンスク」麥の稱あり地に後貝加爾州「セレンギンスク」管區役所、三寺院、郵便電信局、男子中學校、驛傳、警察署、町役所、商店、酒店あり住民は重に從來の土着人にして戶數合して二百五十以上人口千七十六人あり「セレンギンスク」管區內の人口は男四萬九千九百二十一人女五萬千百六十八人合計十萬千八十九人に上れり管區內の住民は有名なる後貝加爾州の胡索克屯田兵及農民にして其過半は「ブリヤーツキ」人なり「セレンギンスク」管

區方面の屯田兵及び移住殖民は地味の良好なるに因り耕牧の傍ら牧畜に從事し富の程度は之を「ダター」管内に比すれば殆んど七の五に對する割合に當るべしと云へり住民の多くは二百年以前より土着せるものなるが故に人情概して質朴にして田舍の如く一言すれば進取の氣象に乏しく之を巨人「ムラウヰヨーフ」、伯以後の創立に係る黑龍江沿岸の町村に比すれば雲壤の差あるのみならず露清貿易の發達し「キャフタ」の繁盛を來せる以來商業者は「トロイツコサフスク」及「キャフタ」に移住し爲めに四五十年以前よりは漸く衰微の觀を呈せりと云ふ。

此處を過ぎ十八露里餘にして驛がて「セレンガ」河の支流「チコーイ」河岸に出てしが一部落の中央より間道に沿ふて西に向ふ四五露里山道深く進み入り更に松林を過ぐる一露里許にして五六戸の寒村に達し殆ど五時間の騎行を繼續し「セレンギンスク」町より西南三十二露里は休憩する間もなく驅けしが此處に盡食せむと欲し草深く水多き邊に胡馬を放ち鋭氣を養はしめたり此時余は羊毛より毛糸を繰り居りし老女に向ひ「此地に牛羊疫はなかりしや」と問へば老姥は忙はしき手を止めて言ふ樣「本年二月前の事なりし、キャフタ方面より各處の殖民地を犯して蔓延し來りたる牛疫は勢鋭くも此地を蹂躙して該村にも四十頭の牛と六十二頭の羊とを失ひたり之と同時に貝加爾湖邊より遠く庫倫近くに延燒せる野火(此の野火は北貝加爾山より發して清領より露領に跨り殆ど六七百露里に延燒せしものなるが如し)の爲めに兒女等が數十日間丹精して苅り集めたる幾百留の牧草を脆くも一朝の烟に歸せしめられ剩さへ春來の旱天にて土砂燒け麥類は枯死して成熟するの見込みなき不幸に陷りつゝあるは何等の神罰にやあらむ」と片手に涙を抑さへつゝありしが「嗚呼忘れたり許させ給へ妾は老の繰言を爲して圖らず貴客に茶を進むるを忘れたり許させ玉へ」と急はしく戸外に立ち去りたり余は此處に鷄卵麵麭を求めて盡食を了り日のある中にと前村さして馳せ出し西南に進む露里許りにして再び松樹の深林となり愈々進めば愈々蔚々松籟濤々として啄木鳥の古幹を叩くの音と栗鼠の梢を傳ひつゝ啼くを耳にするのみなりしが十三露里にして「レドモンド」の山脈を踰え日沒後「カレーシナ」農村に着し農家に就き宿泊を求めしも互に言合せるが如く或は主人不在或は旅客多ければなど躰よく謝絶せられ四戸目にして漸く老農の好意に物置を借り受け釣床の中に脆き旅寢を結びたり。

六月八日午前四時此處を發し數多き高原低原を馳驅し「ウースト、キャフタ」を過ぎ午後十時「トロイツコサフスク」町にと着したり。

其七　清露疆界

「トロイツ、コサフスク」町

「トロイツ、コサフスク」町及「スロボダ」は共に重疊巒巒の間に横れる區域狹長の市街地にして共に相距ること僅かに四露里に過ぎず「キャフタ」と名づくる小河を以て兩町を分てり

「トロイツ、コサフスク」町は北緯五十度二十二分東經百十四度七分に位し「スロボダ」町は北緯五十度二十分東經百二十四度二十分の處にあり(但し經度は露國の制定せる處に因る)て清領寶買城と僅かに一町を隔つるのみ地位露清陸路貿易線及び露清陸路郵便線路の要勝に當り西比利亞より清國に輸出する貨物の幾部分及び清國より露國に輸入する商品は凡て此地を經過せざるなし地は清領蒙古庫倫城を距る殆んど三百五十露里「ゴビ」「シャモ」の砂漠を超えて北京に到る陸路殆んど千八百露里に上る其「イルクーツク」府に達する三道路あり露清陸路貿易線による時は水陸三百二十露里許あり國道即ち郵便道路によるときは「バヒカル」湖を横ぎり六百七十餘露里あり此他尚ほ貝加爾湖迂回の道路あるも兇賊横行し猛獸出沒して屢々人馬を害するが爲めに此陸路によるもの稀なり戸數千六百二十一人口九千七百三あり地に三大寺院、郵便電信局、警察署、圖書館、町役所、監獄署、紀念宗教諸學校、慈惠院、驛傳、帝國銀行、出張店、市立病院、胡索克兵營、及び豪商等は重に大町にあり市場は市街の殆んど中央に位し公共遊園地あり落葉松及び雜木を植ゑ込み園内には清流を引き長椅子を設け四季共に遊客絶ゆることなし町立男子中學校は規模宏大に寺院は宏壯美麗を極め尖頭の十字架は高く霄空に聳え巨人「ムラウヰヨーフ」伯の紀念女子中學校親王「アレキセーフ」の紀念宗教學校等は建築物中の巨大なるもの其他の大建築物は重もに火災後乃ち五十年後の建築に係るものなり

「スロボダ」町

「スロボダ」一名之を「キャフタ」と稱す「トロイツコサフスク」を距る四露里「キャフタ」橋以南の市街を總稱せるものなり市街は「トロイツ、コサフスク」町より南に開きたる小原野の原頭にあり露清陸路貿易線の樞機を司れる地にして戸數僅かに百内外なる割合に巨商多く六千萬留以下五十萬留以上の巨商計三十戸と算せらる地に電信局、露清陸路貿易會社、大寺院、博物館、露清銀行支店、露清貿易品取引所、生命保險、火災保險會社出張店等あり、重なる建築物中「キャフタ」寺院は千八百四十一年の建築に係り四階の高厦魏然として雲霞に聳え尖頭の十字架は金光燦爛として一市街の秀を此處に萃む寺院は西比利亞中に於て「イルクーツク」府の大寺院と相軒輊し其富裕なる露國中第二流を占むと

云へり殿堂の內部は規模宏壯金銀珠玉を鏤刻して華美壯嚴輪奐の美を極む。

露清陸路貿易品引取所

露清陸路貿易品取引所は町の南端なる露清の境界線に臨み四季共に製茶堆積して日々歐露に向つて輸出する函數(一函は四布內外にして之を日本の貫目にすれば十七貫四百四十目內外なり歐露に於る賣買する價格は一定せざるも大抵一函につき平均三百留內外なるべしといふ)四百內外に數へらる此建築物は巨人「ムラウヵヨーフ」伯時代に於て邊疆護衛の爲め胡索克兵營に充てたるものなりしが驅護守備の必要なきより胡索克は「チター」方面或は黑龍江方面に轉住せしめて貿易取引所に充てたるものなり概して「スロボダ」町は土地の富裕なるだけ之を「トロイツコサフスク」町に比すれば熱鬧の煩ひなく市民の氣質寬裕にして他の都邑と人情風俗凡て趣を異にするやの觀あり商賈は大抵夏時此地を距る三十餘露里の東北「チコーイ」河畔の「チコーイ」村に避暑し露清陸路貿易會社事務局も此處に移さるゝが爲め夏時は冬期に比して幾分か商業の活氣を缺くが如し。

市街在住の各人種

小露西亞人、白露西亞人、波蘭人、蒙古人、「ブリヤーツキ」人、清人等は此兩市街に雜居せり、右の人種中小露西亞人と白露西亞人とには巨商あり文官あり僧侶あり或は武官あり波蘭人は重に文官或は技術的の事業に從事し「ブリヤーツキ」人と蒙古人とは牧畜に從事し清人は單に商業と勞働とに從事せり、

露西亞人の最も嫌惡して蛇蝎の如く露人の列に加へざる猶太人は其宗教の異なれると心情の卑劣なるが爲め二十四時間の外在住を許さず露人中の下等人種なる「ツガン」人及び獰惡なる韃靼人「セメンスキー」人は是れ亦僅かに三晝夜の在住を許して直ちに之を追拂ふを常とせり概して住民一般の氣風は其清領に境を接すると宗教の旺盛なると貴族の屢々此地に來るとの爲めに自然高尙に進化せられ文學に熱心に愛國心も亦此等の爲めに挑發せられて大に見るべき所あり、されば巨人「ムラウヵヨーフ」伯が「ブリヤーツキ」人を胡索克に編入するや文明の光に照らされざりし蒙昧なる蒙古人は一は兵役を避けむが爲め一は辮髮を絕ちて宗化するを嫌ひ相率ひて遠く蒙古の高原地方に逃竄したる守舊の頑固者もありしが次第に舊地に復歸し來り或は自ら進んで胡索克を志願し或は自ら請ふて宗化するもの年々增加するに至りたりといへり。

其八　後貝加爾胡索克

後貝加爾州胡索克兵中「トロイツコサフスク」「セレンギンスク」「アレキサンドルスク」各管

區に散在する胡索克兵は護疆守備屯田兵として「トロイツコサフスク」方面より東西に長く國境に沿ふて配置せられ二聯隊は「セレンギンスク」「トロイツコサフスク」間「セレンギンスク」「ウエルフネウヂンスク」間に配置し國境守備の爲め國防屯田兵として清領近き露領に配設せられたるものなり胡索克屯田兵は重に歐露の「ドン」縣方面より移殖したるものなれども「ウラル」胡索克及び「シベリヤーク」と稱する人種即ち三百三十年前勇將「エルマーク」に統領せられつゝ西比利亞の野に稀世の偉勳を顯はしたる「トボリスク」方面の人種も亦之に加はれり其五十年前迄ては「ブリヤーツキ」人の胡索克兵は一人も無かりしが巨人「ムラウヰヨーフ」伯が炯眼早くも「ブリヤーツキ」人に注視し彼等の騎馬に熟練にして將來用ゆるに足るべき人種なるを洞察し果斷の處置を取り胡索克屯田兵に編入したりしなり胡索克兵の騎馬に練達せるとは勿論のとなるも就中「ブリヤーツキ」胡索克の年少等が裸馬に打ち跨がり山野の差別なく馳驅して馬上人無きが如き壯觀は彼等が幼少よりの練習にして到底露兵の及ぶ所にあらず概して胡索克兵は其何れの地にあるも其氣風他の兵種に優るの觀あり而して貝加爾胡索克屯田兵中過半を占むるは「ブリヤーツキ」胡索克にして彼等は幾百年來舊習に感染したる積弊を棄て新好を取るに優柔不斷なる頑固の支那人種なるが爲めに其心術行爲の大に支那風に似て露人の活潑敏捷なるに似ず爲めに胡索克屯田騎兵に編入せる當時「ブリヤーツキ」人の十名は露人の一胡索克に値する能はざる程なりしが現今騎兵編入の現役「ブリヤーツキ」胡索克は騎馬に熟練せるのみならず能く柔順にして技術もまた露人の胡索克兵と殆んど相軒輊するに至れりといへりされど唯だ惜むらくは彼等の父祖が曾て愛親覺羅氏一部の麾下たりしこと及び宗教文學言語風俗習慣嗜好等を異にせるより露國帝室に對する勤王心と愛國心とは極めて冷淡なりの一事なりとす。

されば實力に至りては固より「ドン」或は「ウラル」胡索克の如く劒戟の中に鐵鞭を鳴らし月下に遠征を歌ふて嫣然國に殉するが如き勇氣はあらざるべきも他人種を同化せしむるに巧妙なる露國の同化力即ち無限宏大の潛勢力を有する宗化力は早晩是等の「ブリヤーツキ」兵種をして漸次に露化せしめ彼等が幾百年來の惰眠を覺醒して自ら土爐の周圍に犬と同居し寢食を共にするの非を悟らしむるの期は遠からずして來るべく此時は騎馬に巧みなりと誇れる滿州騎兵が日清戰爭に勇を振ひたるが如き比にあらざるべし要するに西比利亞各兵種の技術と熟練とは敢て强敵とすべき價値はあらざれども唯恐るべきは宗教に熱心に上官を畏敬するにあり戰に臨み彼等が彈丸雨注の下を潛りて突進死を顧みざるの勇猛心を挑撥せしめ十字架の下に斃るゝを名譽とす

るの精神を惹き起さしむるは是宗教の力にして萬死の危境に陷り乍ら悠然として其處を守り上官の命令を待つ是亦宗教の力なり步兵が一塊の黑麵麭に數日の飢を忍び一椀の濁水に一日の渴を凌ぎ一枚の毛布以て凍寒に堪へ上官の命令に水火乾濕を事とせず平然として兵士の本分を守る是亦宗教の力也試みに朝夕兵營の近傍に到らば森嚴なる讀經の聲を聞くを得べく彼等が寺院の門前を過ぐる每に或は鐘聲を聞く每に帽を脫して祈禱するを見得べく其他食事喫茶の後に於て起後寢前に於て基督を禮拜し讃美歌を唱ふるは一種の常務として上官より兵卒に至るまで之を怠るものなし其他四民が天帝を第一とし皇帝を第二とし敬神愛國の精神を養ひつゝあるは疑ふべからざる事實にして故帝「アレキサンドル」三世は曾て某外臣に語り玉ふやう朕に三我の主義あり第一は天に對する我第二は露國に對する我第三は世界に對する我とにして天帝に對する我によりて露國に對する我を鞏固ならしめ然る後世界に對する我の運命を試むるとを欲すと露國人民の宗教に熱心なるは積習の然らしむる所なるべしと雖も就中軍隊にありては拜神を一種の軍律として思意するものゝ如しされば十個の數さへ算し得ざる兒女が寢前起後及び飲食の前には讀經し或は神を拜するは常にして小學より中學及び其他の諸學校には拜神を以て一種の科程となし僧侶之れが教訓の任に當り以て敬神愛國の情を固たからしむ西比利亞旅行者試みに諸官衙諸學校、諸會社、銀行等に入らば一方には基督の聖像を安置し一方には故帝「アレキサンドル」三世若くば今帝の尊影を掲ぐるを見るべく室內に入るものをして神を拜し至尊に禮せざる能はざるの心を起さしむ其他驛傳若くば藥種店、諸官衙の軒頭には露國帝室の御紋なる黑鷲兩頭の彫刻物を掲ぐるを見るべし此等は國民をして愛國の情を挑撥せしむると同時に宗教に熱心ならしむるの媒介をなす實に少々にあらざるべし曾て余が後貝加爾州「チタ」府にあるの日同府警部長が寺院の僧侶に對し失言ありしとて告發を受けたる後國法により重禁錮一ヶ月に處せられしとありし等亦以て如何に露國宗教の潛勢力强大にして其軍隊の勢力に裨益を添ふる大なる歟の一端を窺ふに足るべきなり。

○清領蒙古方面

其一　買賣城（マイマイチン）

賣買城は其名の如く貿易地なり賣買なる名稱は清國の商業地を意味し「スロボダ」なる名稱は露國の商業地と解釋せらる恰克圖は清領賣買城と露領「スロボダ」とを總稱せるもの露人は賣買城を「マイマイチン」と稱すれとも清人は恰克圖と稱す賣買城は露清の疆界に臨み露領「スロボダ」と相對し僅かに一丁餘の廣場を隔てゝ南方にあり地位北緯五十度十九分半東經百二十四度二十一分の處にあり市街の區域廣くして其露領に對する北部には高く土墻を築きて廓壁を作り空濠を設け關門あり門上には樓閣あり高さ殆ど二丈址の厚さ五尺雉堞の高さ六尺許りにして塗るに白砂を以てす外部より之を望めば宛も嚴然たる城廓の風あり賣買城は二區に分れ一を廓內一を廓外と名づく廓內には巨商大賈軒を連ね肆店の結構亦雅致あり家屋の構造は煉瓦を積み厚く土砂を塗り棟上には唐獅子の如き瓦製の飾物を据え各戸共に繞らすに堞壁を以てす。街衢は四通八達なるも狹隘にして夏秋の際汚塵常に揚がり熱鬧を極む各門巷には樓門を設け門上には臺閣を築く。

巨人「ムラウヱヨーフ」伯が愛琿條約を締結せる後即千八百五十九年六月露領に面せる永豐、中央、興隆の三關門は開かれ之れと同時に西歐文明の新空氣は陳腐の街衢を清掃なしたり其幾百年以來殆ど暗黑塲裡の廓內に長き爪を跨りつゝ手を拱きて閑座し鴉片烟毒に肉落ち骨立つを仙骨などゝ喜びし幾千の清人は此時より文明の光輝に惰眠を破られ曾て夷狄と輕蔑せる露人に就て文學武備を講習するに至りたり彼等が賣買城の柵欄を出づるの自由を得たる後四十星霜を經ざる中利に鋭き射利者は露領に侵入し次第に增加して現今は東部西比利亞の何處を問はず田舍の寒村まで露人と混住するに至りたり。されど城中幾多の開化派を除き中等以下の商民は舊習を改め陳套を脫すると能はずして熱鬧暗黑の賣買城を無二の樂園の如くに思意し齷齪として城中に蟄居するにあらざれば區々として露人の爲めに勞を取るもの多きを認む元來清國人の性質として重なる所は露人の如く寬裕ならず事業は露人の如く壯大ならず思考は露人の如く深遠ならず露人は醉を帶びたる壯漢の怒りて速かに忘るゝが如く清人は心曲りたる妬婦の怨んで永く忘れざるが如く露人には一擧の下に打倒す勇氣あるも清人には一指を彈くの意氣なしされば優勝劣敗の勢ひに制せられたるの結果賣買城は其名は清領の下にあるも其實權に至りては宛も「ドロイツ、コサフスク」町の管區に屬するが如き異觀あり。

元來賣買城は北京を距る千八百露里「ゴビ」又は「シャモ」の大砂漠を超えざれば到る能はず賣買城を支配する庫倫も亦此處を距る三百五十露里の處にあり其間は凡て高原の

砂地にして蒙古人の此處彼處に散居するあるのみ土地遼遠にして清朝の恩澤に浴する能はざるが爲めに其清國を思ふの精神次第に冷淡となり曾つて露國を夷狄と輕蔑せる當時即ち千八百五十八年清國が英佛聯合軍に腹を抉られ露國に背を打たるゝまては鎖國攘夷の主義を取りつゝありしが爲め大義勤王などを口にし愛國の情も亦幾分か彼等の腦裡にありしが如く見えしも貿易城の關門開かれし以來は彼等が舊來の迷夢を攪亂せられたると同時に自然に露國の同化力に感化せられて清朝に冷淡なる證として曩きに日清開戰の事あり清朝危急に陷り滅亡の時に逼りし當時にも彼等は恬然として自國の存亡などは意に介せざるものゝ如く唯自家の商業に影響あらむとを恐れしのみなりと云へり。

其二　蒙古砂漠通過鐵道豫定線路

蒙古の「ゴビ」又「シャモ」砂漠通過鐵道布設豫定發表の起源は千八百九十八年露清陸路貿易會社の委員が露都聖彼得斯堡より齎し來る所に係る其當時在「キャフタ」貝加爾新聞は之を論じて清國の惰眠を覺醒し清國の老朽を一新し清國政府を瀕死の危境より救ひ出すは實に此鐵道なるべく而して露國が砂漠通過鐵道を布設せんと欲せば事決して難きにあらず彼の東清即ち滿州鐵道の如く露國政府に於て該鐵道布設の資本を清國に貸與せば聖彼得斯堡府と最も懇親なる北京政府は喜んで之に同意するなるべしと論及したり。

讀者は貝加爾新聞が如何に其傍若無人の論を爲すかを怪むべしされど貝加爾新聞の論ずる所決して空論を弄するものと同一視する能はざるなり露史を繙かば露國が數十年來漸次に清國を蠶食し屢々世界の地圖に改竄を加へしめしと幾回なるかを知り得べく彼の黑龍江占領は論を待たず近くは東清鐵道布設の宿望は今を去る三十二年前故帝「アレキサンドル」三世時代に於て親王「アレキセーフ」が「キャフタ」に來れる時に發表せられ旅順口、大連灣占領の希望は千八百九十五年露國東洋艦隊司令長官が浦潮斯德海軍倶樂部に演說せる當時に於て憚る所なく發表せられしが世運は何も露國が待ちつゝある機會に投合し容易く其慾望を充たさしめたりしに非ずや露人は常に言ふ「故帝歴山三世は血を流す戰を好まず平和の戰を好めり此故に帝は唯單に天帝に對する我と露國に對する我とによりて徐ろに世界に對する我と平和的の運命を試みつゝありしかども今帝は血を流す戰を避けず又平和の戰を嫌はず而して其世界に對する唯一の外交政略として今帝「ニコラス」二世の方針は戰はず機を執へて地を奪ひ語を用ひず缺點を抑へて弱きに乘ずるにありと」されば此數句は數十年前より露國が屢々隣

境の諸國に活用したる蠶食的の政略として著しく就中東清鐵道の布設旅順口、大連灣の占領より北清事件後に於ける滿州の經營其他近來北部朝鮮に於ける經營の事實は是れ戰はずして地を奪ひ語たらずして他を屈するの政畧即ち機會を捉へて弱點に乘ずる方針に出でたるや明なり。

蒙古砂漠旅行者は北京、張家口、庫倫「キャフタ」間に於て露國が將來此地方を蠶食せんとて心長く機會の到るを待ちつゝある方針の一端に注目するならむ即ち露國は露清陸路貿易發達を名として庫倫城に露國貿易事務官(准少將領事官と稱す)を置き砂漠を超え張家口にも商業者を送りて漸次に露人の員數を增し頻りに清人の歡心を結ぶに勉めしめ一方には同化力を蒙古人種に傳播し次第に露國化せしむるを勉めつゝあるに非ずやされば現今庫倫城は勿論賣買城開化派の清人蒙古人中には寧ろ自國の上長官よりも露國の上長官に心服せるものあるの事實あり要之賣買城の關門開かれし前まては高原地方に散居せる蒙古人及び「ブリヤーツキ」人清人等は何れも尊大自贊自國を以て中國或は中華と稱し他國を夷狄禽獸と輕侮しつゝも身自ら曖昧野蠻の境裡にあるを悟らず暗黑塲裡に爪を長くし手を拱きて閑座し鴉片煙毒に肉落ち骨立ち清瘦なるを以て人間品格の最上なるものとし句を摘み章を弄ぶの人を以て文士となしつゝ

ありし彼等も漸く文明の光輝に照されし以來は露人に就き文物工藝を學び或は國風を破りて宗化し遂に歸化するもの年々其數を增加するに至りたり此れ實に近年の事なりとす。

蒙古砂漠通過鐵道布設豫定の計畫は前帝「アレキサンドル」三世の時代に於て希望ありしは疑ふべからざる事實なり而も西比利亞鐵道の完成せざると及び機會の乘ずべきなきより空しく手を拱じつゝありしが日清戰爭は容易すく露國の希望を充たすの導火線を齎らし來りたり機會を促ふるに鋭敏なる露國は清國の少しく惰眠を破りたるを機とし陸路貿易發達を名として恰克圖北京間に砂漠經過の電線を布設することを清國政府に勸告し一方には清國の商業者を挑撥して北京政府に申請せしめたる結果千八百九十八年十月蒙古の「ゴビ」又「シャモ」原頭の庫倫城より張家口を經て北京に通ずる電線の一部「キャフタ」庫倫間は開通せられたりされば庫倫恰克圖間電線の開通せるや在「キャフタ」の露商は在賣買城の清商を勸誘し貿易擴張の目的を以て庫倫より具加爾湖に通ずる商業鐵道を布設するの計畫をなさんと主張するものあるに至りしが續て露國政府の有力なる外交家中には露清貿易擴張を名として蒙古砂漠通過鐵道布設の計畫を爲すものありとの風評さへあるに至れり元來露國は自國が將來執らんとする

蠶食の目的を實行すべき以前に於て憚る所なく希望と目的とを發表して他を震慴せしめ然る後之を忘れたるが如き風に裝ひつゝも拮据經營に怠なくかくして順次に蠶食の根を固め心長く專ら機會の到るを待ちつゝ他國をして露國が深遠なる目的の潛む所を知る能はざらしめ機を執へて赤手苦も無く之を奪ふは露國が蠶食的の主なる手段として唯一の外交政略は實に此處に基けるなりされば野兎を逐ふて鹿を獲たるが如く十數年前滿州通過鐵道布設の希望を北京政府に申込み脆くも失敗したる宿望は日清戰爭が齎らし來りたる時機に投合して容易く露國の目的を充たし其當時は唯單に滿州を通過して浦潮斯德に達せんとするの目的なりしにも係らず露清韓三國連絡の鐵道布設をさへ豫定なしたり日清戰爭に腕を挫かれ脚を折られたる清國の虛弱なる國力を機とし已に滿州に於ける十數年來の宿望を貫徹したるに飽き足らず日英米列强の勸告に滿州經營の方針を挫かれたるを機とし茲に再び砂漠通過大鐵道布設の希望をさへ發表せんとしたり要路者は言ふ「恰克圖より北京に通ずる蒙古砂漠通過鐵道布設の工事は頗る困難なるも之を東清鐵道に比すれば更に容易なり何となれば東清鐵道布設の豫定線路は嶮山峻嶺大河池沼等擧げて數ふべからず加ふるに春秋非常の水害を被るは免るべからざる事實にして蒙古砂漠通過線の乾燥なるに似ず高原地方には嶮峻なる山嶺多きも水害を被るべき處は殆んど皆無なり鐵道布設に要する費用も亦自ら小額にて足るべく清國にして國交上砂漠通過鐵道布設の企圖に同意せむには我等は勿論聖彼得斯堡政府は喜んで之れが布設を成就すべし何となれば滿州通過線路に於て得たる條件の如く鑛物に豐饒なる蒙古の高原地方より採掘する金屬を以て鐵道布設に要する資本の幾分を補ふに足るべければなり」と。

露國が清國に對して從來施したる外交政略を讀み來たらば此新計畫の前途も之を推斷するに難からざるべし。

假りに此鐵道布設計畫の事實行はるべきものとせば北京以北は勿論蒙古方面滿州方面は清領にして清領にあらざることゝなるべきは火を見るよりも明かにして常に露人が公言して憚からざる「露國が清國に向つて希望せる土地は蛙の蛇に睨まれたるが如く遂に通るゝの機を得る能はざるべし」との如き之れを一の誇大なる戲言として見ば即ち可なりされど翻て從來清國が巨多の土地を失ひたる實驗に徵すれば如何に英佛は幾度か清國に血を流し日本は又遼東に血を注ぎしも得る所失ふ所に値ひせざるに反し露國は戰はずして三たび清國より廣大なる地を奪ひ去りしに非ずや畢竟するに露國が蠶食的の重なるものとして其希望せる土地には先づ商業者を送り布教者を

送りて順次に基礎を固めつゝ時機の際會を待ち一度機會の到來する曉には鋭敏なる手腕を振ひ巧妙なる政略を弄し敵手の缺點を抑へ之が弱點に乘じて容易すく鮮血を吸ひ取るとは露國を知るものゝ已に知れる所なるべし讀者の知れる如く清國が英佛聯合軍に喉を絞められ呼吸に艱めるの時機に乘じて赤手黑龍江以北に於ける數十萬露里を清國より奪ひ去り清國が日軍に腹を抉ぐられて瀕死の境遇に陷れるに乘じ滿州鐵道布設權を强求して滿州の全權を剝ぎ去れる等其他遠くは西印度、土耳其、或は隣境の諸國は論を待たず讀者の腦裡を脫せざる三國同盟脅喝的の勸告を始めとし韓國に於る外交に失敗せるが如き眞似しつゝも近くは北韓經營の如き一として機會を捕へ他の弱點に乘ぜざるは無し清國をして此後露國が自國の缺點に乘ぜしめずんば可なりされど基礎尙ほ脆弱なる清國は年を經て此の重き問題を頭上に投げ懸けらるゝの不幸に際會する期あるべきは疑ふべからざる事實にして假りに露國の請求に應ぜんとせんか之れ即ち清國の末運として之を斷言するを得べし之を約言すれば東清鐵道と蒙古砂漠鐵道とは清國の爲めに恐るべき條蟲にして清國は結局此鐵道の利用によりて露國の爲めに肥肉を食はれ鮮血を吸はれ遂に枯骨のみ存するに至らむ即ち蒙古砂漠通過鐵道は清國の爲めに清國の手足を緊縛し清國をして縊死自滅せしむる恐るべき金剛繩たるは是れ余が筆を待たざるも露國通識者の已に知る所ならん

其三　露清陸路貿易線路所見

砂漠熱に惱まされたる後は殘酷なる雜多の人災に罹り再び遠征に頓挫を來たし已むなくも時機の熟するを待ちつゝありしが八月十日には第壹回の降雪あり九月八日には第二回の降雪あり時氣俄然下降し寒に叫んで南に歸る寒雁引きも切らず蟻は巢窟を閉塞し人は戸を綢繆して冬籠の準備專らなるを見るにつけ旅情燃ゆるが如く遂に意を決し九月十六日を以て斷然「キャフタ」を發することに定めたり

元來露清陸路貿易線路なるものは其名の如く露清の貿易を發達せしむるの目的を以て巨人「ムラウヴヨーフ」伯時代に於て官設せるものに係り「キャフタ」より「ウースト、キャフタ」に出て「セレンガ」河を渡り夫れより「セレンガ」河の二支流を超ゆるの後南貝加爾山の麓なる「ウドンガ」村に出づるものにして其行程百三十八露里は樹木なき芝生の高原のみ「ウドンガ」村より南貝加爾山の峻坂起り「クゼルカ」「ウラトイ」の二驛傳所を經て「ムソウオイ」村に至る行程六十露里は深山、幽谷、椴松、赤松、落葉松、白樺の類繁茂して晝尙ほ暗く猛獸出沒、强盜隱見して旅行者に害を與ふること尠なからず之に反し「ウドンガ」村より「キャフタ」に至るの大半は開けたる低原にして到る處未開なる「ブリャーツキ」の部落

散在せるが故に危險の憂なく道路も亦平坦にして山道の如き比にあらず

朝來旅裝に忙はしく牛肉、麵麭、馬鈴薯、麥粉、牛膏、火酒、鹽等を求めて之を囊中に入れ輕き外套に身を纏ひ短銃を帶びたるまゝ「ブリヤーツキ」商隊と徒步此所を發したるは九月十六日なりき此行老人あり幼者あり何れも支那人より少なき小さき辮髮を戴き赤き房を着けたる扁平なる帽子を被り朋黃色の外套を着して固く帶を結び一樣の長靴を穿つ商隊十三名中露語を解するものは唯だ僅かに三名あるのみなりき

翌十七日より二十二日に至る每夜濕地多き原野若くば雪中に露營せしが斯の如き旅行は多年西比利亞の寒暑に馴れたる余にも始めての經驗なれば十六日の初夜已に自ら旅裝の非なるを知り得たり元來商隊の「ブリヤーツキ」人は各自二枚或は三枚の羊皮を準備し其露宿するや一枚を地上に布き一枚を着し一枚を被りて寒を凌ぐ靴は「ウンテ」と名づくる外部は厚皮內部は兒羊の軟かき毛皮を以て造りたるものを穿つが故に亟寒の際と雖も凍寒を感ずるの憂なく安眠することを得るなりされど余が許には唯一枚の輕き外套と暖かなる毛布あるのみにて靴は彼等の如く暖ならず帽は彼等の如く寒時の使用に適せず日中は辛くも寒凍を凌ぐを得べきも固より低濕なる寒野の露營に堪ゆべきにあらず商業線路には到る處「ブリヤーツキ」人の部落あり之に就き宿泊を求むる難きにあらざるも商隊一行は常に遠く人家を離れたる低濕なる平原に於て野營するを常とせり畢竟するに遠く人家を離るゝの地に露營するは盜難を避けんが爲めにして低濕なる草原地を選むは馬に秣かひ水かふに便なるが爲めなりと一行は每朝八時半若くは九時に於て露營地を發し午後三時若くは四時に於て晝食し八時若くは九時に於て露營するを常とせり此行二回終夜馬を驅り曉近き頃露宿せることありしが是便宜なる草原地無かりしが爲めにして牧草を得るに困難なるが爲めなり

商隊一行の「セレンガ」河畔に着し露營の準備を終へしは宛かも午後十時頃にして一行の「ブリヤーツキ」人は思ひ思ひに寢所を設け寒烈なる江風を畏ともせず嚴霜に洒されつゝ鼾聲高く夢に入りたり左れど余が許には唯薄き一枚の毛布と夏外套のあるのみなれば到底「セレンガ」河の寒風に堪ゆ可くもあらず中夜枯草を集め枯木を拾ひ暖を取りしも寒氣征衣を徹し全身に氷水を浴びせらるゝが如き心地して曙近き頃まて目睫するとを得さりしが當直「ブリヤーツキ」の目覺めしを幸ひ彼れが寢具とせる羊毛の外套を借り受け辛くも少時は脆き夢に入りたり

「ブリヤーツキ」の呼聲に驚かされ起出て見れば嚴霜宛かも雪の如く霜牙地を起して寒暖計は攝氏二度を示したり江畔の氷を破りて盥嗽し歸れば一行は已に茶を喫せんと

て圍繞火を擁し何事をか饒々しく語り居たり此時余は旅行鞄の中より磁石二個を取出し一行に向かひ「商隊諸君よ余が許には世にも珍らしき昆蟲動物あり躰軀微小なりと雖も旅行者の爲めに便宜を與ふる少々にあらず該蟲は日本の首都東京より殆んど八十露里以東に横はれる島内に於て獲たるものにして其當初は博物館に保存したるものなれども今や余が掌中に入りたり不思議なる此小蟲は常に南を枕とし北を足とし如何に之れを轉するも決して東西に姿勢を保つものにあらずされば黑白を辨せざる夜半東西を識別する能はざる濃霧と雖も此蟲の首尾に因らば容易すく南北を知るを得し」と語れるを彼等は怪しみ「凭は如何なる蟲なるか余等は未だ曾つて見しとなしと言へるを機とし余は懷中より二個の磁石を取出し「ブリヤーッキ」をして幾度か前後に振搖せしめ左右に廻轉せしめしも磁石は再び南北の位置に姿勢正しく停止せるを「ブリヤーッキ」は大に訝かり「這は不思議なり此蟲は何を常食となすか」と問ふたるに可笑しさを忍び「さればなり此奇蟲は鐵の外常食とす可きものなし現に余が東京を發する際には十挺の小刀を携さへ來りしが今は殆んど喰らひ盡くして唯余が許には一挺のみ殘り居れり他人の小刀は遠慮して食するとは思はざれども試みに諸君の小刀を與へて奇蟲が飢を癒やせよ」と言へば一人の「ブリヤーッキ」は訛聲高く「日本の旅行者よ君は狂せるか木を食ふ蟲あれども鐵を食ふ蟲あるとは未だ曾て聞かざる所なり「ブリヤーッキ」なりとて愚弄し玉ふな」と所携の小刀を磁石の上下左右に當て驚きたる容貌しつゝ或は見透かし或は小刀を見詰めつゝ何事をか同僚に語りたり此奇態の現象に一同は暫くは呆然として言なかりしが一名の年少「ブリヤーッキ」は「斯の如き奇蟲を何故に小さき器物に收容せらるゝや」と問ふたるに余は「不審は道理なり左れど此蟲は性暗きを嫌らひ慓悍にして其飛翔すると陽炎の如く一たび逸すれば再び捕へ難しされば日光を受けしめんが爲めに玻璃蓋の金屬具中に收容して逃逸を豫防するなり」と語れば奇怪の感に打たれたる彼等は好奇の心を起しけむ「眞に奇怪の蟲なり余等は未だ曾つて斯の如き珍奇の蟲を見しとなし「キャフタ」貝加爾湖間の如き旅行は論外として蒙古砂漠を横斷するが如き際には斯の如き奇蟲こそ眞の羅針盤なれ購なひ得可くんば賣り玉へ換へ得可くんば余等の所持品中何なりとも進す可しと」懇望して已まざるを余は心に笑ひつゝ計略圖に當たりたる喜びを色にも顯さず「されば」なり最に得難き天下の奇蟲なれども諸子の懇望も默し難ければ望みに委せて進す可し殊に余が前途は遼遠にして禍機測り難し一旦不虞の災に遭遇し萬事茲に休せば稀代の奇蟲も空しく路傍の草露を肥やすに止まらん此れのみ常に遺憾に思ひしなり左れば奇蟲は之れ

を諸子の望みに委す可し勉めて之れを保管せられよ年來余が爲めに盡したる指南蟲に別るゝは惜しきなれども何人にても此蟲を望むものは羊皮の外套一枚を持ち來らる可し」と語るを聞き居りし十三人の商隊は大ひに喜び我先にと外套を携へ來りしが羊皮は積りて十三枚となり競爭の聲烈しかりしを此時老人の斡旋にて抽籤に決じたる結果一人の年少「ブリヤーツキ」と老たる「ブリヤーツキ」との手に磁石は落ち去りたり茲に余は日本に所謂貳錢八厘の磁石二個を以て一枚少なくも十六七留(圓)に値ひする羊皮の冬外套二枚と交換し此後は寒夜に寒き星光を數へつゝも寒凍に苦吟する憂ひもなく氷上高く鼾聲を洩らし遠征を繼續するとを得たりき

「キャフタ」發後五日目即ち九月二十日一行は「ウドンガ」村近く進み露營したりしが朝來牧草苅取に忙はしき爲め夜行のとに決したり

日中の暖氣に石の如く凍りたる雪は融解して道路泥濘深く馬脚を沒する程なりしが午後六時頃より漸次に結氷し始め一行が此地を發する際は堅く結氷して雪上復た往來し得べきに至れり

雪夜月無く冴え渡る星光を戴き暗黑なる森林を横ぎり四十三臺の馬車は車輪の軋る音高く嘶く胡馬の聲勇ましく北に向ふ

根松の森林を過ぐる五露里にして「ウドンガ」本村に達したり地は南貝加爾山の南麓にある一小村落にして戸數三十四驛傳村役所三商店等あり土民は流罪或は移住人を以て成れるが故に風俗粗野人情獰惡にして間々旅人を脅すことありと云ふ折しも夜深ふして天暗く四顧闃として地寒く一行は胡馬を勵ましつゝ根松の森林を左右に迂廻して進む殆んど六七露里曉天近き頃漸く一の小低原に出でしが商隊一行は此處に休憩することに決したり時を撿すれば午前四時僅か十七露里を旅行したりしなり

「ウドンガ」より此處に至る行程山道大凡十露里の間は凡て蓊蔚たる森林にして狹き凹谷は或は西し或は北して峻坂あり坦道あり此狹き凹谷の中央を貫通する一條の溪流は滾々として石に碎くるの音極めて悽愴たり凹谷の兩方には根松繁茂して宛も麻畠の如く凹谷に隨て或は西に或は北に走れる貿易線路は森林に掩はれ薄暗くして盡尙ほ道を求めて進まざるべからざるの觀あり山道は日々百臺以上の車輪に破壞せられ泥濘深くして馬脚を沒し車輛を埋むるの難あり「ウドンガ」より前驛傳所に至るの間は山道のみにして人煙無く四季狼熊の如き野獸は出沒して人馬を襲ひ强盜は隱現して旅人を惱ます事珍しからず

二十一日一隊は此處を發して西に向ふ山道三露里の間は道路嶮峻加ふるに氷結せる

泥濘漸く融解し始めしより車輪重く鐵蹄滑り進行遲々として毎一時間僅かに一露里半を進み得たり山道到る處唯根松の森林のみにして山鳥は飛び栗鼠は叫びつゝ樹間を飛翔するを視るのみなりしが一行は汗馬を叱咤し壓に達する泥土を蹴上げつゝ欝々たる森林を衝き西北に進み午後五時漸く一の小原にと出てたり此處は芝生の小原野にして巾五十間長六十間もあらむ中央を貫通する清冽の溪流あり南に走る小圓谷あり西南は樹木繁き高嶺を控へ南東は少しく開けつゝあるが故に時氣幾分か暖なるを覺えたり秣ひ飲ふに屈强の個處なるべしと商隊の一行は此處に露營する事に決し馬裝を解き馬を低原に放ち車輛もて大圓陣を作り圓陣の周圍には五個處の篝火を設け圓陣の內部には二個處の篝火を設く圓陣中の一方には四十三頭の馬匹を容るゝに足るべき箇處を選び一方には商隊の一行が寢食すべき場所を定む元來此地方は熊、狼、豺、野猫(南貝加爾山の野猫は獰猛にして豺狼より强く好んで人畜を襲ふ大なるものは長さ四尺以上丈け二尺乃至二尺五寸に及ぶものあり其輕捷にしてしかも猛烈なる豹に類せりといふ)の如き野獸最も多く出沒する所なるが故に斯くは數多き篝火を設けしなり準備完く終へたるより日の暮るゝ頃馬を圓陣中に入れ圓陣中の篝火に火を點じて喫茶晩餐の準備にと取掛れり。

時移り午後九時に至り圓陣の外部なる五個處の篝火に火を移せば此時まで暗憺蕭索たりし左右の森林は燐光の如き靑輝を發して眠れる野獸を走らし死せるが如く圓陣の中央を流るゝ溪流も活氣を帶びて潺々たる音爽かに聞えぬ

是より一行は適意の個處を撰び篝火を繞りて氷上に身を横たへしが三名の「ブリヤーツキ」は當直の任に當り鳥銃を携へ圓陣の內外を巡邏しつゝありたり此夜余は屢々清寒に夢を破られ夜半より曉天近き頃まで狼の遠吠を聞きたりしかども翌朝午前七時まで快眠することを得たりき

九月廿二日午前九時一隊は結束して「グゼルカ」驛傳に向ふ此處より「グゼルカ」に至る十露里の間は南貝加爾山の坂路漸く鈍き傾斜をなし山道は次第に上るが故に車輛重くして馬蹄惱み午後四時半頃、漸く驛傳所に達したり此處には「キャフタ」より運送し來りたる喫茶の函數三千餘堆積しありたり余は「ペトフスコイ」氏の紹介狀により氏の支配人「ペートル、ニコラヒウエチ」氏を訪ひ山道の模樣を問ひしに氏の言ふ樣「八月十日を初雪とし九月八日には非常の降雪あり山道雪深き處は一「サージェン」半(一丈一尺弱)に及び千八百七十二年以來の大雪にして二週間以前よりは山道完く梗塞したり此際山道中の「ウラトイ」驛傳にありし商隊百十八輛の一行は貨物を殘し馬を率ゐて貝加爾湖畔

に遁るゝ途次三十六頭は飢餓して幾死したるが如き慘狀を呈し爾來唯單に騎馬若しくは徒步にて辛くも山坂を跋涉しつゝあるなり聞くが如くんば「ウラトイ」近傍には豺狼熊の類日夜出沒して馬屍を求め危險非常なりと現に「ムッウォイ」村より山道視察の爲め騎馬にて來りたる視察員二名は山道に於て二頭の熊の馬屍を曳きゆく處を實見せるのみならず「ウラトイ」近き森林より三頭の狼の襲ひ來るに出遇ひ之を銃殺し辛ふじて危難を免れたりと云へりされど明日を期し「ムッウォイ」村の獵狩者は猛獸獵狩隊を組織し道路に出沒せる猛獸を獵りつゝ此に來るべき豫定なれば是れにて幾分か旅行者の危難を免るゝを得べし貴客は定めし貝加爾湖畔に赴くものならむ暫く此處に滯在し山道の危險完く止むを待ち同行者を求めて此地を發し玉へ」と勸めらるゝまゝ旅裝を解き此處に一泊する事に決したり

二十五日天清澄時氣强寒攝氏零點以下五度を示し深く六七寸に餘りし泥濘は氷結して鐵の如く潺々たる溪流も兩岸凍氷して流域縷に似たり試みに雪上を飛躍して氷結の强弱如何を試みしに僅かに靴痕を留めしのみにして堅きこと石の如し急き旅裝を結束して氏に告別し訣別の宴に閑談時を移し微醉を帶びたるまゝ鐵靴輕く單身南貝加山徒步跋涉の途に上る

其四　第五回の遭難

孤劒双靴少許の行李を肩にし鐵葉製の釜を携へ手頃の棒を右手にし遠征歌を謠ひつゝ拍子を取るが如くに「カテウ」(釜のこと)を敲き短脚輕く鐵靴をならして西北に向ふ一步は一步より高く積雪は層に層を加へ根松赤松の森林は濃に濃を增せり進むこと五露里積雪四尺餘に及び道路狹隘二人肩を並べて同行し難し右方は鋭き傾斜をなせる峻坂にして千仞の幽谷より送り來る滾々たる溪流の音最と凄じく耳朶に響き左方は斷岩巨石將に墜落せむとするが如き狀を爲し赤松白樺根松の巨木は山道を掩ふて蔭なほ暗き觀あり峻坂人煙なく唯山鳥の啼くを聞くのみなりしが心寂しさに耐へず行々啄木鳥を銃擊しつゝ夢の如くに五六露里を進み上り二三の人家ある處に出でたり人家の構造は全く「キャツタ」地方と趣を異にし庇の如きは殊に堅牢なる柵欄を繞らし以て猛獸の害を豫防せり此地の住民は四季野獸を獲て之を鬻ぎ以て生活を營み傍ら旅人を宿泊せしめて生計の幾分を補ふるものなるべし住民の風俗粗野にして容貌の獰惡なる一見其流罪人たるを知れり氣味惡しき儘余は足早に此處を立ち去り夫より峻坂を迂回し山嶺重疊の半腹を左右に進み漸く貝加爾山の頂上に出づれば積雪七八尺鑿道の如き雪路を馳せつゝ足を早めて北に進む露里許積雪漸く五六尺に減じ道亦少

しく開けたり此邊より赤松なく唯矮小なる白樺のみ繁生せり進むと露里許にして山道上り盡る處氣象測候所あり就て之を檢すれば寒暖計三度を示せり掲ぐる所の統計表を見るに千八百九十九年一月三日には零點以下四十五度一を錄しつゝあり其盛冬の際には如何に寒烈なるやを知るに足るべし此際余は戸を叩きしに小童出て來り「何の用ぞ」と問ふ「主管者は在宅なるや」と問ふに「獵狩に出て去れり」と答ふ已むなくも此處を發して「ウラトイ」に向へり時正に午後二時「ウラトイ」に至る猶ほ六露里餘りあり然れども是より山道は西北に傾斜せるが故に歩行容易にして鐵靴滑らかに動もすれば二三間は足を動さず立ちたるまゝ下りし事さへありたり此邊は南貝加爾山脈の殆んど中央に位し海面を拔くこと五千七百尺氣候の尤も寒烈なる所にして幽谷には四季積雪融解することなく連山重嶺凡て根松の森林を以て掩はれ積雪盛なる時には一丈四五尺に及ふと云へり見渡せば皚々たる銀峯は起伏偃臥して山又山其極まる所を知る能はず遙かの圓谷より響く潺々たる谿流の音最と哀れに聞え嶺上より送り來る滔々たる松濤の聲心を寒からしむ山道人なく鳥聲亦稀れに寂寥たる孤客の旅情を慰むる栗鼠、啄木鳥さへ見當らず唯立枯の朽松森々たる根松皚々たる積雪の外此山道に於て見るべきものなし旅情此に至りて蕭索夢の如き過去を想ひ漠々たる多難の前途を思ひなどし感慨胸に迫り思はず落つる一滴の涙を山道旅行の紀念となし時後れぬ間にと飛ふが如くに馳せ下りしが「ウラトイ」の「ヲモアイ」(馬宿)に着したるは午後四時にして太陽已に山に入りし後なりき。

「ウラトイ」は南貝加爾山脈の北部半腹に位し貝加爾湖を距る二十二露里「キャフタ」に至る百七十六露里の處にあり地は山道の殆んど半腹に位せるが故に氣候寒冷にして四季雪絶ゆることなし冬期長く夏期短し即ち八月中旬より翌年六月初旬に至る殆んど九ヶ月半は積雪消盡することなく夏期としては唯だ二ヶ月半に過ぎず即ち此間に於て萬草は萠芽し開花し落花し結果し成熟する等春夏秋の三季は實に此二ヶ月半内にあるなり冬期盛寒の際は攝氏零點以下四十五度に下ると珍しからず夏期盛暑の際亦四十二三度に上ることあり概言すれば春無く秋無く夏より冬に、冬より夏に遷る氣候の變動速かにして盛夏の時と雖も中夜寒に耐ゆる能はざることあり加ふるに重嶂疊巒の間に位するが故に冬期夏期共に日短く殊に冬期の如きは日光を見得べきは僅か二時間内外なりといへり在住せる二戸に要する飲食物は凡て之を貝加爾湖畔の「ムソウオイ」村に仰ぐを常とす馬宿の柵内には車輛百餘臺貨物を載せしまゝ半ば雪中に埋れつゝあり是れ余が屢々嶺南に於て聞きたる商隊一行が殘留せる貨物なりと、此夜余は主

婦を呼び「湖畔に出づる道路如何に」と問へば主婦答ふる樣此地より湖畔にいづる山道は益々下りて上るべき峻坂なきも十四露里の處よりは積雪殆んど絶え旅行大に便宜となるべし唯だ憂ふべきは是より七八露里の間猛獸出沒するの危險にありされど日中は恐るべきにあらず唯だ薄暮より曉に至る迄は最も注意を要すべきなり現に深夜豺狼の類は群をなして人家近く徘徊し熊は夜毎に來りて廐牛小屋を窺ふなり此頃隣家驛傳に於ては白昼一頭の犢牛と一頭の豚とを「熊の爲めに攫み去られしとありし」と是より主婦の心付にて床蟲の襲撃する憂もなく長椅子に身を横たへ明日に於ける旅行の方法など考へつゝある中何時しか堅き夢に入りぬ

九月二十六日午前七時柵外を見れば野獸は大小の足跡を雪上に點印して主婦の言の如く前夜も亦柵外を徘徊せるものゝ如し盥嗽せむとて柵を越え屋後の溪流に近づけば此處には生々しき斃馬の肋骨の横はれるを見たり蓋し猛獸の齋らし來れるものなるべしと思ひ室内に歸り旅裝を結束して此處を出發せしは午前九時なりき

輕裝短銃を帶び數多き彈丸を懷にして不時に備へ長靴を紐もて嚴重に縛り白樺の手頃なる棒を携ひ「カテウ」を左手にしつゝ此處を出發せしに間しに違はず濃厚なる根松類の森林を以て飾られたる峻嶺間の幽谷に向ひ傾斜鋭き阪路を下りしが二三露里の山道は巨高なる森林を以て掩はれ道路は薄暗く溪流の音凄じく山頴寂として聲なく旅情轉々蕭索に堪へざりしが行々「カテウ」を鳴らし短銃を握り前後左右に心を配ばりて進む二露里許りの處より斃馬の骨此處彼處に狼藉散在し首なきもの胴のみにして首尾なきもの頭尾四肢は處々に散在して貪婪なる野獸の爪牙に荒らさるゝ慘狀見るに忍びざりしかど是等を瞥見する暇もなく走るが如く足早やに歩を進め「カテウ」を鳴らしつゝ北に向ひ坂路を下る大凡露里と覺しき頃果せる哉二頭の野獸の山道に横はれる馬屍を貪り食ひつゝあるを發見したり此處に余は最早猶豫すべきにあらずと行李を投げ卸し短銃の裝彈を改め徐ろに發射の用意を爲しつゝ周圍二尺ばかりなる根松に攀ぢ上り拳下りに狙ひすまして一發放ちしに彈丸は何處に飛び去りしか續け打ちの六發に裝彈は空しく射盡くして最早詰替の要意なきより除儀なく「カテウ」を繰り上げ手頃の枝を切り取り亂調烈しく之を叩きしに少しも感ぜざるものゝ如く見る間に屍馬の肋骨を食ひ荒したりされど猶ほ飽き足らざりけん一頭の猛獸は耳を聳て鼻を鳴らし四邊を見廻しつゝ馬屍を索むるものゝ如く聽がて余が攀ぢ上りし根松の下へと近寄りたり彼等の見上げざる中にと狙ひすまして前方の猛獸めがけて勢鋭く投げ付けたる「カテウ」は轟々と木魂に響き順調なる谿間の水音を亂して此處彼處の松枝

を擲ぐりつゝ猛獸の足下近く落ちたる響きは百雷の如くにや感じけむ躍り上りて一聲叫ぶと等しく身を反へして左方の森林深く馳せ入りたり

猛獸の再び來襲せぬ間にと落つるが如くに樹を下り手早やく行李を解き彈丸を懷中に投げ入れ再び根松に攀ぢ上り裝彈に餘念なき折しも遙かの下方に銃聲夥しく狼の吼ゆる聲手に取る如くに聞えしより「さては彼奴等友を呼びしと覺えたり貝加爾山の狼は友を呼び隊を集むるに速かなりと聽きしに違はず余が爲めに驚かされて叫びたる一聲は幾十百の狼群を集合せしめたるならんされど銃聲の聞ゆる一事こそ不審の至りなり」と考ふる間もなく吠吼しつゝ疾風の如く左往右往に樹間を縫ふて遁れ走る狼を認めしより短銃を取出し盲打ちに二十發を打ち出せしかども一發だに命中せざりけむ雪上に亂點せる血痕を認むるのみにて叫喚の聲は次第に遠かりたり間もなく下方より獵狩の一隊は馬蹄輕く雪を蹴立てゝ上り來るを見るより余は急ぎ樹を下り飛ぶが如く一隊近く馳せ行きぬ。

事の意外に驚きたる一隊は一々余の說明を聞く度毎に驚嘆しつゝありしが余の爲めに意外の獲物に出逢たるを喜び前途の壯遊を餞けせむとて醵金せるを固辭し行李を肩にしたるまゝ此處を馳せ出したり途次行々狼籍せる馬屍には見向きもせず飛ぶが如くに馳せつゝ薄暗き森林を横ぎり峽谷に隨て走り下りしに道途雪中に埋沒せる驛傳馬車荷馬車旅行馬車等の十數臺を見受けたり此等によりて察する時は九月八日の降雪は山道旅行者に對して實に非常なる殘酷を與へたるものなるべし「ウラトイ」より道路經る處積雪四五尺道路にして道路に非ず唯樹林なき處を撰び凍結せる雪上に因りて歩を進めしのみなりき峽谷に隨て下る六七露里山道は左右に迂回して山又山其盡くる所を知る能はず俗稱三番橋に至り漸く樺樹の根松に混生せるを見しが此邊より積雪大に減じて一尺四五寸許りに及び森林には斧鉞の入りし形迹を認め三番橋よりは最早や馬屍を見る能はざりしが馬車荷車鐵器の此處に投棄しあるを見受けたり是より余は少しく心を安んじ二番橋に至りて行李を卸し時を檢すれば正に午前十一時半「ウライト」の驛傳より此處に至る十五露里を僅かに二時間半にて馳せ下りしなり少憩後此處を發し幽谷に隨ひて西し或は北して下りしが七露里の間峽谷の左右は嶮峻なる山脈にして野火の爲めに燒燼したる根松の立枯れを見るのみ殆んど山脈の傾斜盡る處遠からざる前路に當り茫々として天涯極まりなき一大水域を認めたり是れなむ有名なる貝加爾湖にして難なく「ムソゥオイ」村に達したるは九月二十六日午後四時なりき

「ムソウオイ」村

「ムソウオイ」村は貝加爾湖の南岸南貝加爾山の北麓にあり南東は蜿蜒せる南貝加爾山を控へ西北は汪洋たる貝加爾湖に瀕せり市街は東より西に走れる小低原中に設けられたる新開地にして之れが豫定地は長さ三露里幅一露里半に亘る官設諸建築物を加へて全村の戸數大凡百内外と數へらる地に村役場、驛傳、郵便電信局、火災保險會社代理店、露清陸路貿易會社出張店、後貝加爾州鐵道事務局「ネムチーノフ」滊船會社出張店、官設埠頭、村立學校等あり地位水運陸輸の要衝に當り是より露清陸路貿易線路起り南貝加爾山を越えて「キャフタ」に通ずる道あり貝加爾湖より「セレンガ」河の上流「ベリユトイ」に通ずる航路あり對岸の「リストウエーチノイ」及び「イルクーツク」府に通ずる滊船航路貝加爾湖を迂回して「イルクーツク」府に至る國道及び鐵道線路あり貝加爾湖の北部各處に達する滊船航路あり換言すれば「ムソウオイ」村は水陸運輸上四通八達の衝に當れる交通上樞要の地にして此地を經て四方に輸送せらるゝ貨物は實に莫大なるものなるべし

市街豫定地の過半は荒蕪の低原と溜水多き澤地とにして白樺茂生し枯株は處々に狼籍散在せり

されば現今の「ムソウオイ」村は湖邊の寒村として見るに足るべきものなきも露政府は此地を以て將來町制に編入せんとするの設計あるが故に來住するもの日々に多く建築物も亦月に增設するの觀あり住民寄留民の多くは猶太人にして十分の四は「チエルキーズ」「タヽーリン」「セメンスキー」「ハヽウ」清人「ブリヤーツキ」「チエルミヤーク」「アルメニヤ」「ツイガン」等の諸人種を以て成れり就中流罪人の「タタールリン」「チエルキーズ」「セメンスキー」人等は最も惡兇猛にして晝間は南貝加爾山道に出沒し夜間は市街に隱見して行人を刼かし或は人家を襲ふこと珍しからずされど將來該村の發達はもとより疑ふべからざる事實にして上黑龍江「シユカ」河畔の「ストレチエンスク」と粗々其運命を同ふするに至るべく殊に「ムソウオイ」村より南貝加爾山の峻坂を踰え露清陸路貿易線によりキャフタに通ずる鐵道布設豫定の計劃も確なる事實なれば湖畔の該寒村は十數年の後に於て後貝加爾州中有數の商業地となるや必然の勢にして迅速なる長足の進歩をなすべきは世人の豫想外に出づ可し

○「イルクーツク」縣

其一　貝加爾湖横斷

貝加爾湖は亞細亞洲中最大の湖水にして土人之れを聖海と稱し支那人は之れを白海又は聖海と稱す水域の長さ六百露里餘廣袤二十五露里より八十五露里に及び面積三萬〇〇三十四露里海面を拔くこと千五百六十一呎の處にあり水底最も深き處其幾露里なるやを知る能はずと雖も千八百九十九年貝加爾湖測量遠征隊の說に依れば湖水の中央は三千百八十五呎にして北部と南西部との數ヶ所は露里半乃至二露里に及び殊に北部の如きは三露里の錘丸だも全く水底に達せざる處ありと水底には諸種の水草あるかの如くなれども是れとて詳かならず湖水は盛夏の時と雖も寒冽にして宛も氷水の如し測量隊は湖底最深の模樣を探らんと欲し潛水者をして之れを探らしめしに十分間だも湖水に潛む事能はず爲めに探檢は空しくなれりと云へり湖底は凡て古生層岩にして水草多く諸種なる魚類其間に悠遊し甲殼類亦少なからず湖水清冽透明湖上風無く波睡るの際は三四間の湖底を明かに見得べし魚族の重なるものは鱒、鮭、鯨、「オーモリ」「シチユカ」「バリユース」「オークニ」「タイメン」等にして就中「オーモリ」は此湖の名産として諸方に輸送し其價格亦高貴なり湖水は北貝加爾と南貝加爾の山脈を以て圍繞せられ湖畔は劒を植えたるが如く屏風を立てたるが如き嵯峨たる峻嶺を以て裝はる湖中には幾多の島嶼散在して風景奇絶山光明媚なり其平時氣沈み風死するの際は湖水油に似て磨ける一大玻璃の如く清風徐ろに吹き起るの月夜銀波漣漪として星光水底に動き四顧清絶の美觀ありされど颶風の起るや湖水暗憺として碎波天に漲り激浪濤々として天地を震動し或は龍卷となりて水柱を作り或は之れを攫みて山巓に拋つ等其猛烈强大なる到底海洋の如き比にあらずと航海者は語る余が「ムソウオイ」村着後二週間は日夜瘴霧固く江山を鎖ざし貝加爾山より吹き送る山嵐は時々吹雪を齎らし來り激浪濤々として湖畔の岩石を摶ち埠頭を嚙むの勢凄まじく爲めに航路全く梗塞せしが十月十二日に至り蠻烟遠く去り瘴霧完く歛まりたり余は此日午後五時發の滊船に搭じ此處を出發する事に決し知人を歷訪して別を告げ滊船「シベリヤーク」第三號室に乘込みたり

汪洋たる蒼波を蹴立て轟々たる輪聲高く白き二條の碎波と黑き一條の煙烟とを引きつゝ「シベリヤーク」は湖畔を去る十露里許りの處に到りしが進行は遲々として一時間の速力三露里を超えざりき夕陽西に入り遠山紫色を呈せる頃より微風起り船體は此

時より一高一低波に隨つて動搖し始め午後十時頃より風力强を加へ船體の動搖益々甚しく波浪の甲板を浸すに至り乘客中已に嘔吐するものさへありしが余は心地よくも長椅子に身を横たへたる儘曙近き頃まで堅き夢に入りぬ

汽笛の聲に夢は破れしが時を檢すれば正に四時半窓を推せば東天已に紅を潮し烟霞貝加爾の峻峰を包みて山は雲の如く雲また山に似たり此時風止み波隱やかに漣波玉を散らして去宵の風浪險惡なるに似ず甲板上朔風に栉られ寒天に曝されつゝ濃き夢に入りたる數多き乘客の鼾聲は此處彼處より洩れ聞えて雷の如し上着を着けたる儘飲食所に到り茶を要意せしめ甲板に出でゝ貝加爾湖の光景を見る

今朝蒼空一點の雲片だも留めず貝加爾の峻峯を包める烟霞は此時已に朝暾のために消失して跡無く旭に反射する皚々たる銀峯は幾十の白點を空中に現はせり湖水を圍繞する重巒疊巒は鋸齒のごとく突屹として湖畔近く蜿蜒せる山脈は蒼くして湖水と同一色を爲し魏然として湖畔遠く聳ゆるの連峰は銀塊を重ぬるに似たり南北の二部は連山の光景を模糊の間に見得べけれども東西の二部は唯茫々たる水域を見るのみ顧みれば余が跋涉したりし南貝加爾山の重巒は白雪皚々として幾條の白光を放ちつゝあり湖面より上る蒸發氣は湯氣の如く間々北より送る微風は湖水を撫づるに似たり湖上松濤を聞く蕭索もなく快もなし唯車輪の水を切る音のみ耳に入りしが船は遲々として「リストウエーチノイ」指して進行し此邊よりは六露里許なるべしと想像せらる

貝加爾湖の結氷と解氷

貝加爾湖の結氷と解氷とは年々其時期を同ふせるが如し或は年に依り遲速あるも一週間內外を出でず結氷は十二月一日より五日の間にありて解氷は四月二十五日より五月一日前後(何れも露曆)にあり其結氷の模樣は十一月中旬より此處彼處に於て氷結したる氷塊の陸地近く漂着したるものより漸次氷塊と氷塊と相附着し始め日を追ひ增加する內風浪のために破壞せられ湖水深き處に漂流して處々より漂流し來る氷塊と互に相固着して一大氷塊をなし漸次に其區域を擴張し遂に湖水の全面を掩ふに至る即ち貝加爾湖の結氷は周圍の湖畔よりするにあらず湖水の中央より氷結するものなり其氷塊全く附着するや時に颶風のために破壞せらるゝ事あるも此時は唯恐しき響を發するのみにて片々相離散することなし其氷結全く堅固となり湖上を橫斷し得べきは結氷後一週間以上を要するも時氣の寒暖に依り或は五日間にして氷層二尺乃至四尺に達する事あり湖面の橫斷は例年十二月十日以後にして湖上には二ヶ處若し

くは三ヶ處の驛傳に類似せる休憩所を設く湖畔「ムソウオイ」村より對岸「リストウエーチノイ」村に達する六十一露里は三頭曳の驛傳馬車にて五時間乃至六時間にて達すべし晴天風なきの日は勇壯快絶なるも間々北貝加爾山より吹き送る山嵐と南貝加爾山より吹き下す颶風と相衝突して旋風となり強大猛烈の風勢は氷塊を飛ばし或は三頭曳馬車を捲き上げ人馬共に之れを數町の遠きに投ぐる事あり此旋風は旅行者のためには非常に危險にして湖上の粉雪は氷塊と混じて飛揚し天地晦暝四顧暗憺氷塊叫び粉雪鳴る此時に至りては驛傳馬車は唯微かに見ゆる目標を辿り處々に突屹崛起せる氷塊を蹴立てゝ進行せざるを得ず此際時としては道を失し龜裂の割目に人馬共に陷落することありと云ふ

十二月下旬より堅氷固く湖面を鎖して最早陷落するの憂なきも旋風の難亦少々にあらず四月半に至り沿岸近き淺瀨より解氷し始め四月廿日頃に大風のために大龜裂を生じ或は破壞して大氷塊の徐々に漂流する事あるも再び寒氣のために相固着して湖面を掩ふに至る概して貝加爾湖の交通は一年中十ヶ月間にして二ヶ月間は交通殆んど不通なりされば此二ヶ月間の交通は貝加爾湖迂回線路によるも此線路は泥濘深く道路險惡なるがために非常に長時間を費さゞるべからざるの不便あり湖上の横斷に最も危險なる時期は十二月初旬と四月中旬にして此時期に於て屢々溺死者を生ずることあり五月一日以後に至れば幾回か颶風のために破碎せられたる氷塊は時氣の暖なるため固着するの力なく或は漂流して沿岸に着し或は湖面に漂ふも五月十日後は最早氷塊を見る能はずと云へり千八百九十九年より碎氷船を用ひて一方は交通運輸を圓滑ならしめ一方は碎氷の用に供したり碎氷船を「パヒカル」號と名つく「アームストロング」會社の製造に係り噸數四千二百馬力三千七百五十にして船躰の長さ二百九十呎巾五十七呎深さ十八呎あり一時間二十露里半の速力を有し全搭載力は貨車二十五輛乘客百五十人を搭載し得べく厚さ四尺の氷層を碎破するの力を有して世界最新最大の碎氷船として著し此他碎氷船「アンガラ」號あり船躰の長さ百九十五呎巾三十四呎深さ十五呎一時間十二露里半の速力を有し馬力千二百五十に達し厚さ三尺の氷層を碎破するの力あり現今此二碎氷船の搭載する實力は日々二列車以上の運搬力に匹敵すると云へり

時は移り午前七時「シベリヤーク」號は貝加爾湖西の碇繫場「リーストウエチノイ」村に達したり埠頭には「チムチーノフ」汽船會社の所有船六隻は湖邊に沿ふて碇繫し十餘隻の曳船は此處彼處に散在せり是れより汽船乘客屯駐所に入りしが間もなく稅關官吏は

一名の下吏を從へ來り一々乘客の行李を調査したり蓋し課稅物即ち茶絹類の密輸入を防遏せんがため檢査するものならん

「リーストウエチノイ」村（一名リストウヤンカ）

村は貝加爾湖南の「ムソウオイ」村と水路六十露里を隔てゝ相對峙し貝加爾湖畔中水運陸輸の勝地を占め「ムソウオイ」村に下らざる要地にして露清陸路貿易會社出張店「チムチノーフ」汽船會社事務局郵便電信局稅關官設倉庫火災保險會社代理店旅店寺院等あり地位陸輸水運の要衝に當り是れより「イルクーツク」府に通ずる西比利亞鐵道あり國道あり汽船航路あり上「アンガラ」河口に通ずる航路あり「チムチーノフ」汽船會社の汽船八隻は此處を根據として日々各處に向ひ航行せり而して此等の航路中上「アンガラ」航路には年々政府は補助金として一露里につき一留五十五哥即ち航通一回分二千百七十留の割合を以て五回分の補助金一萬八百五十留を給せられ其他の航路にも亦一露里につき一留八十五哥航通一回分二百九十六留の割合を以て七十八回分二萬三千八十八留を給せらる即ち總補助金は三萬三千九百三十八留とす汽船の構造躰裁は年々之れを革新し電氣燈を利用するに至れり殊に汽船碇繫場の如きは數個の大電氣燈を點じて四邊宛ながら白晝の如き觀あり碇繫場より少しく西する處小岡谷ありて市街を擁するが如き高丘は兩分せらる市街の南部湖畔に沿ひ南する一露里にして「アンガラ」河となる此處に渡船あり小汽船或は小船を以て乘客を往來せしむ

午前十時「ヒョドシー」號は此處を發し湖水を南に進む露里許にして「アンガラ」河に入り六十露里の航程を五時間にて十月十四日午後三時「イルクーツク」府に達したり

其二　「イルクーツク」府

「イルクーツク」府は東部西比利亞の最大都府にして「アンガラ」河の左岸にあり千六百五十二年の頃「イツンボヽーフ」なるものに因りて「イルクート」河畔に創設せられ胡索克の十數名も此處に移住したりしが千六百八十二年「イルクーツク」水戰隊組織せられ仝八十六年に至り「イルクーツク」市街豫定地は不規則ながらも「アンガラ」河の左岸に區劃せられ千七百三十一年東部西比利亞の重なる軍用地として陸軍出身の武官は總裁に任せられたり其首府として定められたるは千七百六十四年十月十九日にして現今の後貝加爾州及「ヤクーツク」州は何れも「イルクーツク」府管轄の下に州務は取扱はれたり千八百五十八年愛琿條約締結後黑龍州沿海州も亦西比利亞總督府の管轄に屬する事となり此處に「イルクーツク」府は東部西比利亞中軍政の樞軸を執れる唯一の都府として宗教工業商業軍備を擴張せしめ發達せしむる東部西比利亞中央政府の如き觀を呈す

るに至りたり

今を距る二十二年前即ち千八百七十八年の祝融に市街の大半は烏有に歸し被害戸數三千餘に及び寺院三十は完く焦土と化せしが其當時の內務大臣は訓令して市內に喫煙を禁ぜしめたるが如き慘憺たる火災にてありき此火災にて市街少半の富は殆んど殺滅せられたりと雖も爲之市民の多數は數十年來の惰眠を覺まし貿易工業上の新智識を輸入し來り爾來木造建築物は殆んと煉瓦又は石造に改築せられ從來の市街を一變するに至り今や市街整然縱街十二橫衢十七に分たれ四通八達巨商大賈軒を連ねて櫛比し規模宏壯結構美麗を極め人馬の往來織るが如き觀を呈するに至れり街衢中の重なるものは大町にして東北「ズナメンスキ」區より西南「アンガラ」河に達する距離大凡五露里餘に及ぶべく有名なる富豪は重もに此大町にあり黑龍町には數多の官衙公署を設け總督府廳は「アンガラ」河畔に建設せられ兵營は軍人町に散在せり地勢に因り全市街は四大區に分たる即ち本區「ズナメンスキ」區「アラボーチ」區(一名レシーホ)「グラズコフスク」區(一名ワキザル)にして此四區內に散居する住民の數は最近の調査に依れば男二萬六千五百十七人女二萬四千九百十七人計五萬千四百三十四人と算せらる市街中重なる建築物を擧ぐれば左の如し

東部西比利亞總督府廳、陸軍參謀本部、總督府官房局、「イルクーツク」縣廳、市役所、警視廳、東部西比利亞收稅局、御料局支廳、郵便電信局、地方裁判所、陸軍監獄署、監獄署、西比利亞鐵道廳支局、電話交換所、私設電燈會社、諸銀行及び支店、各保險會社支店、諸學校、諸病院、博物館、圖書館、諸研究會及び同窓會、諸倶樂部、劇場、諸釀造及び製造所、諸工場、諸印刷局新聞社、一等商店、旅館、數多の寺院、

等にして此他諸々なる建築物中殊に人目を惹くに足るべきものまた少しとせず

「イルクーツク」府の地勢と交通

地位北緯五十二度十六分東經百四度十六分の處にあり海面を拔くこと千四百七十九呎西部を除くの外は凡て濃厚なる森林を以て圍繞せらる市を距る遠からざる東方には「プシニーチャヤ」の跟谷橫はり北部また高峻ならざる森林に因りて遮らる而して西部の一方「アンガラ」河に沿ひ數多き湖沼を控ゆるを以て「イルクーツク」府の氣象に西風は必ず雨霧を意味するなり「イルクーツク」市街を橫斷し東より西に走る「アンガラ」河は貝加爾湖の發源より「エニセイ」河との會點に至る河身の長さ大凡千六百露里流域中「イルクーツク」近傍に於ける河巾二百五十乃至三百「サージェン」に及び深さ十三呎より三十呎內外に達す流勢極めて迅速世界中屈指の急流を以て數へられ河域中緩流の處と雖も

一秒間に一米突六七に及び地盤の傾斜鋭き處は一秒間に二米突内外の速力を以て奔流す水質無臭甘味透明にして二十呎の河底に悠游せる小魚を數へ得べし加ふるに水溫非常に低く其盛夏炎暑の時と雖も攝氏の七度を上る事なしと云へり

地は露都彼得斯堡府を距る五千七百四十五露里浦鹽斯德を距る四千百七十七露里烏拉爾山を距る三千五十二露里「ヤクーツク」に至る二千七百四十三露里露清の疆界線「キヤフタ」に達する水陸最近距離三百十二露里餘に過ぎず莫斯科街道の關門として陸輸の要勝を占むるは論を待たず其水運に至りても「アンガラ」河の六十露里を遡れば是れより三萬三十四平方露里を有する貝加爾湖上の航路は四通八達湖中に流注する三百三十六條の河域を遡るを得べし「アンガラ」河を流下すれば「エニセイ」の大河に依り北氷洋に出て海路歐露巴に廻航するを得べし「エニセイ」「オビ」兩大河連絡の運河に因て「オビ」河に出て流に隨へば北氷洋に出づべく「エルトイッシュ」河を遡れば「セミパラチンスク」町に達すべし即ち「イルクーツク」府は陸には西比利亞鐵道を以て歐亞を連絡し水運も亦歐亞を連接する地點と知るべし

「イルクーツク」府の商工業

「イルクーツク」府は地勢上より商業上重要の位置を占むるの地にして東亞西歐南清北海の四方面より輸入する貨物夥しく輻輳し其輸出する金額も亦少々にあらず輸出品の北部に向ふ重なる貨物は茶、酒、煙草、砂糖、織物、麥粉、雜貨等にして北部より輸入するものは獸皮、魚類を重なるものとす其南清より輸入する商品の重なるものは茶を以て第一とし絹布之に亞ぐ歐露よりは雜貨、金屬品、織物、鐵器、石油、砂糖、果物、煙草、酒精等にして東部よりするものには著しきものなし而して此等商品の重なるものにして年々の輸入額平均千百五十萬留に及び就中織物類は八百萬留を占め又歐露南清等に輸出する貨物は價格殆んど四百五十萬留に達し北部「ヤクーツク」州及び四近の州縣に向つて輸送する貨物は七百萬留に上り全市街千五十戸の商店に於て販賣する商品の總額は千八百九十九年に於て千九百六十九萬留以上に及びたりといへり

案ずるに市内に於て販賣する貨物は頗る高價なるも飲食品は割合に廉なり其曾て西比利亞大鐵道の貫通せざる以前は物價非常に貴かりしが鐵道貫通以來の諸物價は經濟社會に恐慌を來さむ迄てに低落したり即ち鐵道貫通以後に於て麥類の如きは價格四分の一まで低落し其他の貨物も之に準じて三割乃至四割の低落を來せりといふ

商業の最も繁盛なるは大町にして此處には一等商店多く何れも規模宏大商品豐富歐露の巨商に讓らず公共市場は市街の中央二ヶ處に於て設けられ一ヶ所は麵麭小市場

にして他は雜貨雜穀の大市場たり此處には雜穀、織物、金屬品、毛皮、肉類、蔬菜其他種々雜多の商品は販賣せられ四方の村落より農民の來集するもの日々千を以て數ふべく市街中最も繁盛雜沓を極む。雜貨品中日本品は凡て高價にして元價の三倍乃至六倍を拂はざるべからず就中粗造廉價の日本雜貨は到る所見ざるはなし從來「ゴルシコーフ」「ルキーン」合資會社は「日本商店」なる標札を掲げて一時盛んに日本商品を販賣し利純も亦少なからざりしが輸入稅增加以來收支相償はざる爲め今や全く輸入を中止するに至れり該市日本品の賣行は清國品に比し其價格の廉價なるだけ購買力も亦盛にして特に其製作の巧妙華麗なるは歐州品を壓倒するの勢あるも惜むらくは西比利亞の如き建築物内に永く保存し能はざる缺點あり當業者にして此缺點を改良せば日本貨物は將來多望なるべし該市中には清商十二戸あり取引活潑にして販賣高亦頗る巨額なりと云ふ

工場として「イルクーツク」府に現在せる諸製造所工場は其數六十以上に及ひ千八百九十八年の調査に依れば十二製革場、五石鹼製造所、五火酒醸造所(現在は九)四麥酒醸造所(現在は六)二麵麭モト製造所、一煙草製造所、一燈火製造所、二截木工場、十二煉瓦工場、一銃工場等にして其千九百年に於ける各工場製造所より製產せる價格は六十萬五千二十五留に達せりといふ。

市の歲入は千八百九十八年に於て五十三萬四千留にして六萬七千留は町役所の支出に係れり。

其三　「イルクーツク」府の氣候

河流を控え山脈に倚り森林に擁せられ湖沼に瀕せる「イルクーツク」府の地勢は大に氣候の激變を現出す甑底に蒸さるゝが如き炎熱も夢の間に消盡し八月下旬に至れば太陽光熱次第に衰へ地熱また漸く減じ九月始めより寒氣頓みに加はり嚴霜雪の如く降雪綿の如く北貝加爾山より又貝加爾湖より送り來る寒烈なる飄風と濃霧とは冷氣肌骨に徹するを覺ゆべく九月中旬に至れば空氣乾燥し始め水は冷やかに死水は氷りて三分許の薄氷を見るべく此時に至れば南北に聳ゆる貝加爾山脈の峻峰は白布に包まるゝが如く積雪皚々として寒氣益々加はり市民をして扉戸を綢繆せしめ羊皮を準備せしむるに至る

十月初旬に至れば已に一尺内外の結氷を見るべく十一月初旬よりは寒氣大に加はり日愈々短くなるに隨ひ太陽の光熱愈々減じ夜益々長きに隨ひ夜寒益々加はり時に或は攝氏零度以下十五六に下ることあり是れより四輪の馬車は橇に代用せられ「アンガ

ラ」河の沿岸「ウシヤコフカ」の支流は凍合して結氷鐵板に異なるなし十二月中旬より寒氣益々激烈を加へ山嶽湖沼高原平野江河森林の別なく滿目一樣の銀世界に變じ天地凍氷するの光景慘憺を極め時に東部の貝加爾湖より風揚して來る瘴霧と市街幾萬の烟突より騰る煙烟は凝結して粉雪となり樹枝に時ならぬ華を飾るの絶景言はん方なく胡馬の鼻頭に結着する氷塊髦に凍合する氷柱は暖帶地方より來る旅行者の膽を寒からしむ十二月下旬は寒氣の最も酷烈なる時期にして零度以下二十八乃至三十五に下る事屢々なり此時に至れば「イルクーツク」府の天地は死せるが如く聲無く生氣なし優美にして愛嬌ありし萬象は悽愴なる殺風景に化しさしも嬋々たりし軟風は次第に萬物を凍殺するの暴威を逞うするに至る

幾千の西比利亞旅行者をして月清く風死するの夜或は日麗かに波眠るの朝、水光の絶景に嘆賞戀々湖畔を去る能はざらしむる貝加爾湖は此時より漸次に猛烈の旋風を起すと同時に、滿目一樣なりし湖面の光景は忽ち變じて悽愴を極め雪塊を飛ばし氷層を揚げ沈靜死せるが如く安眠せるが如き「アンガラ」河の凹谷を蹂躙しつゝ叫喚奔騰當るべからざるの勢ひを以て「イルクーツク」を襲ふに至る

此の如き酷薄猛烈なる氣候は二月中旬まで繼續し三月初旬に至れば朝夕の寒氣は零度以下十五に下る事稀にして日中は太陽光熱のために六七度に上ることあり三月中旬よりは「アンガラ」「ウシヤコフカ」諸川の氷層薄き部分亦龜裂をなし其罅隙より洩れ出ゆる流聲宛がら羊兒の曙光に啼くが如く春鳥の花壇に謠ふに似たり

氣候は漸く春を呼起し光熱は萬象を瀕死より蘇生せしめて河流湖沼の氷層は暖かなる光熱に半年の夢を破らるゝと同時に地熱は益々加はり野草萌え出て木の葉生じ其發育の勢ひ極めて速かなり

氣候と犯罪の關係

殘虐酷薄にして酖酒なき西比利亞の氣候は柔弱者を斃し健康者を病ましむると同時に多くの犯罪者を生ず犯罪の種類と犯罪の期節とは固より一樣ならず一定せずと雖も放火、殺傷、强盜、竊盜其他德義に關する犯罪、社會の風潮に關する犯罪は重に氣候の將に變遷せんとする時期にあり即ち此時期來れば年々殆んど一樣の犯罪者は現れ來る總督府下に於て白晝百鬼横行するは即ち此時期にして大町黑龍町の如きは追剝、脅迫、强奪等の危險なしと雖も街燈影暗く行人稀なる郊外近き街端の如きは日沒後迂濶に孤獨の歩行をなすは實に危險を極む

殺して而して後に盜む兇惡なる西比利亞の强盜は猛烈なる氣候の如く其犯罪を構成

するや猶豫なく酖酌なし獰惡兇猛野獸に等しき强盜の一種は脅迫の言語を楯として掠奪を遂げんとするが如き迂遠の方法に賴るなく彼等の口舌は彈丸に代へられ腕力は短劍に替へらる此種の强盜は强盜中尤も危險なるものにて宛かも爆裂彈の如く之れと衝突したる不幸者は恐くは生命を全ふすること能はざる可し之に反し大膽にして而かも思慮ある强盜の犯罪者は犯罪の目的を達せんが爲めに巧みに警官を籠絡し妙に人目を晦まし輕く法網を潛り相手の呼吸を測りて諸々なる術計を廻らし或は酒店料理店青樓等に誘ひ爛醉せしめて金品を奪ひ或は魔睡劑を飲食物に投じ昏倒せしめて劍奪し或は行人稀れなる處に誘ひ之れを殺害し或は同志を誘ひ賭博を以て之れを詐取し或は無賴者をして爭鬪を挑ましめ仲裁する爲ねして懷中を探る等哀なる不幸者が此種の犯罪者に狙はれたる上は結局金品を劍奪せらるゝに非ざれば兇惡なる毒手に倒るゝを免る能はざるなり

案ずるに「イルクーツク」府に於て起る犯罪者の重なるものは强盜殺人犯にして窃盜詐僞賭博受賄等の如きは殆んど常習の如くに見做し何人も之れを怪しむものなし殊に狗盜が憚る所なく揚々として盜物を示して盜取せる順序と方法とを說明するの無頓着なるに至ては西比利亞に馴れざる人をして絶倒せしむ可く警官の之を認めて盜品の價格により盜稅(?)を徵收して得々たるは珍らしからぬ事實にして被害者の告發するや警官は鬚髯を撫て冷笑して言ふ「盜者の苦心と失者の不注意とを權衡に懸け輕重を量らば如何んと」文官司法官に向つて談賄賂の事に及べば哄笑して言ふ「苞苴は我妻の收入にして賄賂は余が內職なり」と此語は西比利亞官邊に於て殆んど一種の金言として崇拜せられ上長官より木の葉官吏に至る迄受賂を以て一種の內職の如くに思考し公然黃白を受けて憚らず世人また之を怪しみ尤むるものなし此懇惑す可き弊害の集中せる結果は左の如き「一瓶の火酒に輕罪犯者を走らし一塊の金貨に重罪犯者を逸せしむる」事實を現出する事珍らしからざるに至る

元來犯罪者の重なるものを調査し來れは數多き人種中「チエルキーズ」「グルジーン」韃靼人「ツイガン」人「セメンスキー」人等にして此れ等は「イルクーツク」「トムスク」間の流刑人村落より寄留し浮浪せるものに多きが如く就中高加索の「チエルキーズ」「グルジーン」人の犯罪者には爭鬪を以て人を殺傷せるもの多く韃靼人「セメンスキー」人の犯罪者には殺して後に盜む兇器强盜をなせるもの多く「ツイカン」人の犯罪者には窃盜詐僞をなせるもの多く小露西亞人「ポーランド」人「ユウレー」人其他の犯罪者には窃盜追劍贓品賣買等をなせるもの多きを見る而して此數多き人種の犯罪は各其人種に因り犯罪の種類を

異にすると雖も犯罪者の十中六七は重に流刑人にして流刑人ならざれば無賴の無職業者に多きの事實を認む

不德と兇惡とに衣食する犯罪者の外幾多の犯罪者が諸々の犯罪に身を誤る季節固より一定せずと雖も天性惡人ならざるもの丶俄かに犯罪を構成するに至ると兇悖の心を翻へして善道に赴かんとしつ丶ある可憐者を罪惡の深渦中に驅るは氣候の激變亦大に與りて力あり四月は氣候激變の時期に加へて「パースハ」と名づくる耶蘇復活紀念大祭日の來るべき時なり乃はち十二月の耶蘇降誕日と共に一年中の大祭日に數へられ貴賤老若は此時を以て舊物を改め衣食住より萬端の新調準備を爲すこと宛かも我國に於ける正月と盆との如しされば此二期の祭日は各一週間を繼續すべく其間國民は各常職を拋ち一年間寒に凍へ暑に汗しつ丶苦心勞働せる勞を慰むるの時期として富者貧者各相應の準備を爲すべき必要起る而して資產の豐かなる者は論外として此必要なる準備をなすに十分の餘裕を有せざる中流以下の或者は賭博、脅迫、竊盜、追剝、强盜、殺人等の惡逆を企つるも强ひて之れが準備を遂げんとの考より遂に各種惡事を爲すもの多きを見る即ち此二期の大祭日は年々幾多の良民を鐵窓獄裡に驅りて犯罪の渦中に投入する幾許なるやを知る能はず而して九月に至り氣候の激變は俄然凛烈なる寒氣を呼起すと同時に防寒の準備屬戸の綢繆衣食住共に煩雜なる生計に一變せざるべからざる時期として遊民中蟋蟀の如くに花間綠蔭に謠ひ珠の如き甘露に舌打を爲しつ丶飢凍の目前に逼れるを忘れ夢の如くに消閑せる無智の徒が氣候激變の爲め此處に防寒の必要に逼らるゝも咄嗟の間に準備する能はず衣食住に窮するの困難より不良の心を起し之れが爲め種々の犯罪を構成するに至る獨り無賴者のみならず中流以下の官吏等が受賄枉法の犯罪も亦重もに此時期に於て著しく發見せらる

旅行者試みに中流以下の「レストラン」及麥酒店に至らば早朝より警官の此處に屯駐し無賴漢と手を執りて歡笑し或は會飲するを見得べく夜半市民の夢濃やかなる頃警部收稅吏司法官等が「レストラン」主人の饗應に舌打しつ丶美酒嘉肴に快談する醜狀を發見することあるべく此等は大祭日の前後二期と氣候の將に變遷せんとする時期に最も多きを認め得べし常例の如くに自から之を甘んじ人亦之を怪まざる此等の奇觀外に於て警官、司法官、收稅官、及監獄官等が每日得る所の黃白は其等級、手腕、時期、場合等に因り固より一樣ならずと雖も要するに位置高きものには多額の內職あり位置低きものには小額の內職あるは殆んど一定せる事實なるが如し

千七百三十九年の頃曾て彼得斯堡府に於て陸軍少將兼警部長として在勤せる伯爵「ア

ントン、ヤウショウール」が「ヤクーツク」州の「アハウツキ」管區長官として任命せらるゝや左の如き奇妙なる訓令は一時府中の人を笑はしめたり

「年俸三百留を給す」「アハウツキ管區内に輸入し或は製造する火酒は百「ウエドラ」(一「ウエドラ」は二十瓶)に付百「チエトウエルチ」(一「チエトウエルチ」は五瓶)の割合を以て自由に徴收するの權利を與ふ」

假りに一「チエトウエルチ」の價格を五留とすれば百「ウエドラ」に對する徴稅額は五百留にして伯が一年の收入は實に莫大なるものなり即ち十萬「ウエドラ」に對する徴稅は五十萬留以上なるを見れば其實際は尚ほ此れより更に甚しかるべし

大詐僞、强盜賭博者等が官海と脈絡を通じて緩急相應し犯罪後容易に法律の範圍外に脱出する事實は余が屢々實見せる處にして深謀遠慮なる詐欺强盜賭博等の犯罪者は位置高き官吏を同僚とし位置低き官吏を弟子の如くに操縱する事實と警官が無頼漢と相共に昵近し連絡を通ずる理由は抑も亦原因なきにあらず要するに收賄者は美酒嘉肴に飽き黄白に懐を肥やし交際場裡の豪遊妻子の暖衣飽食等に要する雜費を得るを目的とし贈賄者は不正なる觸法事件容易ならざる犯罪事件の起りたる時容易に法網を潜るの準備所謂犯罪消滅の保險料として犯罪購買の豫備貯金とし税金として税金外の税金を拂ふは畢竟賄賂授受者各自の胸裡に各々複雜なる目的の存せるものと認むるを得べきなり

旅行者試みに市街近き郊外に到らば兵士、官吏、査官、商人、無頼漢等が錢投げ片牌等の賭博をなすを認む可く而して取締として見張番として二名の査官が賭博の群集に交はれるを見る可し探り來れば一名は賭博をなし一名は見張番として見張番は番毎に勝者より一割を徴收するを常例となす一勝一敗其賭博せる査官の完く失敗し了り無一物となるや彼れは見張番の査官と交代して更らに見張番となり一割の見張税を徴集し賭博の資本を得れば再び更代し循環代謝十數回後幾多の勝利を懐にするや意氣揚々直ちに飲食店に至り親密なる無頼漢等と鯨飲馬食其當時の勝利を誇りつゝ輿に乘じ遂に田舍躍をなすに至るは珍しからぬ事實なりとす

其四　西比利亞大鐵道

西比利亞の巨人「ムラウヵヨーフ、アムールスキ」伯に依りて立てられたる兩頭黑鷲の國旗が韃靼海峽高く朔風に飜えたりし其當時に於て西比利亞は已に露國の版圖たるべしと確認せし英人米人等が卒先となり烏拉爾山より太平洋に達すべき馬車道具加爾湖より上黑龍江に達すべき鐵道を敷設して西比利亞の交通機關を圓滿迅速ならしめ

んと企てたる設計は建議となり請願となりて一時要路の當局者在野の起業家をして指顧せしめたりしかども此緊急動議は果なくも雲煙過眼の裡に葬り去られたり千八百六十六年に至り「バグダーノウエチ」氏が歐露の一部「ルピンスク」より「テユメン」に達せんとする鐵道布設案の建議は起り之れと同時に西比利亞總督「クルショフ」氏が歐露の「ニージ、ノーウオゴーロド」より「ガザン」「エカテリングブルグ」經由「テユメン」に達せんとする鐵道布設案の上申は何れも有益の新事業として朝野の輿論を喚起したり此時代にありて「バグダーノウエチ」氏が建議案を北方線路と名つけ「クルショフ」氏の上申を南方線路と名つけ共に「テユメン」を極點とせるものなりしが此れ等の動議もまた千八百七十六年前後に於ける國家の多事に著しき阻格と障礙とを與へられ鐵道布設の感念は爲めに一時中絶の姿となりたりき千八百八十年に至り「エカテリンブルグ」「テユメン」間の工事は着手せられ其曾つて千七百九十七年露帝「パウラ」の時代に於て一時喧囂なりし「オビ」「エニセイ」運河開鑿の輿論は再び此處に繰り返され「オビ」「エニセイ」の水路を連絡して貝加爾湖東に達するを得べき希望は確められたると同時に水陸兼用論の唱導者なる「シデルスチル」「オーストロフスキ」氏等が建議は烏拉爾山より太平洋岸に達すべき水陸兼用の一事にして此時代より朝野の間に於て西比利亞鐵道の布設せざるべからざる緊急問題は解釋せられたり、されど殆んど十年間は財政の困難と國事の多端とに緊急なる鐵道問題を宛も放棄せるものゝ如くに觀過し去りたりしが千八百九十年に於て歐露の「サマラ」「ウファ」「ズラトウスト」「チエリヤービンスク」「オムスク」「クルガーン」「トムスク」「クラスノヤールスク」「ニージヂウヂンスク」「イルクーツク」間の中央線は可決せられたる後、貝加爾湖畔より浦潮斯德に達すべき線路もまた可決せられ西部は「ズラトウスト」を距る九十四露里の「ミアッス」を基點とし東部は浦潮斯德を起工點として東西より工事に着手する事となり千八百九十一年二月廿五日に於て遞信大臣の訓令に基き「イマン」浦潮斯德間の工事を速成せしめ仝年五月十日に於て開通式を擧行なしたり爾後中央線路の工事は着々歩を進めつゝありしが千八百九十三年に至り西比利亞鐵道布設法は確定せられ鐵道會議は開始せられ現帝「ニコラヒ」二世は之れが議長となり玉ひぬ

此れより先き西比利亞鐵道中烏拉爾山より浦潮斯德に至るの線路は三大區に大別せられたりしが第一區の「チエリヤービンスク」「イルクーツク」間三千〇七十八露里は千八百九十二年に起工し千九百年までに成工せしめ第二區「グラフスカヤ」(イマン)「ハバロフスク」間三百四十七露里、貝加爾湖畔「ムソウオイ」「ストレチエンスク」間千〇〇九露里は千

八百九十二年六月より起工し千八百九十九年を竣工期とし第三區貝加爾迂回線路「イルクーツク」「ムソウオイ」間二百九十三露里及び「ストレチエンスク」「ハバロフスク」間二千露里は千九百一年までを竣工期と定めたりしかも千八百九十六年に至り「ハバロフスク」「ストレチエンスク」間の線路は滿州通過鐵道布設のため布設を中止し專ら黑龍江の水路を利用するとなり「イルクーツク」「クラスノヤールスク」間は「オビ」河の支流「チユリム」河「エニセイ」河の支流「アンガラ」河の水路を利用せるため竣工期を早めて千八百九十八年に於て完成し「クラフスカヤ」「ハバロフスク」間は同九十七年に於て竣成なしたり抑も西比利亞鐵道と稱せらるゝは烏拉爾山より以東の延長鐵道線路の總名にして「チエリヤービンスク」より浦潮斯德港に達すべき線路は總て七千百九十四露里に上り大別して七管區となすこと左の如し

第一區　西部西比利亞線
「チエリヤービンスク」「オビ」(一名クリヲシチエコーヲ)間千三百二十四露里
第二區　中央西比利亞線
「オビ」「イルクーツク」間千七百五十四露里
第三區　貝加爾湖迂回線
「イルクーツク」「ムソウオイ」間二百九十三露里
第四區　後貝加爾線
「ムソウオイ」「ストレチエーンスク」間千〇〇九露里
第五區　黑龍線
「ストレチエンスク」「ハバロフスク」間二千露里
第六區　北烏蘇里線
「ハバロフスク」「グラフスカヤ」間三百三十八露里
第七區　南烏蘇里線
「グラフスカヤ」浦潮斯德間三百七十七露里

右七大管區の中貝加爾迂回線路を除くの外は現今悉く成工し猶此他に於て中央西比利亞線中「オビ」の停車場より東二百十五露里「タヒガー」停車場よりは「トムスク」に至るべき支線八十二露里と及び「イルクーツク」「リストウエチノイ」間六十二露里の支線とありて而して各管區線路及び支線中に於て貝加爾湖迂回線を除くの外は制規の交通即ち鐵道局に於て制定したる發着時間表の制規に基き運行し脱線衝突機關の損傷其他特別なる事故にあらざるよりは規定時間の範圍内に於て運轉しつゝあるなり

西比利亞鐵道列車には諸々なる名稱あり之れを分つて直行急行郵便乘客貨物乘客等となす其他特別急行列車なるものあり、直行列車とは乘り替へを要せざる列車にして歐露の莫斯科府より「イルクーツク」府迄乘車せるまゝ直行するを得るなり急行列車もまた乘り替を要せず發車地より目的地に直行する事を得而して前者は重もに三等客車のみにて二臺乃至四臺を接續するを常とし後者は唯一等二等の客車を接續し大抵七臺乃至十臺を限る、元來急行列車は常に單獨に進行するがため普通列車の如く各停車場に於て停車すべき時間長からず運行力また速やかにして之れを普通乘客列車に比するに一晝夜殆んど四時間內外の短縮を見得べし千九百年七月歐露より「クラスノヤールスク」に達したる急行乘組の一士官の言に因れば「ワルシャーワ」より兵卒と與に同日出立したる其當日より計算するに軍隊は二日後に於て到着すべき割合なりと語りたり、

又た直行列車は常に單獨に目的地に向つて進行するものにあらず重に乘客郵便列車に接續せしむるものにして例へば歐露莫斯科より「イルクーツク」に向つて發すべき列車は大抵南方には「トルー」北方には「レザーン」或は「チエリヤービンスク」等の各處に於て乘替へをなさゞるべからざるが如く其不便なるは勿論來るべき列車を待ち合はするために制規外の長時間を空しく費さゞるべからず然れども直行列車は此間に於て元と來りし列車と分離して乘客を載せたるまゝ將さに進行せんとする列車に接續せられ直ちに前進するが故に乘替の煩はしさもなく待合せの苦しみもなく普通列車に比し一晝夜三時間乃至五時間を短縮する事を得るなり郵便乘客列車は各列車中に於て速力の中を得たるものにして客車は一、二、三等に分たれ列車の數は十二臺乃至十五臺を通常とす貨物乘客列車に至りては進行力の遲緩なるのみならず停車時間もまた大に長く即ち貨物の積み卸し列車の待合せ等に長時間を要する事夥しく此種の列車には二、三、四等の客車を接續するを常とす最後の特別急行列車は千八百八十八年三月露都聖彼得堡府より「トムスク」に向はせたるを嚆矢となせり此際列車の組織は機關車を除き三臺を以て成れる二等乘客特別急行列車にして第一臺には飲食室を設け其他の二臺には書籍縱覽所運動場及び寢室を設け或は電氣燈を點火する等注意頗る到れるものなりしが賃銀は價格に於て一晝夜二留五十哥の增額なりき而して現今此種の列車は大抵急行列車に接續し其「イルクーツク」に向つて發するもの四種に及べり

元來西比利亞鐵道は其延長線の長き丈け發着日數に多きを要するが故に四等客車を除くの外凡て長途旅行に適應せしめて作れるものなり一、二等客車は論を待たず其三

等客車の如きも旅行者のため起臥自由にして長途の旅行に對し苦痛を感ずる事なし例せんに歐露莫斯科府より後貝加爾州「ストレチエンスク」町に達する直行列車の如きは六千六百四十露里の間に於て少くも十五晝夜を要せざるべからず此長時間内に於て長途の旅行者に對し單に四等客車の如き列車構成法を施しなば之が不便窮屈苦惱決して尋常ならざるべし各列車中直行列車には三等客車二臺乃至四臺を接續し郵便乗客列車には仝四臺乃至六臺を接續し貨物乗客列車には仝三臺乃至四臺を接續するを常とす

西比利亞鐵道は廣軌なるが故に客車の廣さ長さも隨つて廣長なり各列車は通常長さ六「サージエン」内外廣さ一「サージエン」五分の一内外なり一列車は三室に區域せられ各室は二又は三小區に別たる各東室は障壁を以て隔てられ開閉すべき戸を設く而して各小區もまた障壁を以て別たる各小區には上下通じて九個の長椅子あるも實際起臥に使用し得べきは八個に過ぎず各分室の躰裁殆んど一樣にして窓の一方分室の兩側には巾二尺餘長五尺四五寸の長椅子を設け長椅子の間は廣さ二尺許の通路にして通路の極まる窓下には小さき食卓あり他方の窓下にもまた長椅子を設く此長椅子は三個の數を以て成り平素は上に折り疊み窓下に附着せしめ得べき最も輕便なる造りにして中央の板を窓下に附着せしむれば長椅子は左右に於て二挺の椅子に變じ張れば

また一挺の長椅子となる而して此兩窓下に設けらるゝ三挺の長椅子の上にもまた各〻二階の架棚樣の長椅子ありされば一小區内に於て設けらるゝ長椅子は凡て九個にして上下の長椅子の外中部の架棚樣の床板は平常下部に折り障壁を附着せしむべき製なり乗客多きか或は荷物を搭載すべき必要ある際は之れを上部に起し張り障壁より分離して一種の架棚をなすこの架棚の搭載力は極めて強く重量四五十貫目以上を載するも聊か危險を感ずる事なく此種の列車に馴れざる旅客には中部に設くる架棚樣の床板の果して床板なるや否やを見分け難からしむ各小區中二個の長椅子間に設くる人道と及び他の一方の窓下に設くる長椅子に沿ふ公共人道とは例すれば宛も丁字形をなせり各小區の乗客は平均七名にして各室共に平均十四名一客車を通じて四十二名を通常とす各列車内には便所あり盥嗽所ありて一室をなせり此處には手拭掛石鹸入及び鏡等を設け小使室列車長室等ありて秩序整理せるの外觀あり各室に設けらるゝ窓は二重にして室の兩側には鐵管あり夏時は冷水を通じ冬時は熱湯を通ず各室内には三個の釣洋燈を設くる等總じて遠路の旅行者に著しく便宜を與ふ

西比利亞鐵道に用ゆる汽車の進行力は急行、直行、郵便乗客、貨物乗客等に因り之れが速

力に甚しき差あり而して直行列車は一時間に平均二十一露里、七の割合を以て運轉し停車場にて來るべき列車の待合せ荷物の積卸し薪水搭載の時間即ち停車時間を除けば實際の進行力は二十五露里、八六に過ぎざるなりされば一昼夜に於て進行すべき眞速力は六百二十露里なるも實際の進行は五百二十露里を超過することなし急行列車に至りては進行力速に停車の時間また短く一時間の眞速力は通常二十六露里、七にして停車時間を減ずれば平均一時間二十三露里、七に當れり乘客貨車に至りては諸列車に比し著しく時間を要し一時間の進行眞速力は十八露里強にして停車時間を減ずれば僅に十四露里強に過ぎず

元來鐵道廳に於て規定したる「チエリヤービンスク」「イルクーツク」間(三千〇七十八露里に於て急行列車の發着時間を百三十二時四十分とすれば一時間の平均速力は二十三露里強にして停車時間の十七時半を減ずれば實際の進行時間は百十五時間強にして一時間の運行眞速力は二十六露里七に當れるも乘客貨車に至りては發着時間に於て二百十一時二十五分を要し之れを急行列車に比し彼れ此れ七十八時四十五分の大差を見るべし、「チエリヤービンスク」「イルクーツク」間に於ける急行列車の停車時間の十七時間半なるに係はらず乘客貨物列車は四十九時間弱を要するに因れり而して郵便乘客列車に至りては運行速力發着時間共に其中に位し時間の運行速力は十九露里にして之れを急行列車に比すれば發着間に於て二十一時間半の超過を生じ乘客貨物列車に比すれば彼れ此れ五十七時間の不足を認め得べし總じて急行列車は他の諸列車に比し發着時間の著しく短縮する所以のものは蓋し運行速力の迅速なるのみにあらず停車時間の少なきも又之れが重なる原因の一たり此列車は彼の直行及び他の諸列車の如く各停車場に於て停車する時間長からず特に分岐點に於て或は回避路に於て來るべき列車を待ち然る後發車する等のことは稀にして郵便乘客列車の如く一停車場に於て一時間以上停車することなく最長停車時間と雖も三十五分を超過することなし此れ便宜の大停車場に於て食事時間のために停車するものにして料理室の備付けある特別急行列車に至りては各停車場に停車する時間は多くも十五分を超過することなく之れを急行列車に比するに更にまた發着時間の短縮するを見るべし然れども此種の列車は急行列車の如く一等二等の客車のみにして三等四等は之れに接續せず臺車と雖も僅に三臺乃至四臺を制限とし殆んど單獨に進行するがために速力を高め時間を短縮するを得るなり方今西比利亞鐵道に於て運行する各列車接續の臺數はもとより毎度其臺數を同くせざると雖も特別急行列車は七臺乃至十臺を以て成り郵便

乘客列車は十臺乃至十五臺を以て成り貨物乘客列車は十五臺乃至二十三臺を接續するの範圍外に出るなし而して最終の貨物乘車列車は四、三、二等の客車を接續するも一等を設くる事なし四等客車の構造は三等に比し窮屈にして長途の旅行に適せず各室の體裁また粗造にして三等の如きは長椅子樣の床、架棚を設くるなし賃銀もまた低廉にして「チエリヤービンスク」「オビ」間千三百二十四露里間に於て之れを三等客車に比し一留四十五哥二等客車に比し六留四十五哥、一等客車に比すれば殆んど之れが三分の一に當れり

而して各種列車に搭載し得べき乘客の員數は如何時に或は過不足あるべしと雖も四等客車は毎列車四十八名乃至六十名三等客車は四十二名二等客車は二十二名一等客車は二十四名を制限とす

現今西比利亞鐵道に使用する諸車の數は固とより詳細なる統計を得るに難しと雖も千九百年の調査に因れば

四個の車軸を有する機關車　二百七十六個
三個の車軸を有する機關車　三百三十二個
六個の車軸を有する機關車　十　個

にして右六百十八個は西比利亞鐵道の專有に屬するものにして此他勤員用に供する四個の車軸を有する機關車百十七個あり

而して有蓋貨車は六千輛二輪車「トラック」形貨車は二千三百輛貯水車五十輛にして豫備としての特別車六百輛あり就中貨車一輛の長さは通常五「サージェン」(三十五呎)にして可動軸二軸即ち四輪車の製をなし十三噸の重量を搭載するものと露國にて一般に用ゆる三「サージェン」の四輪車を用ひ客車は長さ十「サージェン」のものを用ゆ

「イルクーツク」より以東は地方により水路を利用するを以て著しく時間を要すること

あり鐵道廳の貨物運輸規則に因りて定められたる平時の運輸品にして東部に向ふものは重もに「イルクーツク」に於て積み替ひ或は湖畔の「リストウーチノイ」碇繫場に送るを常となすも「アンガラ」河の航路に因り貝加爾湖に出て「ムソウオイ」碇繫場に達するの水利を應用するものまた尠しとせず時に或は「アンガラ」河畔の國道に因り陸路六十一露里「リストツエーチノイ」村に運送する事あり國道によるは重もに郵便物運送馬車及び製茶貨物運送の荷車とにして此線路よりするもの少々にあらず畢竟するに運賃を低廉にし時間を短縮し手數を省略し得べきは此線路の右に出づるものなきを以てなり世人或は以爲らく「イルクーツク」より湖畔に達する陸に鐵道あり水に滊船あり馬背

を籍るの必要はなかるべしと此れ事實上の認見にして旅行者試みに此國道に因らば府湖間荷馬車の絡繹として連續するを認め得べく其數量を打算し來らば思ひ半ばに過ぐる事あるべし

元來「イルクーツク」東部の交通事業は一年中の少時日を除くの外は交通自在にして冬時と雖も貝加爾湖の凍氷を碎破して航路を開くべき碎氷船の設けあり而して十二月上旬より四月下旬までの間に於て凍氷凝固ならざるの際は常に之れを用ふるも唯十二月初旬より殆んど二週間内外四月中旬より五月初旬に至るの間は凍氷或は凝結して磐石の如く或は片々分離して四方に漂着する等天寒く氣沈むの時は凍氷するも風起るの時再び破壞するは屢々起る湖面の現象にして此際碎氷船もまた用をなす能はざるの時あり加ふるに寒暖風雨の最も不順なる此時期には貝加爾湖迂回の道路は泥濘深く車輪を沒するがために此兩期は「イルクーツク」より湖東に通ずるの道路殆んど梗塞して船舶車馬も完く其用をなさゞるに至る加之秋期九月下旬より十月中旬に至るの間は天候の激變著しく南北貝加爾山は時々旋風を起して龍捲を作り或は湖水を攪つて之れを山巓に拋つ等一週乃至十日間滊船の航通完く杜絶する事あり此故に通覽し來れば現今に於ける西比利亞の交通事業は猶ほ圓滿を欠くる處あるも貝加爾湖迂回鐵道の貫通するに至らば此憂を免れ得べし

試みに北清事件の際に「リストウエーチノイ」村より「ムソウオイ」村に運送したる貨物其他の大數を擧けんに千九百年七月臨時御用船を命せられたる滊船は貝加爾湖航行の分のみにて五隻に及びたりしが就中碎氷船貝加爾號は同年同月中に四十回八月は四十六回九月は四十三回十月は三十九回を航したりしが元來碎氷船運轉臨時規則によれば一晝夜一回の航行を以て豫定し每一回運轉物は貨車二十五輛を以て定限とせるものなるも事實上の運搬物は一晝夜貨車二十八輛乃至三十二輛に上りたり而して同年十一月には「アンガラ」號は貨物二萬五千布を輸送するもの丶中二萬三千布は官用にして三萬二千布は民用に係はり滊船「マルイギン」號は曳船を用ひ同年同月官用貨物七萬布民用貨物六千布を運送なしたり而して碎氷船貝加爾號は仝年十一月「リストウエチノイ」「ムソウオイ」間を往復せる事三十二回にして軍用貨物八萬一千布民用貨物二十一萬七千布官用鐵道用材二十八萬六百六十八布乘客手荷物千四百布客車貨車二百九十輛並に機關車十三輛軍人四千二百名馬四四千三百頭を輸送なしたり「イルクーツク」より湖東に運送する運搬線路中國道鐵道に因るの外水路には猶ほ二條の直行線路あり即ち「イルクーツク」より「アンガラ」の水利に因り貝加爾湖を横斷し一線は「ムソウオイ」

一線は「セレンガ」河口に達するの二條あり而して前者後者ともに重もに「リストウエチノイ」碇繫場に寄航するを常とし前者は定期航行なるも後者は便宜航行をなす「イルクツク」より貝加爾湖に達するの水路は六十二露里にして「アンガラ」河を遡ほるに八時間を要し一時間の速力平均八露里弱を要す湖面横斷は六十露里にして四時間半にて航行し一時間の速力十三露里强なるも風波高く起るの日は進行力十露里に足らざる事あり「ムソウオイ」碇繫場は三個の埠頭を有し二個所は恰克圖商「チムチーノフ」氏の所有に係はり一は貨物一は乘客取扱のために設けらる新設の大埠頭は規摸宏大風浪を避け碇泊すべき汽船を掩護するに足るべく此處には新式の陸揚器機を用ひ荷物の揚げ卸しに便にし西比利亞鐵道より支線を引き此れより直ちに西比利亞鐵道に運搬するの裝置に備ふ「ムソウオイ」村より以東上黑龍江頭の「ストレチエンスク」に至る一千〇九露里間は凡て後貝加爾鐵道に因るものにして此間に於て要する時間は大凡三晝夜內外にして達すべく「ストレチエンスク」「ブラゴウエシチエンスク」間千百九十七露里半の航路は五晝夜內外にして達し得べく此れより「ハバロフスク」に至る航路の九百十八露里は四晝夜以內にして達し得べし

西比利亞鐵道運行上の觀察

千九百年に於て起りたる清國禍亂の影響は西比利亞鐵道をして軍用急行列車運行の實地練習を繰り返さしめぬ殆んど完通したる該鐵道に於て軍用列車を用ひたるは蓋し此時を以て始めとし軍用急行列車は同年七月二日「クラスノヤールスク」に於ては西部より輸送し來りたる軍隊用列車に有蓋列車六盞を接續せしめて之れを東部に發したるを以て第一回となしたり中央西比利亞より以東に於て軍用列車を用ひたるは黑龍江畔の騷擾後にあり北京の警報「イルクーツク」に達したる頃は單に拳匪の叛亂と認めて深くも之れを介意するものなかりしが滿洲兵が「ブラゴウエシチエンスク」を攻擊せる事の意外に露清疆界線に接近せる各地の動搖を來したるより大兵を動かさゞるべからざるに至り西は「セミパラチエンスク」州より東は烏蘇里方面に至るまで警備攻擊征服策の餘儀なきに追りたり戰線の延長益々長きに隨ひ數多き軍隊、軍隊附屬品、糧秣等を要するは數の免れざる處にして中央西比利亞交通機關の頻繁混雜を極めたるは實に露曆千九百年七月初旬より十月下旬の間にありたり歐露より發送したる軍用列車の回數及び西部西比利亞より發送したる軍用列車の回數は固とより詳に知るを得ざると雖も貝加爾湖即ち歐露西部、中部西比利亞より發送したる軍隊同附屬品及び糧秣馬匹飼料等の大略は貝加爾湖に於て粗ほ之れを知るを得べきも然れども單に此

一點のみを以て精細なる統計の要領を得たると定むる事を得ず何となれば

第一「オビ」「エニセイ」運河經由及び「アンガラ」河を遡りて貝加爾湖東の「セレンガ」河口に輸送したる所謂水利應用の方針を取りたると

第二「トムスク」より疆界警備のため「ビイスク」に向はせたる軍隊と「クラスノヤールスク」より「ミヌシンスク」に派遣したる軍隊また尠なからざると

第三湖東に於ては後貝加爾州より徴發募集したる兵種糧秣馬匹等また少々にあらざりしが故に湖西湖東に於ける交通事業は自然多少の差異を生ぜるは勞の然らしむ處なるべしと雖も之れを要するに西部に於ける交通機關の大要を確かめなば東部に於ける交通機關の方を知るを得べきなり

千九百年の北清事件に於て露清の戰線最も延長せるは八月にして西は蒙古の「ゴーブト」地方「クーリジャ」方面より後貝加爾州近き「ハヒラル」及び東北部滿州各地に擴張したる軍隊の配置糧秣の供給は蓋し此時を以て最多となすと同時に西部西比利亞に於ける交通機關の頻繁混雜困難もまた此時を以て極點に達したりと認めたり西比利亞鐵道の戰時に於て鴻大なる勢力を有するは世已に定論あり然れとも單に此交通機關を以て俄に極東に大兵を送り少時日の中に於て軍隊に必要なる軍需品、糧秣、馬匹、飼料等を充分に供給し得べき精算を有するや否やは此れ研究すべき一問題として北清事件に於て顯はれたる事實上の交通機關力より打算し來れば聊か失望の感なき能はず其重なる結果として

第一運行遲緩の滊船を用ひたる事割合に多かりしと

第二急行軍用列車發送の回數少なかりしと

第三馬匹の供給に容易ならざりしと

第四民有貨物の澁滯非軍用列車(急行直行を除く)の常に遲緩なりしとより考ふれば事實上に於て實際西比利亞鐵道が戰時に於て少時日の間に大兵を極東に送るの容易ならざるを解釋する事を得べし

翌つて西比利亞鐵道に關する交通上現今存在しつゝある得失を考證し來れば北清事件に於て見出したる交通上諸々なる欠點の原因を證明する事を得べし今西比利亞鐵道に於て諸々なる欠點中其主要なるものを擧げんに

第一經費を節減し竣功期を短縮ならしむるため堤防枕木鐵軌等に精細なる注意を向けざりし事

第二西比利亞線は單線廣軌なり此故に數多き貨物を輸送するに殆んど常に全搭載力

を用ひ規定内に於て最多數の列車を接續するを以て年を經ず堤防に高低を生じ鐵軌に破碎を生ずる事速やかなり

第三搭載力の滿量と極度の接續列車は自然に運行力を殺減するは理の當然にして猶ほ燃料は薪を用ゆるが故に西比利亞線の滊車進行力を歐露に比較するに著しき差を認め得べし

第四、堤防の不完全、鐵軌の脆弱、運行力の不定等は大に燃料に影響を及ぼし自然に發着時間を變更せしめて爲めに待合せ時間を延長せしむる事あり

戰時に於ける交通機關大則

各種列車の外に軍用列車あり運行輸送ともに他の列車に比し殆んど特種の性質を有する列車として此れまた三種に分たる

第一、軍隊を輸送すべき急行列車

第二、軍需品を輸送すべき急行列車

第三、普通乘客貨物と軍隊軍需品との混成列車此れなり而して平時に於て軍隊及び軍隊附屬品を輸送するは重もに第三種を用ゆるも戰時に於ては第一第二種の急行列車を用ゆるを常とす

軍用急行列車は其名の如く單に軍隊及び軍需品即ち武器、彈藥、糧秣、馬匹及び軍隊に附屬する必要品を輸送するものにして列車運行の速力聯接車數、搭載容量また極度を應用するを以て時々貨車を客車に代用し或は接續すべき車數を減ずる事あり

元來軍用急行列車は普通急行列車の如く一定の停車場に於て停車し或は處々に於て來るべき列車を待ち合はするものにあらず其一晝夜間に於て停車するは都合四回にして右は二回の食時と二回の喫茶時間と及び薪水搭載等のために設くるものなれども時に或は僅かに二時間に節減せらるゝ事あり然れども此割合を以て數晝夜絶えず運行の方針を繼續する事能はず何となれば機關車取替、臺車聯接或は取替等のことあるが爲めに停車する時間々あり元來工部大臣規定の滊車進行速力は停車時間を除き一時間平均三十露里を超過する事能はざるの制規にして若し之れより超過する速力にて運行を要する場合には海陸軍大臣と工部大臣との協商を經ざるべからず此れ等は其最も必迫せる場合に適應せしむべきものにして千九百年十月三日午後三時三十分を以て「トムスク」を發したる「イルクーツク」行の軍隊を搭載せる特別軍用急行列車は凡て十五臺を以て成り翌々日午後七時に達すべき豫定なりしが「トムスク」「イルクーツク」間の距離と及び發着の時間とより打算し來れば一時間の眞速力は三十二露里、三に

して停車時間を合したる一時間平均進行速力は三十露里、七に當りしなり此くの如き汽車の運行速力は西比利亞鐵道に於て最大とも謂つべく極度とも謂ふべき進行力にして現今の如き鐵軌にて到底堪ゆべきものにあらざるか故に此列車は前例に數多からざるものとして數へられたりき

軍用急行に用ゆる聯接すべき有蓋無蓋列車の數は十五臺より少なからす二十三臺より少からざる規定にして前者は重もに軍隊輸送に適用せられ後者は軍隊必要品輸送に適用せらる而して軍用急行列車にもまた一、二、三等の階級は設けらる即ち一等には陸海軍將官、陸海上級參謀武官、聯隊長、艦長之れに搭乘し二等には陸海下級參謀武官、準士官、嚮導者水先案内者等之れに搭乘し三等には兵士之れに搭乘するの制規なりと雖も其一等に於て數多き空席あるか三等に於て席不足する時は上長官の命令により二等乘者を一等に移し三等乘者を二等に移す事あり此他乘員著しく超過する際には有蓋貨車を清掃し以て臨時三等乘員即ち兵卒のために客車と假定する事あり

戰時に於ける軍隊輸送の規定に因れば特別軍用急行列車は毎列車一千人以上の步兵或は砲兵の中隊或は騎兵の中隊より少數ならざるの員數を搭乘すべきを要するが故に設令は乘員數に於て多少の增減ありとするも結局搭載すへき武器馬匹其他軍隊に要する必要品とを算すれば軍用列車は常に十五臺以上を聯接せざるを得ざるの事實を認め得べし

而して軍隊を輸送し軍需品を運送するの順序に至りては已に規定せられたる軍隊發着の日、時、分、運行速力停車の場處等は鐵道局と輸送監督官との間に於て交渉せる後一時間何露里の速力を以て何時何分に何れの停車場に達し何時何分を以て發車する等は交渉に於て定められたる制規に隨ふべきものとす而して戰時に當りては軍用列車を用ゆるため上長官は普通の貨客車の運行を停止せしむる事あり之れが輸送に先ち目的地に向ふべき掌舍兵、製麵袍者、採菊兵、廚夫の發車時間は此れまた海陸軍上長官と鐵道局との交渉によりて定められたる時間に因るものにして驛長の豫報に基つき軍隊よりは豫め三十名以上の兵士を先發せしむるを要す即ち軍隊輸送の當日より一畫夜の中に豫報を要すべきものとす

而して軍隊輸送に方り兵員の數多き時は海陸軍の監督官は豫め總ての輸送物につき驛長に前報すべく即ち三十名以上二百五十名以下は一畫夜前二百五十名以上六百名以下は二畫夜前六百名以上千名以下は三畫夜前何れも兵員の數に應じて豫め其搭乘以前に發車地の驛長に前報すべきものなるも若し一聯隊(海陸軍)一旅團一師團等全部

輸送に方りては發送前六畫夜以内に於て豫報すべきを要すされど特別に緊急を要する場合には此方法に因らざる事あり此れ等は平時と軍時とを擇ばざるなり

軍隊輸送に際しては空席ある時は普通乘客と混合せしむる事あり而して將校士官は特別に客車を設くるにあらざれば常に普通乘客と別居せしむべき事を要す

而して軍用列車に於ては其最も多く要すべきは二、三等客車にして若し三等客車の不足する際には有蓋貨車を適用することあり此他病兵創傷兵輸送は重もに三等客車を用ゆるも就中傳染病兵に對しては特別に客車を設くるものとす

糧秣、武器、彈藥等の輸送

軍隊附屬の糧秣、武器其他軍需品の輸送に付ては一は軍隊とともに一は貨物列車を以て輸送するものとあり就中軍隊に欠くべからざる附屬軍需品糧秣等は軍隊とともに軍用列車にて輸送するものなるも其他は順次發送すべき列車に搭載すべきものとす

砲車輸送は常に無蓋貨車を用ゆるも運行中は各停車場に備付けの堅固なる「ヅック」を以て覆ふものにして軍隊の附屬品は實印若しくば上長官の印を以て封ずべきものとす、

總じて凡ての砲彈及び他の重き貨物を臺貨車に載積せしむるは容重に於て規定あるものなれば其各臺車の搭載力に應じて之れを適用し軍用にあらざる普通の貨物は一切之れを積載せざるものとす而して貨車に輕重物を搭載するに方り彈藥の如き危險物は決して砲車の如きものゝ下に積載するを得ずして之れが積載は本軍隊の兵卒を用ゆるものとす

其五　「イルクーツク」「クラスノヤールスク」間

「イルクーツク」府に於て半歲餘夢の如くに消閑せる間に該市巨細の實況を探檢し終りたりしが時宛かも北清事變あり爲之西比利亞の動搖甚しく露國出兵の頻繁なるより西比利亞鐵道が戰時に有する實力の大小を探らんと欲し遠征繼續の準備に取懸りし際は氣候の激變中なりしが故に此等の觀察をも結了し六月初日を以て此處を出立することに決したり

六月初日天色清麗午前九時此處を發して遠征の途に上る「イルクーツク」より「インノケンチー」停車場に至るの間は唯廣漠たる低原中を縱貫して走るのみなりし連日の疲勞に何時しか堅き夢に入りたるまゝ午後十時「ジマ」の停車場に着せしが此處に晩餐を了し長椅子に身を横たへ假寢する間に汽車は「ニージネウヂンスク」町に達じたり「イルクーツク」「ニージ、ネウヂンスク」に至る行程四百七十六露里二十五停車場一避路所あり其

間低原曠野少なく唯「イルクーツク」近傍及「ザラーリンスク」停車場近傍は樹林なき平野なるも其他は根白樺赤松等の混生森林にして人烟少なく最も寂寥を極むる地なり概して「クラスノヤールスク」「イルクーツク」間は「タイガー」と稱する濃厚なる森林地にして莫斯科街道中旅行者の爲めに古より有名なる危險の道路に數へらる即ち第一の險道は「クラスノヤールスク」「イルクーツク」間第二の難路は南烏蘇里方面を屈指して旅客の最も危懼する道路なりきされど現今は此危險なる道路は一睡の間に通過するを得べきも汽車なきの當時旅行者は單に驛傳馬車或は旅行馬車に依るの外なかりしか旅行中屢々賊難に罹り非業の死を遂げしもの亦尠からず現に「トルーン」停車場より「クルザン」「フドイランスキ」「ヒングイ」を經「ニージヂウヂンスク」町に達する間は到る處翁蔚たる森林地にして壺尙ほ暗き道路は旅行者をして戰慄寒心せしむるの難路たり此方面には殆んと露里毎に二三の十字架の建てられつゝあるを見受くべく此等は汽車なき當時此地方の森林中に山寨を搆へて兇暴を逞うせる山賊の爲めに殺戮せられたる旅人の墳墓なりと云へり

「イルクーツク」「ニージヂウヂンスク」「クラスノヤールスク」間の村落は重もに流刑人の殖民せるものなるが故に人情險惡殺伐の氣猖獗にして殺傷、爭鬪、劫奪等は殆んと慣例の如く各村には固より村長ありと雖ども之れを統御するの職權を有する村長もまた流刑人にして膂力强く資產豐かなるものなれば輯睦を缺くは勢ひ免む能はざる所なるべし土民の生計は農業を營むあり或は商業牧畜に從事するものあるも十中七八は出稼工夫として鑛山採掘として後貝加爾州より黑龍江方面に出稼し或は烏拉爾方面に向ふもの多く女子は重もに耕牧を營むの傍ら牛乳、鷄卵、麵麭其他の飲食物を滊車乘客に鬻ぎて生計の補ひとなすものあり概して「イルクーツク」「ニージヂウヂンスク」間は土壤疲瘦なるにあらず牧草乏しきにあらず開墾し耕耘し牧畜せんと欲せば播種收穫繁殖の効擧らざるにあらざるも無賴なる流刑人の多くは耕耘牧畜の如き正業を好まざるが爲めに千里の沃野も空しく狼、熊、狐、兎の巢窟に委せつゝあるは惜しむ可きことゝ謂つ可し

「ニージヂウヂンスク」町は「イルクーツク」縣中重なる大邑にして西比利亞鐵道と並行せる莫斯科街道に横はれり北緯五十四度五十五分東經九十八度五分に位し海面を拔くこと千四百六十七呎四面は濃厚なる森林に圍繞せられ「ウド」河は市街の西北に流れ河に沿ふの處斷岩絕壁風色佳絕の名勝地として知らる

市街中重なる建築物は三大寺院、四庵室一禮拜堂、病院、監獄署、郵便電信局、三火酒釀造所、

町立倶樂部、區裁判所、郡役所、警察署、中央貯金支局、二銀行支店、商店等あり家屋の構造は重もに木造にして石造家屋の注目を惹く可きもの唯一戸なりと云ふ

翌三日午前九時「エニセイスク」縣の「カンスク」町に達したり「カンスク」「ニーヅチウヂンスク」間は特に記す可きものなく唯「ザムゾール」停車場近く進みし頃は蚊虻の類非常に多く群飛して人馬を襲ふの勢ひ甚しく其煩はしきこと言はん方なかりし土民は黒紹を以て張形帽子被を作り顏面を覆ひ以て蚊蛇の害を避けつゝあり「アマザイ」停車場近傍は地味豐饒耕耘に適するの地少なからず「イランスク」の停車場を過ぎ「カナ」河の鐵橋を渡れば此より「カンスク」町となる

「カンスク」町は「エニセイスク」縣にあり莫斯科街道に横はれる大邑にして人口八千二百三十六(男五〇五二、女三一八四)あり地は「クラスノヤールスク」を距る二百十八露里「カナ」河の西岸低原の少しく開けたる處にあり地勢低濕加ふるに「カナ」河の汎濫に浸潤せらるゝこと多く年々春秋の驟雨は市民をして席に安からざらしむ

地に製革、石鹸、釀造、煉化等の製造處十六と及び大小の商店四十以上あり重なる建築物は町役所警察署郵便電信局、町立銀行、病院、中央貯金支局、倶樂部、區裁判所、生命保險會社支店、寺院等あり街衢整然たりと雖も道路狹溢雨後は泥濘深く家屋は重もに木造にして石造は極めて少なし

住民は農耕牧畜商業勞働等に從事し商業頗る活潑にして就中農產物の麥粉は「イルクーツク」「クラスノヤールスク」間に於ける重なる產出地として「イルクーツク」方面より「エニセイスク」縣北部の鑛山森林地に向つて輸送するの額また少々にあらずといふ

午前九時半汽車は此處を發して西に向ふ「カンスク」「クラスノヤールスク」間は道途到る處光景悉一の如く森々たる根松の森林には斧鉞入らず豐饒なる沃野に鋤鍬至らず唯自然の荒蕪に委しつゝあり「オリギンスク」停車場より「ソロキーナ」停車場に至るの間は濃厚なる森林地にして蓊鬱悉尙ほ暗き深林を縱横に衝きつゝ進む汽車の速力は遲緩を極め車体は左右に動搖し宛かも大洋航海の際風波に搖らるゝが如き感ありたり「カマルチヤーガ」「ソロキーナ」停車場間は深山幽谷とも稱すべき蕭索たる山林地にして「カイル」停車場よりは低原漸く開け低原の極まる處黛の如き遠山を認むるに至れり此れより曠漠たる「エニセイ」河の圓谷に向ひ有名なる「エニセイ」の鐵橋を渡れば間もなく「クラスノヤールスク」停車場に着したり

クラスノヤールスク町

「クラスノヤールスク」町は今を距る二百七十三年即ち千六百二十八年韃靼人の種族「ア

リンツ」「カチエンツ」人征服の目的を以て「アンドレー、ドビジンスキ」氏が一隊の水戰隊を率ゐて此地に來り現今の「カーチ」河の上流に於て小要塞(此要塞は其以前韃靼人の所轄に屬せるの地なりしが故に「クラスノヤールスク」と稱へずして韃靼語「キジーク、ヤルトーラ」即ち赤き河岸の町とは呼びなしたり)を築きたる其當時は屢々韃靼人及び「キルギーズ」人の襲擊を受けたりしが千六百四十一年二年の如きは「アリンツ」「カチエンツ」人種の爲めに攻圍せられ苦戰に陷りしとも屢々なりしを勇猛慄悍の胡索克兵は常に少數を以て大敵を擊退し千六百四十三年に至り「クラスノヤールスク」軍隊司令官「ゴブイリスキ」は三百騎の決死隊を組織し胡索克の健兒を引卒し「アリンツ」「カチエンツ」「キルキーズ」の諸族に向つて攻擊し血戰數回の後聯合軍を粉碎し遂に彼等の酋長を獲斬したり此れより餘衆は降り年々貢献するに至りたり千六百四十二年「コブイリスキ」氏が現今の「クラスノヤールスク」町に於て一寨村を創立するや「イヂノローガ」の印章(一角の海獸)は附與せられ千七百〇八年迄は「エニセイスク」水戰隊の保管に屬したりしかも「トボリスク」を首めとし千七百十九年西比利亞州縣の設けらるゝや「クラスノヤールスク」町は「エニセイスク」縣の管區として定められたり

千七百八十三年「カリイタン」縣の改正せらるゝや「クラスノヤールスク」は之れに合併せられ千八百〇四年に至り「トムスク」縣の設立せらるゝに際し大管區の町として定められ仝二十二年に至り「エニセイスク」縣の首都として定められたりしが縣令は有名なる「ステパノフ」氏にてありき越えて千八百三十七年より仝四十六年に至り市街の規摸大に躰裁を改め建築物は壯大美麗を極たりしが最も繁盛の時代として都鄙の童謠にも黄金の野は鋤かれ耕され「シャンパン」の河は流るゝと迄歌はれたり人口に膾炙する談柄として一工夫が三ヶ月間に飲みし「シャンパン」の價格は實に八萬四千留(圓)に上り此れより一夜千金或は高原の「ナポレヲン」等の諺を生ずるに至りたり殆んど四十年を繼續したる後採金業は頓挫して黄金の水は涸れ黄金の風は歇み現今は唯其當時の榮華を夢みるのみ

千八百八十一年の祝融に該市三百九十戸は焦土に歸したりしが黄金時代に於て費用と勞力とを惜まず建築したる壯大華美の建築物は此時殆んど烏有に屬したり火災後の建築物は從前と趣を異にし昔時の壯觀なる町景を有せずと雖も尚ほ西比利亞の第二位を占む可き市邑として誇りたる榮華の影跡を認む。

地は北緯五十六度一、東經九十三度五分の處に位し海面を拔くこと六百九十七呎にして「エニセイ」河の西岸にあり

地位莫斯科街道の要路に當り西比利亞鐵道の大停車場たるのみならず「エニセイ」河航路の衝點を占め南は露清の疆界近き「ミヌシンスク」町より北は北氷洋近き「トルハンスク」に至り東は上「トングース」河に隨ひ「アングラ」河を遡りて貝加爾湖に達するの航路を有し西は「エニセイ」「オビ」連絡運河に依りて「オビ」河を上下する水運あり而して其陸輸に至りても莫斯科街道に依りて西し或は東し「エニセイ」街道に依りて南し又北するの便を有す所謂四通八達の勝地として他に其比を見ざるなり地は「ペテルブルグ」府を距る四千七百十露里「トムスク」府に至る五百七十五露里「ミヌシンスク」町を距る三百六十露里「トルハンスク」町に達する千四百露里あり而して「イルクーツク」府を距る千〇三十四露里浦潮斯德に至る五千七百十一露里の處にあり商業頗る繁盛の地として運輸交通の頻繁なる地として其名夙に噴々たり地に

「エニセイスク」縣廳、町役所、警察署、收稅局、裁判所、諸病院、銀行、音樂、戲曲、演劇舞蹈等の同窓會、諸倶樂部、貧民救助會、教育會、町民集會所、圖書館、博物館、孤兒養育院、貧民救助院、鐵道學校及諸學校活版、銅版、印刷局、四新聞社、町立貸付所、劇場、「エニセイ」汽船會社、釀造處、人造有機水製造所、旅館、十一寺院、一等商店、地方守備隊胡索克中隊兵營、

等あり街衢、整然横衢十三縱街七人家稠密巨商大賈軒を連ね殊に大街の如きは「エニセイスク」街道を占有して延長五露里餘に亘る街の左右に櫛比せる家屋は壯大美麗旅客の目を驚かすものあるも其他は概して木造にして見るに足るべきものなし住民の數は千八百八十一年の調査に依れは一萬六千八百二人にして千八百九十三年には一萬七千百八十三人(男一〇六一八女六五六五)に上り千八百九十七年には二萬六千人(男一四五七三、女一二〇二七)に上れり住民の重なるものは大小露西亞人、波蘭人、獨逸人、猶太人、韃靼人、高加索人等にして流刑人極めて多く清人の一戸も亦之に加はれり商品取引の重なるものは麥粉魚類毛皮等にして雜貨は之に亞き價格は概して「イルクーツク」府より廉なり

西比利亞名勝中の名勝地として「クラスノヤールスク」町は四季共に風景に富む就中「ヤロフカ」島の花園「エニセイ」河畔の納涼、町立公園の秋月「エニセイ」鐵橋の雪景を最とし流を遡れば「ペザハイ」の峽谷「ミヌシンスク」の鑛泉何れも歐露より來遊するもの四季絶ゆるとなし

初春太陽の光熱は春を呼び起し春は萬物を蘇生せしめて寒氣次第に衰弱し四月末に至れば鐵板の如き氷層は碎け巖石の如き氷塊は崩れ何時しか潺々たる瀧波現はれ來り「エニセイ」流域の一方に眠るが如き二箇の島嶼を發見するに至るべし春を愛する市

民が一日の歡樂を此小天地に取るの遊園地として「エロフカ」島中には數千種の花屋敷を設く面積大ならざるも所謂山水明媚の觀あり春來れば新綠滴る許りの軟らかき雜草と雜花は島行く人をして足の運びを重からしめ島畔を洗ふ漣波の清きは掬取る人をして棹さすを痛ましむるの風色島景一として新たならざるはなく其曾て盛冬凍結の際には喪家の狗、飢餓に苦める烏すら見舞はざりし小天地は宛ながら別世界の如し春往き夏に移れば「エニ」河畔の高き處河流に沿ひ六七町の間に板もて人道を作り欄干に沿ふて椅子を設け一方には樹林を植ゑ以て夏時炎熱に苦める市民の幾千をして暮時常に杖を此處に曳かしむ飢底に蒸さるゝが如き炎天に涼を取らんが爲め此處に至れば江風は常に冷氣を送り來りて心膓を洗ふが如し運動場の下には汽船碇繫場は數ヶ處に設けられ二ヶ處の水浴場は河岸近く建設せられ夏時涼を取る此處より好きはなかるべし

秋に至り深綠老ひ黃ばみ微風に搖らるゝ樺樹は鈴を鳴らすが如き時歩を町立公園に移せば宛然別世界に入るの心地せらるる町立遊園地は西比利亞最大の公園として其名著しく濃厚なる樹林園は周圍大凡二露里もあらん園內には休憩所あり倶樂部あり遊戲場あり花壇あり森林の間を縱橫左右に迂回する人道は四通八達して市民を集むる慈善軍樂隊の奏樂は四季絕えず一週一回乃至二回つゝ園內に演ぜらる

市街の西部「エニセイ」河橫斷の「エニセイ」鐵橋冬時の光景は眞に奇觀中の奇觀にして高さ七十一呎長さ四百三十四「サージェン」四分の一の鐵橋は六節となりて「エニセイ」の圓谷を橫ぎり天地同一色の銀世界に蟠踞する勇壯の狀また一層の奇觀を呈す汪洋たる「エニセイ」の流域已に凍合すれば圓谷の四近數十露里は滿野磨ける砥の如き平面となり高架の如き鐵路は南北に現はれ黑烟を漲らして橋上を走る汽車と粉雪を衝き氷塊を蹴て馳する樞の壯觀は暖帶地方には到底之れを見ることを得ざる可し

此他「ウイシキ、トクマキ」の懸崖「カーチ」川の清流「アフォントヤ」高丘等の勝地あり就中圓柱形の赤岩は市街の西太凡五露里の處に聳立して高さ五十七「サージェン」に達し奇觀名狀すべからずと云ふ

「エニセイ」河遠征

其一　「エニセイ」河遠征

余が「クラスノヤールスク」町に達せし頃は宛かも北清事變の爲めに西比利亞各處の動搖最も甚しかりし時にして後備兵の召集軍馬糧粕の徵發等あり都鄙騷擾を極め隨つて旅行外人中東洋人は殊に注目せられ煩はしさに堪へざりしが折しも「エニセイ」河流下「トルハンスク」行の汽船あるを聽き心竊かに思ふやう「前後七千露里の江山に於て幾度か萬死を免れしめたる運命は僥倖にも事なく余を此處まで驅り來りたりされば北極圏近く航行するの船に出逢ひたるこそ再び得難き好機ならん蔭に事を謀るは人にあり事を成すは天にありと聽く此れより北極圏內深く進入して短矮人種の模樣太陽の出沒等を觀察して地文學上の實說を確かめんにはと探檢の希望は咄嗟の間に決定せられ直ちに汽船會社を訪ひ便乘のことを打合せたり

元來「エニセイ」河觀察者は英國人獨逸人那威人露西亞人其數少なからずと雖も東洋人の「エニセイ」河遠征は古來曾つて無き上にも日本人としては余を以て嚆矢となすが故に船長「カマローフ」氏は無賃にて「トルハンスク」迄の乘船を許し特別なる待遇と出來得る丈けの利便を與ふることを約したり

「トルハンスク」航行の汽船を「モスクワ」號と名つく英國に於て製造せるものに係り馬力は十船躰の長さ十二「サージェン」巾二「サージェン」半流下の速力一時間二十五露里乃至三十露里にして其遡ぼる時には一時間十露里乃至十五露里に限る此船は千八百八十一年の頃「クラスノヤールスク」町の一等商「カダローフ」氏が英國より北氷洋に廻航し「エニセイ」河に因り「クラスノヤールスク」町に達せるものにて爾來年々夏季水多き時節を以て「トルハンスク」「クラスノヤールスク」間の航行に充てしが夏秋の兩期「エニセイ」河減水の際には下流の航行極めて危險なるを以て單に「エニセイスク」「ミヌシンスク」間七百八十露里の航通に供し「エニセイスク」より下流は小舟を以て流下し或は「トルハンスク」より流域を遡るのみ「モスクワ」號の曳船は三隻にして一隻は雜貨一隻は麥粉類を搭載し三隻中の一隻は麥類酒類酒精煙草、砂糖及び雜貨、織物類を「トルハンスク」町に運送するものなりと云ふ

此行下等乘客三十二名上等七名船員を合して五十名以上と數へらる此れより「エニセイスク」町に至る水路凡四百露里陸路三百三十一露里、航行は一昼夜半にして達する割合なりと云へり午前七時汽船「モスクワ」號は此處を發して北に向ふ余が許に要意せる旋行用具は晴雨計、寒暖計、天幕、釣床、帽被(紹製にして蚊蚋の害を避くるもの)「ブリッキ」鍋短銃、釣具、食器、飲食品等にして重量大凡五貫目に上る

「チャウルノイ、ソフカ」高丘を左にし開けたる低原を右にして下る十露里許の間は唯河

畔に流刑人の淋しき小部落を散見するのみなりしが「カナ」河と「エニセイ」河との會點に至る頃ほひ緯度を檢すれは此處は北緯五十六度三十二分の處に當り「クラスノヤールスク」町を距る殆んど六十露里の北部にあり是より下流は河身二露里或は四露里に擴張し河身中には多くの島嶼を散見し島中水楊白樺の類叢生し一米突に餘れる雜草は全く島景を裝被して翠光飛はんとするの風色あり此日風なく光熱鋭く加ふるに到る處蚊蚋の類烟霞の如くに翺翔し一歩も甲板に出つる能はざるより余は窓下に微吟しつゝも無骨なる左岸十數露里の光景を遠望するのみなりき

午後三時左岸に一村落を認む是「エロフカ」村にして戸數三百二十人口千四百四十(男九四一女五一九)地に流刑人村役場、小學校、寺院、商店あり土民は農耕漁獵を業とし或は「エニセイスク」採金鑛夫として出稼するもの亦少なからず流刑農民中未だ宗化せざるもの猶ほ九十六戸あり人情險惡殺伐の氣盛んにして宛かも遊牧人種の部落なるが如き觀ありと「カマローフ」氏は語る

百三十一露里にして「クラスノヤールスク」町管區は終り「エニセイスク」町管區となる(管區とは我國の郡の如きもの兩管區の境界は「タロフスク」にして戸數四十五、人口三百三十二を有せる寂寞たる寒村なれども驛傳は此處に設けられ土民は重もに耕耘牧畜に

從事し既墾民有地は四百五十四「デシャーチン」に上る「モスクワ」號の舷頭は或は北し東し又西し常に流れに隨つて下るが如き著るしき航進をなさゞりし午後三時頃より俄かに速力を增進し一時間二十露里以上の割合を以て航下し「ボロシンスク」村に達せるは午後五時にして漸く峰巒を認めしが間もなく峽谷を左右に廻りて下りたり此處は「エニセイスク」灘と名づくる有名なる淺瀨にして激迅なる急流は一時間二十露里を流下すと云ふ灘の水域は大凡十露里に延亘し處々に暗礁を認めしも一方の水底淺からざるを以て滊船の航通には危險の憂至つて少なしと云へり灘の殆んと中央部は河身強く峯巒に壓窄せられ流域狹隘となりて三百「サージェン」に達せず右岸は峻嶽峭立して劒を植ゑたるが如く下部なる巨石は口を開きて「エニセイ」の急湍を呑まんとするの勢ひをなし上部なる斷岩は首を延べて蒼々たる深潭を窺ふが如き形狀を爲せり左岸には白樺、山毛欅、根松等を以て裝はれたる圓錐形の高峰幾十となく駢列して愛嬌なき光景は航行者をして何となく寂寥を覺えしむ灘の中央より水勢二條に分れ左方は僅かに小舟を通ずるに足るべき淺瀨なるも右方は水底頗る深きを以て滊船は常に右方に航路を取り午後九時「カザチンスク」碇繫場に着したり

午後十時半「モスクワ」號は此處を發して北に向ふ右は高丘連亘して岸に沿ひ時に斷岩

の「エニセイ」河を遡ぎるものあるも左方は概して森林地の低原にして處々に漁場の納屋を見受たり河身の高原に壓窄せらるゝ處廣袤一露里に縮少せらるゝも圓谷の開くる處は二露里乃至二露里半に亘り沿々たる水域の一方には短夜を樂しむ水禽の群遊するを認めたり此より下流四十三露里を二時間半にて流下し艫がて「カルギーナ」碇繫場にと着したるは宛も午後十二時半四顧明らかならざるも猶ほ山河の光景を認識するを得べし甲板に出づれば太陽尚ほ地平線より遠からざるも星輝已に冴えて北斗の貪狼星は漸く北にと傾き徐ろに甲板を撫づるの涼氣は何んとなく刺あるが如く感せられたり艫がて江風に送らるゝ鷄鳴を耳にせしを以て余は室内に入り身を長椅子に投げたるまゝ前後を知らずなりぬ。

戸を叩く音に脆き夢は破られたりしが戸を開けば船長「カマローフ」氏は望遠鏡を携へ莞爾として言ふやう「日本の旅客よ汽船は已に君が注文の上「トングース」河に近きたり海洋の如き流域睡るが如き島嶼豆を散らすが如き水禽嚮くが如き山河の光景は既に目睫に集るの短距離に逼りたり余と同行せらるべし」と盟嗽せざる儘急ぎ船橋に上れは此時日已に三竿「モスクワ」號は碇繫場「ストレロフカ」村を發したりしなり顧れば「ストレロフカ」村は模糊の間に見ゆるを船長に村狀を問へば戸數六十六人口二百四十一人の小村落にして見るに足るべきものなしと答ふ間もなく「モスクワ」號は航路を左右に取り上「トングース」河と「エニセイ」河との會點に進行せり上「トニグース」河は源を貝加爾湖に發し「アンガラ」河となり「イルクーツク」縣内を走る千露里「エニセイスク」縣を過ぐる七百露里北緯五十八度の處に至りて「エニセイ」河に入る水温の寒冷なる流勢の速かなる何れも著名のものにして就中水量に至りては殆んど「エニセイ」河全流の四分の一を有すべしと傳へらる

此時「モスクワ」號は航路を左方に轉じたりしが此處は宛も北緯五十八度七秒の處にあり「カマローフ」氏は始終船橋に佇立して望遠鏡を瞼邊より離さず水夫は測量に忙はし畢竟するに航路の前途は屢々上「トングース」河の洪溢に變更せられて時に深淵となり時に淺瀨となりて屢々不測の難船に出逢ふが爲めなりと云へり會點の殆んど中央に至れば四方茫漠として宛かも海洋の如く兩河の會する處水相搏ちて泡沫を飛ばし澎湃震蕩碎波水煙を騰げ餘勢或は左右し或は前後して幾條の流域は各其方向を異にせるを見る殊に上「トングース」の激流は矢を射るが如き勢ひを以て「エニセイ」の本流を靡け之を西部の低原に汎濫せしめ八九露里に洪溢し水域の重なる部分は三菱形を形作りて三個の三角洲を現出せり三菱形の下部乃ち會點以下に於ける「エニセイ」河本流の

前面には二個の大島嶼横はりて「エニセイ」河は三條に分岐せらる島嶼は何れも周圍六七露里もあるべく其右なる島嶼の如きは楊柳の類隙間なく繁茂し左なるは灌木と雜草との發生せる島嶼にして何れも漁場の數多く沿岸に設けられつゝあるを認めたり是より「エニセイ」の本流は專ら西に走る殆んど二十露里其間兩岸の光景は概ね一樣にして濃厚なる根、白樺樹の森林間より人家を認め或は高丘の半腹に耕園を見るのみなりき

同調一樣なる兩岸の光景に心寂しく船橋に上れば西岸は高丘遠く亘り東岸は廣袤限り無き低原にして雜草發生の牧草地のみなりしが午後五時「モスクワ」號は「エニセイスク」町碇繫場に着したり

「クラスノヤールスク」町より「エニセイスク」町に至る水路大凡四百露里其間沿岸に在る重なる村落は唯僅に六七にして就中「クラスノヤールスク」より下流二百露里許の間に於ては村落最も少く以下は六七露里毎に大小の殖民地と「トングース」人の小部落をも見受けられたり流域は二露里平均にして一露里弱を最狹とし六七露里の廣さを有する處あり砂地の江畔には到る處漁場あり「トングース」人が假住の處として「ユルト」と名づくる天幕製の納屋あり支流と本流との會點には數知れぬ水禽の遊弋せるを認むべく森林中には飛翔する栗鼠の啼くを聞き得べし「カザチリンスク」村近傍よりは蚊蚋の類極めて多く飛揚し來りて旅客を襲ふの勢烈しく就中航行中滊船の進行遲緩なる時の如きは覆面衣無くしては一歩も甲板上に出づる能はざるなり

「エニセイスク」町

西比利亞北部の商業地として其名著るしき「エニセイスク」町は「ヤクーツク」町「トボリスク」町と並行して古來北部の三大商業地と指定せられしが近來「トボリスク」町は「チユメン」町の爲め其商權を奪はれて頓挫し「ヤクーツク」町は偏僻に過ぐるが爲めに商業者を失望せしめ「エニセイスク」町も亦採金業の頓挫と共に商勢一時衰弱したりしを「オビ」「エニセイ」運絡の運河は再び「エニセイスク」町の運命を喚起し來り今や超然として他の二町に比し殆んど三角形の頂點を占むるに至りたり

地は「エニセイ」河の西岸に横はれる亞細亞大陸内部の良港として歐洲の冒險的航海者商業者の屢々此地に來航するを以て其名著るし市街は「エニセイ」河畔數丈高き處に設けられ東西二露里半南北四露里に亘れる六大街九小衢を以て成る巷街整然たらざるも宏壯美麗の石造家屋亦少なからず就中大街の如きは殊に殷盛を極め旅行者をして此町の富裕壯觀の意外なるに驚かしむ地は今を去ること二百八十三年露帝「ミハイラ、

ヒヨドローウエチヤ」の命を受けたる「マンガヂ」初索克の一隊が嚮導者「ポヤドルスキ」の子息「ベートル、アウビチエーリ」及弓戰隊長「チエルキーサ、ルキーナ」氏等を嚮導として「トングース」「ブリヤード」等の諸種族を征服しつゝ此地に來住したるに基因し爾後二世紀間著るしき進歩もなかりしが採金業の發達すると同時に西部西比利亞より南部に惰眠を貪りつゝありし射利者は競ふて此地に來集したるより其黃金時代に於ける「エニセイスク」町の商運は昇天の勢ひを以て四方の貸物を動かし年々の賣買取引千萬留內外に達したり爾後採金業の頓挫したると共に富者は益々富み貧者は益々貧しきに陷り幾多の商沽は榮華の夢を破られ四散せざるべからざるの運命に際會したりしが「オビ」「エニセイ」運河の竣工以來「エニセイスク」町の運命は漸次挽回の緒に就き年々膨脹するの形跡を認め現今は年々四百萬留內外の取引あるに至れりと云ふ

千八百九十八年の調査に依れば同九十年に於て人口七千五百一(內男四三七五、女三一二六)なりしもの今や一萬千五百三十九(男五九五二、女五五八七)石造家屋は四十戶以上木造家屋亦千戶以上に增加するに至りたり

地に郡役所、警察署、郵便電信局、驛傳、町立博物館、圖書館、公私立學校、印刷所、病院、貧民救助院、町立銀行、倶樂部、十四の寺院庵室、製革、製粉、釀造其他の工場合して二十七及劇場、旅館諸汽船會社各出張店及び二百商店の中四十以上は工場及製造處を有せる商店にして町の收入は年々三萬留に達するも支出は之が十分の一にも上らずと云ふ

市街東北は「エニセイ」河に臨み西南は森林を以て掩はれたる高丘と低原とに因りて擁せらる地形高燥「エニセイ」河の水面を拔く四「サージェン」乃至六「サージェン」沿岸は凡て中生層の脆き粘土岩と砂とを以て成り碇繫場は市街の殆んど中央に當れる高崖の下に設けらる艇上には「エニセイ」河に沿ひ廣き納凉所を設け納凉所の下には水浴場を設くる宛かも「クラスノヤールスク」町の光景に髣髴たり市街中尤も段盛なるは大街にして此處には大賈巨商軒を並べ棟を連ねて商業の活潑なると「クラスノヤールスク」町に劣らず商品の重なる取引は地方產出の麥粉類を以て第一とし酒類、革類、魚類、之に亞ぎ織物、金屬品は最も少なしと云ふ市場は新古の二ヶ所に設けられ一週二回其四方より來集する農產物亦少なからざるべく物價は概して「クラスーヤールスク」町と大同小異にして魚類の如きは一割至乃二割の廉價なりとす

此日一隻の曳船を引き離せし後「モスクワ」號は再び「トルハンスク」行の數多き雜貨品を搭載して午後九時半此處を出發したりしが徒然の餘り余は船長「カマローフ」氏より「エニセイ」河航路に關する參考書を借り受け或は氏の實驗說を叩きなどして大要を會得

したり

其二　水運の効力

歐亞の交通を聯環する唯一の金剛繩として東西萬里間の運輸を圓滑ならしむる西比利亞大鐵道の概略はすでに述べたり平時及び戰時に於て運輸上鐵道が負擔する義務の大にして且つ活動の頻繁なると効力の隨つて著しきは固とより瞭然たる事實なりと雖も交通機關に欠點多き西比利亞鐵道が單線列車を以て平時敏速圓滑なる運輸を完ふする事の困難なる例は屢々實驗によりて確められたる事實なりしにも係らず千九百年の北清事變に辛くも重き義務と數多き負擔とを完ふしたりしは畢竟するに水利の輔車相助けたるに基因せずんばあらず軍隊の輸送、附屬品其他貨物の運搬に於て時間を短縮し且つ迅速輕便安然なるとを比照し來れば鐵道と航路とは固とより日を同ふして語るべからざると雖も輸送上汽船が負擔する搭載物の多量充實の殆んど鐵道と相下らざるの効力を有する事は此れ何人も首肯する所なるべし西部西比利亞に「オビ」の大江あり中部西比利亞には「エニセイ」「アンガラ」及び貝加爾の航路あり東部西比利亞には黑龍江の航路あり何れも鐵道なき以前に於て唯一の交通機關として西比利亞の交通を圓滑ならしむるもの就中黑龍江水利の大且つ便なるは著名なるも「オビ」「エニセイ」河の水利は之れを說くもの殆んど稀なりき然れども之れが水利の著名なる一例として西比利亞鐵道線路中中央線と名けらる「イルクーツク」「オビ」間の線路布設期限は千九百年を期したりしものなりしを「オビ」「エニセイ」河の水路を利用せる爲め二年の期限を短縮せしめて千八百九十八年に至り之れを竣成せしむるを得たり即ち「オビ」河の支流「チユリム」「エニセイ」河の支流「アンガラ」の水路を利用して鐵道用の材料を運送せしめたり此時に於ける「オビ」「エニセイ」水路利用の方針は歐露より北洋廻航一は「オビ」河を遡り一は「エニセイ」河を遡り「オビ」河よりは「オビ」「マーリンスク」「アーチンスク」方面に「エニセイ」河よりは「クラスノヤールスク」及び「イルクーツク」方面に輸送するの航路を取りたり此の水利應用の新事業としては千八百九十三年三月十八日第三回西比利亞鐵道會議に於て「エニセイ」河口の檢測隊を派遣するの討議及び探檢費三萬留の豫算案を可決する後同年十一月廿二日第十回の鐵道會議に於て「オビ」「エニセイ」兩河の水路を利用して鐵道布設材料品を運搬するの討議を遂げたりしが千八百九十四年二月に至り第十四回鐵道會議に於て「チユリム」及び「アンガラ」二河の航路改修工事着手の討議を遂げ豫算額百萬留を支出する事に決したり千八百九十四年五月十五日第十七回會議に於る海軍大臣の建議に基つき「エニセイ」「オビ」兩河口及「カール」海一部の檢測費として十萬

八千十留の豫算案を可決し全年六月十二日十八回の會議に基き工部大臣の提出により「チユリム」「アンガラ」河の航路改修費として五十萬留の增加案を提出し異議なく之を可決したる爾後年々此方針を繼續し水路利用の効力は千八百九十八年に於て歐露より「イルクーツク」に達するの西比利亞鐵道を速成せしめたり而して中央西比利亞鐵道布設用の材料品の過半は北洋廻航「オビ」及び「エニセイ」の兩航路を利用したるものにして北洋回航「オビ」河を遡りて「オビ」及「アーチンスク」に達したる滊船は前後六回鐵材十五萬八千布「エニセイ」河を遡りて「クラスノヤールスク」「イルクーツク」に達したる滊船は前後十一回鐵材合計三十六萬七千八百布に上りしと云へり左に「アンガラ」「エニセイ」河「エニセイ」「オビ」兩河連絡の運河各航路の小沿革を述ぶべし

「エニセイ」河の航通

西比利亞旅行者の西比利亞の水利を說くもの先づ黑龍江を推す黑龍江の水利三千露里「レナ」河の水利二千二百露里餘は世人已に水利の大なるを認めつゝあるべしされど「オビ」「エニセイ」兩河連絡後の航路五千七百露里餘に至りては是西比利亞最長の水利として世人殆んど之を知るの機會を得ざりしに近年に至り「オビ」「エニセイ」兩河連絡の運河は「エニセイ」河の航路の面目を一新せしめたると同時に其名亦歐洲の航海社會及商業社會に隱れなきものとなれり東西部西比利亞の都市を連結する最長の水路として夙に航海社會の注意を惹きたる「エニセイ」河は其の四十餘年前は單に風力と人力とを藉りて河域を上下するのみなりしが「エニセイ」滊船會社の開始せらるゝや殖民多き村落に近き支流にも漸次航通を普及し或は會社組合等を私設して東は「アンガラ」河に依り貝加爾湖に達する航路と「エニセイ」河を上下して南は清領より北は北氷洋に至る航路及西は「オビ」河と「エニセイ」河との連絡運河を開鑿して「テユメン」市に達する航路とは長き星霜を重ね幾多の失敗を繰返しつゝ晚年に至り何れも完全なる成功を遂げし以來世界の諸川中殆んど比類なき長水域の航路を有するに至りたり元來「エニセイ」河は水層割合に多くして全流域は旱魃の際を除く外絕えず航通し得べきも十數年前迄は航路不明なりしより屢々暗礁砂洲等に觸れ爲めに難破せるものも亦少なからざりしが晚近實驗に富める水先案內の功に依り是等の危險は殆んど完く消盡し去り河口より上流なる「ミヌシンスク」町に至る間は航通極めて安全にして難破沈沒等の憂ひを免るゝに至りたり

「エニセイ」河滊船會社は千八百六十一年に創設せられ航通を開きしは千八百六十三年にして「エニセイスク」町より下流「トルハンスク」町を經由し「トウストイ、ノース」村に航通

を開きたり其後「クラスノヤールスク」町の一等商「ガダローフ」氏は英國人「クノーブ」氏の所有滊船二隻鐵骨木皮の曳船數隻とを購ひ一を「モスクワ」號一を「ダリヌイム」(現今の「グラフ、イグナチウエチ」と名づけ「エニセイスク」「クラスノヤールスク」間の航通に充てしが千八百九十三年よりは猶「ロシヤ」なる一隻を增加したり露西亞號及「グラフ、イグナーチウエチ」號は馬力各百を有し此他「アンガラ」「エニセイ」滊船會社所有船「ニコラヒ」は馬力百四十を有する滊船にして同九十三年に於て露西亞號は二十七回「グラフ、イグナーチウエチ」號は二十三回「尼古拉」號は六十八回の航通を爲したり就中「尼古拉」號の同年に於ける貨物の運搬は九千五十四布乘客四千百五十九人なりしと云へり千八百八十八年より爾後五年間に於ける「エニセイ」河の運送統計を擧ぐれば八十八年に於て滊船の數三、乘客八千四百二十八貨物十四萬九千四百七十二布同八十九年に於て六滊船乘客一萬千二十八貨物十七萬三百七十五布同九十年に於て四滊船乘客一萬二千四百二十六貨物二十四萬七千六百四十五布同九十一年に於て四滊船乘客一萬三千六百九十八貨物十九萬七千八百九十六布同九十二年に於て三滊船乘客一萬三千五十九貨物二十四萬八千七百二十一布と算せられたり「ミヌシンスク」「クラスノヤールスク」「エニセイスク」三町間の「エニセイ」河航路は七百八十露里にして「トルハンスク」管區方面に航行を爲さず一年一回或は二回の航行を試むることあるも之れが航期一定せず千八百九十三年「トルハンスク」に航行せし貨物の總量は麥粉魚類雜貨等にて三萬布價格五萬五千留に達せり

「アンガラ」河の航通も亦下「エニセイ」河の如く一定の航期を有せず千八百六十八年に於て阿蘭陀の一會社は「アンガラ」河の航通を企て「エニセイ」河より「イルクーツク」府に達せんとする冒險的航行を計畫せしも實行するに至らずして已みしが千八百八十一年に至り私立滊船會社の船長「カリステントフ」氏は「アンガラ」河の冒險的航行を企て遂に「イルクーツク」府に達したり「千八百八十八年」に至り「シベリヤコーフ」氏は聯環形の二滊船と三隻の曳船を伴ひ麥粉三萬布及荷車を搭載して「アンガラ」河を遡る四百餘露里「エリマ」河の會點に至る殆んど五百露里の下流に於て航行は蹉躓したり「エリマ」河の上流は航行極めて自在にして危險の憂ひなく是れより上流は凍合時期を除き旱魃の際と雖も自在に航通し得べき處たりしを以て遂に千八百九十三、四年に至り暗礁破壞淺瀨浚渫の工事あり是より「アンガラ」流域千七百露里は自由安全の航行を爲し得るに至りしが更に水路測量として滊船「リユテナント」「マルイギン」「アウエッイン」曳船「スクラートフ」等は水路探檢隊を組織して「エニセイ」河の測量を完結し完全なる航路を發見したりさ

れど「エニセイ」河の歐洲に紹介せられしことの近年の出來事にあらざるは左に因りて之れを知るを得可し

歐亞の航通

千八百五十三年の頃歐洲航海學者社會の一問題となりたる北氷洋廻航亞細亞大陸の內部に入るの說は到底實行する能はざるものとなし冒險的航海者すら口を閉ぢて之を言はざりしも其當時「シドロープ」氏は社會の謬信を破らんと企て屢々冒險的航海の計畫を立てしが千八百六十二年遂に意を決して之を社會の輿論に訴へたり之に應じて航海者「クルセンシテルン」氏は一隊の冒險的遠航隊を組織し北洋回航の途に上り漸次東部に進みしが不幸にして遠征は「カール」海前方に於て蹉躓したり然れども其の結果「カール」海の航行は時期に依り安全自在なるとを確認したるを以て同六十九年「シドロープ」氏自ら遠航隊を組織し冒險的遠航を企て滊船「ゲオロギー」を艤して探險の途に上りしも時期を失して「カール」海を通過すること能はざりきされど此の遠征は益々氏の素志を固め所信を確かめ北氷洋回航北亞細亞大陸の中央部に達し得べきことを地學雜誌「ペテルマン」に掲載して航海者を奬勵し世論を喚起したる上「歐洲より北氷洋に回航して東亞の「エニセイ」河に達する先鞭者には二千「ステルリンゴフ」(我が一萬九千圓許)を與ふべし」との旨を廣告せしが此勇壯なる奬勵に應じて冒險的遠征に上りたるは英國人「ウエッギンス」にして氏は千八百七十四年滊船「ジアナ」號に搭じて無難に「カール」海を橫斷して「オビ」灣に入り次で「エニセイ」河口に達し翌年悉なく英國に歸航したり次て千八百七十五年瑞典の商人「デクソン」氏は「アルデンシリード」男を總理として帆走船「アプイト」號に乘じ北氷洋回航遠征を企てしが男は千八百六十年頃より「シドロープ」氏の所說と氏の實驗とを確認せるものなりしに依り幾多の辛苦に屆せず難なく「エニセイ」河口に達し帆走船「アプイト」號は歸國し「ノルデンシリード」男は「エニセイ」河を遡り「エニセイスク」町に達し夫れより陸行西比利亞を經て歸國したりき翌七十九年「シドロープ」氏は「エニセイスク」町に於て築造せられたる滊船東雲號に搭じて「エニセイ」河口を發し聖彼斯堡府に着したり此年「シベリヤコープ」氏は「フラーゼル」號に搭じて「エニセイ」河口に達せしが搭載貨物は煙草砂糖及諸器械にして翌年再度の航海を遂げたり千八百七十八年「クラスノヤールスク」町の商人「ガダロープ」氏は「クノープ」氏の所有滊船「モスクワ」外一艘を購ひ北氷洋を回航して「エニセイ」河口に達し「モスクワ」號は「エニセイスク」町迄遡りたり此時より北氷洋を回航して亞細亞大陸の中央部に達するは困難ならざる事實として世人が怪疑の問題を解釋せしが千八百八十七年には英國に於て英西貿易

汽船會社なるもの起り同年「ウエッギンス」船長となり汽船「フィニス」號は貨物を搭載して「エニセイスク」町に達し翌八十八年汽船「ラブラードル」號は第二の航海を繰返せしが貿易は凡て損失を以て滿され已むを得ず一時此貿易事業を中止したりき千八百十三年に至り政府は二艘の汽船を「エニセイ」河に派遣せり其艦長は「ウエッギンス」氏にして「オレステス」號には中央西比利亞鐵道用の鐵材千五百噸及び諸雜貨品を搭載し「ミチッソ」號には諸機械、農具、金屬品及び雜貨を搭載したり此年政府は「エニセイ」河航路探檢として遠征測量隊を送り安全なる航路を發見したる後二隻の汽船を新調して航通に供したり即ち一は「アウイッイン」と稱し馬力百、吃水八呎一は「リユテナント、マルイギン」と稱し馬力五十吃水三呎半共に六萬布の貨物を搭載して「エニセイスク」町「クラスノヤールスク」町間を航行したり要するに北氷洋を廻航して「ユーゴルスキ、シャール」を經て「カール」灣に入るは七月下旬乃至八月初旬を以て航海安全の時期とし「エニセイ」灣に入れば九月中旬迄航行し得ると云へり千八百九十五年「ウエッギンス」氏は新に英國北洋貿易汽船會社を創立し資本金三百萬「ステルリング」を募集して汽船七隻を購ひ年々「オビ」「エニセイ」「レナ」の諸川に向て交通を開きつゝ目下益々其事業を擴張したり

左の如く「エニセイ」河の航通事業は「アンガラ」河と共に一千八百六十一年「エニセイ」「アンガラ」汽船會社の起りし後即ち同六十三年に於て航通は開かれしも航路の不完全なりし爲め千八百九十三年までは著しき運送事業として世人の注意を惹くに足るべきものなかりしが現今「エニセイ」「アンガラ」河の航路は「オビ」河と合したる爲め著しき進歩を顯はし「オビ」「エニセイ」汽船會社は起りて西比利亞の西端「テユメン」より東部西比利亞の「ウエルフネウヂンスク」に至るべき貨物は鐵道に因らず馬車を藉らず單に水路を利用して之を運送するを得るに至りたり蓋し此航路は千八百九十五年以後に於て完通したるものにして航通固より頻繁とは稱し得ざるも將來此の航路の西比利亞殖民、開拓、商工業、軍事に關して運輸上莫大の潜勢力を附加するに至るは明瞭なる事實なるにも係らず創開日尚ほ淺きが爲めに未だ之れが水利の世に發表せられざると同時に世人また之れが水利と航路とを知るもの少く之れが顯著の一例として千九百年八月「テユメン」府より發したる二艘の汽船の「イルクーツク」府に達したる際幾多の市民を驚かせし中右の汽船は「オビ」河を下り北氷洋に出て「エニセイ」河を遡りて「アンガラ」河を航せるものなるべしと誤解したる者さへありしが此汽船は即ち「オビ」河より「オビ」「エニセイ」の運河を經由して「エニセイ」河に入り「アンガラ」河を航行したるものにして其「テユメン」より「イルクーツク」府に至るべき航路は五千露里弱の航程にて二十六日間を費したるも

のなりしと云へり即ち此航路を名けて「オビ」「エニセイ」運河航路となす左に之が大要を概記せん

「オビ」「エニセイ」運河

「オビ」「エニセイ」運河は其名の如く「オビ」河と「エニセイ」河とを連絡し之が水路を利用して交通運搬の便を計るもの運河開鑿の起源は遠く十八世紀時代にあり、今を去る百餘年前即ち千七百九十七年露帝「パウラ」の時代に於て「オビ」「エニセイ」兩河を連絡するの議已に朝野の間に囂々たりしが千八百十四年に至り西比利亞第十區土木課は技師を派遣して「オビ」「エニセイ」兩河の連絡線を探檢測量せしめたりしに此時技師の蹈査し實測せる處は「ワーホ」「エローグイ」の兩河間「トイム」「スイム」の兩河間「クーチ」「ケーム」の兩河間の連結線なりき星霜殆んど六十の後千八百七十五年に至る迄は朝野共に此問題を放棄するが如く忘るゝが如く何人も之れを口にし筆にして運河開鑿の緊要を唱導するものなかりしが此年尤も完全なる運河開鑿線として「オビ」河の支流「ケーチ」と「エニセイ」河の支流大「カス」間の新線路は發見せられたると同時に西比利亞の商人「フントソフ」氏は自己の動產を拋つて此運河事業を成就せんと試み之れを露政府に上申して此運河開鑿の必ず成功す可きことを論じたり此に於て政府は「フントソフ」氏の上申に基づき指定の箇處に技師を派遣し更らに實地蹈査する處あらしめたりしが果して此線路は最も便利にして安全に經濟にして速成し得可き唯一の開鑿線なることを認め政府は千八百八十一年技師をして精測せしむる所あり翌八十二年七月二十七日勅裁を得此處に運河開鑿の工事に着手するとはなれり兩大河連結の水路は「オビ」河の一部に於ては「ケーチ」河より始まり「オビ」河との會點より上流「オーゼルノ」河との會點に至る殆んど五百五十露里此れより「オーゼルノ」河に因り支流「ロモワート」河に入り「ロモワート」河との支流「ヤゼウ」河に出て此れより水源地なる「トンドレン」の湖水に達するものにして湖水よりは「エニセイ」河の支流小「カス」河に至るの間運河を開鑿し小「カス」河より大「カス」河に隨かひ「エニセイ」河に出づるもの而して運河を開鑿し暗礁を除去し不完全なる航路を自由圓滿ならしむるの工事を要する箇處は殆んど百露里にして就中運河開鑿の延長線は七露里四十六「サージェン」となす即ち各河域間に於ける航路を舉くれば「オーゼルノ」河十四露里半巾十乃至四十「サージェン」「ロモワート」河四十七露里半巾五十乃至三十「サージェン」「ヤゼウ」河三十一露里四百五十「サージェン」巾五乃至二十「サージェン」「トンドレン」湖より小「カス」河に達する運河七百露里六十六「サージェン」小「カス」河八十九露里巾六「サージェン」乃至三十五「サージェン」大「カス」河百九十二露里巾十五乃至八十五「サージ

エン」通計「オーゼルノ」河と「クーチ」河との會點より「エニセイ」河に至る三百八十二露里五十「サージエン」にして「オビ」河より「エニセイ」河に至る航路は總計九百三十餘露里と算せらる工事は千八百八十三年に始まり千八百九十三年迄工事費殆んど二百五十萬留に達し千八百九十八年迄二百七十七萬留以上を要し今や殆んど竣成し時々滊船の航行をなすと雖も尚ほ航路の不完全なる處あるより今後二年即ち千九百二年を期し完全無缺の自由航行をなすを得るに至らしむ可しと云へり而して各河域の淡渫及び更らに開鑿を要するの箇處としては「オーゼルノ」河十四露里間にして現今此航路は重もに夏時にあり殊に旱魃の際は航行幾分歟困難なる可きが故に尚ほ充分なる河浚ひを要す可く而して滊船の航通し得可きは船躰の長さ十四「サージエン」巾三「サージエン」吃水以下一丈二三尺迄は航行安全なる可しと云ふ元來此航路たる水量常に充分にして縱令ひ夏時旱魃の際と雖も「トンドレン」湖よりは充分なる水量を供給し得可く即ち湖水の面積は百五十三萬平方「サージエン」にして水量四十六萬立方「サージエン」を貯ふを得可しと云へり現今工事は殆んど凡て竣成せりと雖ども「オーゼルノ」河を除くの外尚ほ更らに工事を施こす可きの處は小「カス」河に於て三十五露里許の間は水底尚ほ淺き處あるが故に浚去工事を要す可く而して航路中大「カス」河百九十二露里は航行尤も安全にして縱令旱天水涸るゝの時と雖ども危險の憂を感ずることなしと云へり現今此運河を航行する滊船は唯一隻にして「オビ」河より「エニセイ」河に達して廻航するを常とす而して千八百九十八年迄運河を經由して運送したる貨物の總量は官品を除き五十萬布以上に達せるも此等は「トムスク」「エニセイスク」の商民が唯便宜上積載せるものにて千八百九十九年には航行汽船は二隻となり全年度に於ては乘客二千八百七十五人貨物十二萬七千布を運輸し九百年に至り五月より十月迄五ヶ月間に運河を經由せる貨物の總量は四汽船にて商民の貨物九萬千布官品十一萬三千布に計算せられたり而して此れ等の官民貨物は十中七八は西部西比利亞より東部西比利亞に輸送せるものに係はり二三は東部西比利亞より西部西比利亞に輸送せるものに係はれり即ち貨物の大半は「オビ」河を經由せるものにして西「チユメン」より北「トボリスク」南「トムスク」東「オビ」河畔の殖民地より輸出したるもの多し就中麥粉類尤も多きを占め毛織物及び金屬品また尠からざりしが此等の貨物は「オビ」「エニセイ」の運河を經由して「エニセイ」河に出て此れより「クラスノヤールスク」に運送せるものと及び「アンガラ」河を遡りて「イルクーツク」に達し直ちに貝加爾湖東に輸送せるものまた尠からざりしと云へり

其三　「エニセイスク」「トルハンスク」間所觀

船室の窓下に餘念なく「エニセイ」河の水利を調査せる中何時しか身は卓邊を離れて夢に入りたりしが汽船の動搖、乘客の喧噪、水夫の叫喚に脆くも夢は破れ急ぎ戸を排して甲板に出づれば船は砂洲の上に乘り上げしなり

此處は「ニクリーノイ」村落の上流大凡六七露里にして幾十の大小島嶼は水域に沿ふて長く南北に亘り島中には楊柳の類繁生して島景宛ながら畫くが如く流域遲緩なる島畔には無數の水禽遊戯して汽船の到るを知らざるものに似たり急ぎ船橋に上り「カマローフ」氏を訪へば此時氏は事務員と共に逆行するの準備に忙はしく搭載貨物の處分乘客上陸の周旋に奔走するの折なりしが余の至るを見るや氏は言葉忙はしく「日本の旅客よ連日の旱天に「エニセイ」河の水涸減じて不圖も船は坐洲なしたり元來此近傍は縱令ひ旱魃水淺き時と雖ども七八呎に下ることは稀なりしに測量錘丸の僅かに四呎內外に達するを見れば下流の航行は到底望み難し假りに航行し得るとするも「トルハンスク」に達するには殆んど一ケ月內外を費さゞる可からず、されば「オビ」「エニセイ」運河經由の貨物及び「トルハンスク」方面に向ふ貨物は一時此處にて卸したる後小船にて流域を下るより外なかる可し貴客の素望を完ふせしむると能はざるは遺憾之れに過ぐるものはあらざれども河水の減少は人力にて如何ともす可きなし左れど幸ひにも「トルハンスク」行の郵便物あり此れ等は狗脚鹿背を假るも送達の必要あるが故に該當監督吏に謀らば便乘するの幸機を得んと懇切なる氏の芳志を謝しつゝ余は「東洋の孤客不圖も貴老の斡旋に因り幸ひに北極圏內の實況を探驗せんと希望せし甲斐もなく水深からざる爲めに貴船は逆航の已むを得ざるに至りたるは此れ余の不過にして如何ともす可き樣なし貴老の好意に隨がひ郵便監督官吏に便乘を乞ひ一たびは北極圏內に進入して地方の實狀を探り萬一逆征し得ずんば北洋回航の英國船に搭じて歐洲に回航す可しと厚く「カマローフ」氏に謝し船橋を下り郵便監督官に會し懇請の末快諾を得小舟に乘じて殆んと九百露里を下るとに決したり

郵便船に便乘を乞ひしは余及び「トウストイ、ノース」行の郵便監督官及び「トルハンスク」行きの露商三名都合六名にして船內には鍋、竈、食器、食料品、蚊帳、天幕、其他旅行に要する凡ての器具は悉とく備ひ付けあるが故に上陸する頃はしさもなく流れに隨つて下るを得るなり「エニセイスク」の下流即ち上「トングース」以北は流域大に擴張して河身の幅五露里より十露里に及び水勢の速かなる處は一時間十五露里乃至三十露里の速力を以て流下するが故に「トルハンスク」に達するには多くも五晝夜を費さゞる可しと云ふ

六月十五日一行六名は此處を發して「エニセイ」河の左岸に隨ひ流下なしたり「エニセイ

スク」「トルハンスク」間を陸行する時は千〇八十四露里あり其間に四十三驛傳の設けあるも流刑人の移住村落、土人の村落等を除けば其他は「ユルト」と名つくる一軒家のみにして現今は小舟にて「エニセイ」河を上下するが故に道路荒廢して「エニセイスク」の以北百七十五露里の「ナジモーウオ」村より北部は殆んど無人の曠野のみ樹林は蓊蔚として草深く禽獸は各處に見得可きも住民なく唯僅かに遊牧民の「ユルト」と漁業者の納屋を見しのみなりき

一行の發せしは午前一時半頃にして東方完く白みし時なりしが午後十時半太陽の地平線下に入りたる頃ほひ「エニセイ」河の支流大「カス」河の會合點にと達したり此處は「エニセイスク」町を距る殆んど二百三十露里「オビ」「エニセイ」運河の連絡線にして此れより「オビ」河と「ケーチ」河との集合點に達する殆んど九百三十七露里あり緯度より算すれば北緯五十九度五十分の處にあり大「カス」河の「エニセイ」河に集注する會合點は流域汪洋として宛かも海洋の如く遙かの沿岸に於て數戸の漁家此處彼處に散點するを見るのみなりしが大「カス」の「エニセイ」河に注入する前面には周圍二乃至五露里餘の島嶼散在して流域を七八條に小分せり楊柳繁茂の島間を流れに隨つて下れば左方大「カス」河の沿岸に十數戸の部落を認む此れより船は益々流下して「アンベドーフ」島の右岸に沿ふ七八露里にして大村落を島中に認む此れ地方の大村落にして「トングース」「サモイド」及び流刑人の混住地なり該島は幅員五露里長さ二十五六露里にして「エニセイスク」「トルハンスク」間に於ける「エニセイ」河中の最大島嶼なりと云ふ島中樹林に富み白樺、楡、楊柳の數種は蔚々として繁生し樹蔭濃き江畔には無數の水禽遊弋するあり島の殆んど中央少しく灣形をなせる處に數棟の木造大家屋を見る此れ有名なる「エニセイスク、イクラ」と名つくる魚卵製造所にして鱘魚の卵より製造せる魚卵のみにても年々の輸出高十萬留以上に及ぶ可しと云ふ此れより水勢益々強迅にして一時間の速力二十露里以上に達し島の北端よりは水深六「サージェン」乃至八「サージェン」に及ぶ右方は山脈近く「エニセイ」河を壓し流域を越えて左岸遠く連亘せり爲之「エニセイ」河は流域を支離せられ數條となりて或は灘となり或は岩層島となるを以て航行危險の箇所また少なからず即ち「ドブチャッキ」村より下流十八露里にして「カーメンヌイ」「ボンワーヌイ」等の奇巖あり大牛、小牛、黄金岩等の岬角あり就中大牛巖は高さ二十七「サージェン」長さ七十「サージェン」餘にして恰も臥牛の如く黄金岩は銅脈各處に露出し光輝燦爛として其日光に反射する時は殆んど眩目するを以て土人は之を神岩或は聖山と稱へ絶頂に石を疊積して四季參詣するもの絶ゆるとなしと云へり此れより下流は水極めて速かにして就

中「ヲシノフスキ」灘の如きは傾斜鋭とく瀧の如くに流下し流聲囂々として宛ながら百雷の鳴るが如く「エニセイ」河の航路中最難の處として屢々難破の不幸に遭遇することあり此淺瀨は左右兩條に分れ左方は旱魃の際と雖も水深三「サージェン」を下らざるも右方は一「サージェン」に上らざるが故に流船の航行は左方を上下するを常とす「ヲシノフスキ」灘は殆んど五露里餘に亘り盡くれば「ヲシノフスキ」小部落を左りにし數露里にして此れより「トルハンスク」管區となれり此處は北緯六十一度二十分の處に當り有名なる中「トングース」は此れより下流二十露里の處にあり中「トングース」河は流域千五百露里にして沿岸は樹林に富み禽獸に豐かなり「エニセイ」河の「トルハンスク」管區に入りしより西北に流るゝ殆んど二百九十露里「ガンガト」岬角と名くる奇岩の淺瀨に至り「ガンガト」部落より流域は常に正北に向ひ三百露里許にして下「トングース」河に會す中「トングース」河より下流三十露里に「スマロコフスク」村あり戸數僅かに六七の「トングース」人部落にして露人の二戸も之れに雜住せり此近傍より左岸は山脈漸く盡きて擴張せる平原となるも右岸は猶高峻ならざる山脈遠く連亘せり河身は廣袤三露里内外にして水底二「サージェン」に過ぎず「スマロコフスク」村と相對して有名なる「スマロコフスク」島は始まれり幅員一露里半長さ五十露里餘に上り島中には雜草及び灌木類繁茂して牧場に恰適せりと云ふ此れより下流には九ケの島嶼斷連し「ガンガト」岬角より上流七露里の處に「アベチカント」と名くる有名なる暗礁は各處に散在し航行者をして最も苦心せしめ寒心せしむ

「ベキンスク、ユルト」の近傍より左岸は遠く低濕なる曠原となり湖沼各處に散在し短矮なる白樺白楊西比利亞果實の數種は發生し水禽の遊弋無數なるを認む此れより流域は四五露里に擴張し兩岸は平坦なる低原のみにして短矮なる白樺樹と「チエレムハ」の外喬木は見ると能はず益北するに隨がひ草木は益短矮となり北緯六十三度許よりは根松類は完く之れを認むることを得ざりき

下「トングース」河の會點に達せしは宛かも日曆六月二十二日にして此日は朝來天清澄なりしが太陽は終始地平線に沒せず午前一時には已に太陽の全面を認め得たりき郵便監督官の言に因れば此日午前七時頃迄には「トルハンスク」町に達す可しと

下「トングース」河の會點以下の「エニセイ」流域は二條に分る左方は眼眸限りなき大低原にして右方は低濕なる湖沼多き平地なり左方の大低原を南北に兩斷するは「トンハン」河にして「トルハンスク」町は實に「エニセイ」河の以西八露里の「トルハン」河畔にあり午後四時「トルハン」河口に達し此れより岸に沿ひ徒歩しつゝ「トルハンスク」町に達せしは日

暦六月二十二日午後六時過ぎなりき

「エニセイスク」町より「トルハンスク」町に至る千〇八十四露里之れを緯度に徴するに「エニセイスク」町は北緯五十八度二十七分に位し「トルハンスク」は北緯六十五度五十六分に位せるを以て千〇八十四露里の間は地球半面の殆んと十二分の一弱に當れるなり而して「エニセイスク」町より「トルハンスク」に達する一行は殆んと七昼夜百六十八時を費やしたるを以て其「エニセイ」河を流下するに小舟に因り碇繋時間の三十五時間を除けば櫓櫂を用ひすして一時間平均八露里強を下りしなり江畔に横はれる村落としては殆んと見るに足る可きものなく往々燻魚を製する露人の漁場を見受けしも此れとて目を惹くに足るものはなかりし「エニセイスク」方面より中「トングース」河近傍に至る迄樅、松、五葉松、落葉松、白樺、水楊、白楊、赤楊菩提樹等の數種は其區域を異にし樹林帶をなして繁茂せしを認めしも此れより以北は喬木次第に形を改め影を陰くし「トルハンスク」方面に至る頃ほひ最早樹林帶を見る能はざるに至れり

余等一行の「エニセイ」河を流下するや行船は殆んと四六時中絶え間なかりしが午前六時に上陸して朝食せる外は舟中に於て隨意に飲食し起臥しつゝ常規に因りしとなかりき、起臥飲食に度なき舟中の窮屈に堪へ難く余は唯釣を垂るゝとをのみ殆んと常務となせしが「エニセイ」河の水族の豐富なるは論を待たざるも流れに隨つて一たび針を投ずれば小鱒「オーモリ」「シーグ」(何れも西比利亞鮭の一種)鯰鯱、の類は夥しく餌邊に集合せるを自製の箭にて捕獲せしとは屢々なりしされど蚊蚋蚋の羽蟲は非常に夥しく時々煙霞の如く輪形をなして上下に翔翔しつゝ來襲せるに惱まされ之れが爲め曇天風なきの日一行は蚊帳を以て高く小舟を覆ひ上陸する時を除くの外は深く舟中に潜んで談話の外何事もなし得ざりき

○北緯六十六度以北の實況

其一　「トルハンスク」町

「トルハンスク」町は北緯六十五度五十四分の處にあり緯度より算すれば「トルハンスク」町は北極圏を距る僅かに三十六分に過ぎず「オビ」灣頭の「オブドールスク」白海灣頭の「アルハンゲルスク」「ボトミ」海峽の「ウレアブルグ」等と東西相並んで北部の商業地たり市街は「エニセイ」河を距る八露里「トルハン」河の左岸に横はり整頓せる街衢なく巷間なし家

屋の過半は短矮なる白樺に獸皮を結びて壁とし家根となしたるものにして「エニセイ」河上流の森林地より筏として流下したる梭材の丸木を組み上げたるものもあり大街と名けらるゝ一條の道路は斑らなる家屋の間を迂回するのみにて此他に小街なし地位低濕なる草原地の少しく高まりたる處にあるが故に市街は稍々低濕を免るゝも猶處々に凹凸ありて潴水は夏期旱天の際と雖ども乾燥するとなく濕潤なる汚氣穢濁なる死水は常に市街の空氣を濁し遊牧人種を除きては三年間此町に於て健康を保つこと難しと云ふ

地は千六百七年の頃今の「トルハン」河の沿岸に於て馬宿を設立したるに基因し仝六十二年に於て「トルハンスク」なる名稱與へられたりしが爾後千八百二十二年六月廿二日「エニセイスク」縣の「トムスク」縣と分離するや「トルハンスク」町は「エニセイスク」町管區の一部分として之れに附屬し仝八十三年更に「トルハンスク」管區と改められたる以來は特別なる自治類似の行政を布きつゝ現今まで之を繼續なしぬ千八百九十一年の調査に依れば「トルハンスク」町住民共有地は二千二百八十五「デシヤーチン」にして其當時は家屋三十一戸人口二百〇七(內男百十三女九十四)名ありしが余が調査せる當時即ち千九百年六月廿四日には戸數三十三人口二百十六(內男百十八女九十八)名にして即ち之を過去十年に比するに更に大差なきを見るべし住民は露國人中胡索克五戸家族三十二名官吏醫師家族十名商人四戸家族八名此他に六十八名の無定業者あり住民の主なるものは流刑人にして少數の「トングース」「オスチヤーキ」「サモイド」等の遊牧人種も混住せり地に麥粉貯蓄庫、鹽庫、氣象觀測所、郵便支局、「トルハンスク」管區役所、私立病院、小學校遊牧民教誨所、石造及木造寺院、商店等あり住民は主もに漁業に從事し及び年々二月公共の市場を開くの際遊牧民と交易して以て一年生活の收入を補ふ

余が「トルハンスク」町に着せしは千九百年六月二十二日なりしが此より以北北緯六十九度半の「ドブチンスク」に往復して殆んど三十日間に該地方の觀察に得たる新現象として北極圈內圈外の氣候、天象、人種、動植物等の南部即ち北緯六十度の方面と完く異なりしは想像の外に出てたりき

氣候

「トルハンスク」町に於て寒氣の尤も酷烈なるは攝氏寒暖計零度以下五十八に下るとあり夏期盛暑の際此れ亦攝氏十八度に上るとあり一年の中其尤も寒烈なるは一月三日頃より十日頃までの一週日にして此際は太陽常に地平線下にありて日光を見ることを能はず午前三時より五時までの間は最も寒烈にして零度以下三十度より三十七八度

の間を上下するは常の如くなりと云へり多年測候所に於て觀察したる一年の平均溫度は年々大差なく其一月には零以下二十六、八、二月には〇、以下二十五、一、三月には〇以下十三、九、四月には〇、以下十、八、五月には〇、以下二、五、六月には九、五、七月には十四、七、八月には十二、八、九月には四、九、十月には〇、以下六、七、十一月には〇、以下二十五、二、十二月には〇、以下三十、四、にして之を一年に平均すれば〇、八六に相當し而して四季の各平均溫度としては冬は〇、以下二十五、春は〇、以下六、七、夏には十二、三、秋には〇、以下五、三、にして之を一年に平均すれば八、六なりとす

右は「トルハンスク」測候所に於て觀測したる前後五年間の統計にして此等を以て單に「トルハンスク」方面の氣候の標準とする能はざるも大抵此範圍内を脫せざるが如し然ども余が「トルハンスク」滯在の際六月二十五日午前二時に於て觀測したる際の溫度の如きは太陽の地平線に上りし頃なりしにも係らず溫度は僅かに攝氏の一度を示せるを見たりき

七月下旬より翌年六月半ばに至る迄は嚴霜屢々雪の如くに下降するとありと云へり此年六月廿七日には朝來寒氣强く濃霧ありて降雪の將さに至らむとする摸樣となり晴雨計は晴雨の不定を示したるを以て余は狩獵をもなさず測候所の一隅に惰眠を貪ぼりつゝありしが覺眠すれば窓外は處々に降雪の斑痕を留めたるに驚き臺上に登り寒暖計を檢すれば此時一度以下二を示したり所長「カルナローフ」氏の言によれば一時間以前までは零點を上らざりしと余が滯留間は三日間を除き天候常に曇りて明かならざりしが霧濃き日には太陽宛かも赤球の如く雲淡き日には太陽の周圍に於て虹の如き大圈を顯はし太陽を中心とし十字形の圈内に於て猶四個の太陽を現はすは常にして此四個の太陽は光色鮮明ならざるも周圍は七色を以て彩どられ其絶景なると言はん方なし雲霧霽れ天氣晴朗なるの日には太陽東より出て南に廻はり西より北に轉じ原位置よりは少しく北なる場所に入るも其全形を匿さず殆んど半形を沒し暫くにして全形を現はすに至る此際天色赤くして白きに蒼を帶びたる光輝は四方に閃めき絶景紙片に盡し難しかくの如き時期は六月十六日より二十六日までの間にして太陽の半ば地平線に入るは午後十一時五十五分より十二時五分までの間殆ど十分間内外に過きず此十分間の天色は分毎に變化し時に白虹の如きもの太陽の四近より長く閃めくことあり赤色と黃色に蒼みを加へたるが如き幾十條の光線の遠く電馳するとありき

盛夏の頃時氣の最も上騰する時間は午後一時より四時までの間にして其攝氏の十六

七度なるに係らず狗馴鹿等は已に喘ぎて暑熱に惱むが如し太陽の常に地平面上にあるが爲めに余の如きは就眠と覺眠時間とを變更せられ倦めば則ち眠り懲けば覺むる等盤居の際には日に三四回も惰眠を貪るとあり或は狩獵の快遊には二十四時間少しも眠らざるとありし等概して衣食住は凡て不規則に趨るとあり

右の如く六月十六日より仝二十六日までの間は二十四時間太陽を見得べきに反し冬期即ち十二月十六日までの間は太陽の光線を見る能はず二十四時間中唯だ午後十一時五十五分より午前〇時五分までの時間に於て十分間のみは太陽の半形を得べきも此他は冴え渡る月凄き星輝の外天地凡て暗黑なりされば此時期「トルハンスク」町の住民は如何にして此長夜を過すべきやと云へば此冬期には不絶北極光の空中に現出して燦爛たる光忙あるが爲めと及月光によりて辛くも暗黑を免るゝと云へり已に九月に至れば住民は馴鹿の角もて堅く墻を繞らし保障を作りて熊狼の害を避くるに汲々たり是等の猛獸は春夏の兩期は深く森林中に彷徨し冬に至れば殖民地に徘徊すると常とす畢竟するに春夏の際は甚長く夜短くして且つ森林内には充分食餌を得べき餘裕あるが故に此處に半歳弱を送りつゝある中秋熟すれば最早食となすべきものなきのみならず是より夜長く甚短なるを以て殖民地の近傍を徘徊し馴鹿、馬等の家畜を襲ふて飢餓を凌かん爲めなりといふ、猛獸の害は重に冬期にして夏期は殆んど稀なり森林深く棲息する猛獸を獵せむが爲め「トングース」「サモイド」「オスチヤーキ」「カラカース」等の遊牧民族は森林近傍に移轉して捕獲に從事し彼れ等が森林を出て殖民地近傍に向つて出づるや遊牧民種も亦彼等の假住を疊みて殖民地に移轉し野獸を獲ること宛も熱帶地方の民族が水草を逐ふて移轉するが如き觀あり

脆弱短少なる白樺樹を接合し二重三重に獸皮を包張して長き冬時の假住とし一年の四分の三を此矮陋なる小天地に送る遊牧人種が生活の模樣は溫帶地方に住める日本人の夢想にだも考へざる所なるべし

其二　北部の動植物

家畜としては馴鹿狗馬羊等なれとも北極圏内に入れば重なる家畜は狗と馴鹿なり馴鹿は角極めて大にして就中長さ三尺兩角は左右に擴張し兩尖頭の間だ四尺に亘るものあり野棲のものは「トナカイ」と名けて性慓悍なるも土人に使用せらるゝものは性溫順にして能く寒氣に堪ゆ其善く走るものは一晝夜二百露里を馳すると云ふ該獸は北極地方の土人に最も欠く可からざる家畜にして皮は土人の被服となり朝手袋靴縫絲桶、榕、杓子、天井壁、敷物、戸、舟、箱其他水氣ある食物を容るゝの器物を製作するに用ゆ而し

て馴鹿の乳は北部の土人の米と謂つべき最不可欠の必要品にして其當初數十頭より得たる鹿乳を大桶に入れ鹿角を以て之れを搔き廻すこと時餘にして上部に浮みたる粘液質の油を汲み取り小桶に入れ室外に放置すれば一日にして純白の「バタ」を得可し斯くして其儘鹿乳を放置するときは上部に濃き白色の粘液を得る此れ「スミタン」と名くるものにして日本の所謂「クリーム」なり

此れより三週の間室内の暖き處に右の殘液を放置するときは自然に醱酵して火酒を得べし然る後馴鹿の皮にて作りたる篩樣のものに之れを漉すときは白灰色の粕を得る之れを揑ねて硬くし日光に洒らすときは乾燥したるものは乃はち乳麵麭にして日本の所謂葛餅を干したる如きものを得る斯くして後に殘りたる液體は乃はち濁りたる白水なれとも之れを室外に放置する一ヶ月に及べば次弟に沈澱して遂には清澄なる水を得る此れ土人には最も必要なる飲料水として一日も欠く可からざるものなり而して肉類に至りては北極圏内外の土民は單に馴鹿の乾肉を用ゆるを常とす乾肉は柔らかにして宛も氷豆腐の如く少しく鹽氣を含める天與の好食なり

「トルハンスク」地方は「サモイド」「オスチヤーキ」等の遊牧人種を除きては大抵火食をなせとも已に北極圏内に入れば火食をなすこと能はざるが故に土人は重に乾肉を用ゆるを常とす此れ決して宗教上より起りたるものにあらずして北部には燃料の皆無なると家屋の氷製なるが爲めなるべし

「サモイド」「チユキチ」「カルガース」等の種族は近來乾燥したる魚類を用ゆるものあるも、シヤマン」教の「トングース」人は宗教の宗規を守りて魚類を食せざるものあり「トングース」「オスチヤーキ」「カルガース」等の遊牧人種は重に蒙古種族と北部の短矮人種との雜種なるかの如く北狄と稱せられて屢々中華を苦めたるは即ち之れ等の遊牧人種の祖先なるべし容貌體格は「サモイド」人を除きては骨相蒙古種に類し血色また黃色人種の血統を保存せり唯「サモイド」人種に至りては體格短小にして相貌血色「トングース」人の如くに蒙古種に近似せす性質また獰惡にして北芬蘭土の「ロバール」人に似たり蓋し「サモイド」人種の遊牧區域は「トルハンスク」方面より「オビ」灣に通じ「ウラル」山を踰え芬蘭土地方に達すと云へば此種族は「グリーンランド」方面の種族と同一種族にして「ロバール」人種と一種なるが如し身長極めて短矮にして概ね四尺内外を通常とし其高身なるものてさへ四尺三四寸を超えざるなり遊牧人種の「トルハンスク」方面に住する數固とより詳かならざるべしと雖も千八百九十八年の調査に因れば遊牧人種は男四千七百十一人女二千五百三十三人計七千二百四十四人なりしと云へり

「トルハンスク」町近傍には樹林地大に少なきのみならず喬木は認むる能はざりし白樺、水楊、薔薇の種類は至る處に見得べきも樹幹丈け一丈以下にして以上のものは殆んど稀なりき而して此れ等の雜樹は根元より支幹多く生じて暖帶地方に生長する樹類の如く一幹直長のもの殆んど稀に幹の直徑三寸にして四十年以上の星霜を經しものを認め得べし露曆五月下旬は時氣次第に暖となるに隨かひ草葉木芽は萠え出し初むると同時に發育非常に速やかにして一週間を經過せざる內に蕾より花芽より葉と生育し斯くて二週間目に至れば其蕾芽なりしもの已に開花し濃綠を呈するに至る七月中旬に至れば時に嚴霜に逢ふて樺樹、西比利亞果實(チエレムハ)等の葉は色素を失ひ紅黃紫等に變色し暖雨に逢へば再び綠色に變する等此等は北緯六十五度以南に於て見得べからざるものとす「トルハンスク」附近には余が尤も嫌厭する蚊蚋の類夥しく市街より市外、河岸、湖邊、澤畔、樹林地、草野到る處に群飛して人畜を襲ひ翱翔し來り風揚し去る其聲雄雷の如く被面衣と手袋とを着くるにあらざれば一歩も郊外を旅行する能はず風起るの日は此れ等毒蟲の害は少なきも風なく天氣曇晦の日は殊に夥しく飛翔して雲霞の如く雌雷の如き觀あり獵犬を伴ひ此れ等毒蟲の群飛せる間を衝き郊外に出づれば低原中には數十百の湖沼は散布し殆んど水色の變ずる程に水禽の遊泳するを見得べく銃を用ひずして之れを打ち網を用ひずして之れを捕ふるを得可しされば此地方より東西數千露里南北數百露里間の低原に散布する大小の湖沼には幾千萬とも數へ能はざる水禽は右より左に左より右にと飛び又かひ時に烏拉爾方面に向ひ時に北氷洋の諸島に向ひ旅行し來るもの幾許なるや到底數へ得らるべきものにあらず此地方は寧ろ人間の棲むべき世界にあらずして水禽の世界なるべき事實を存するを以て「トルハンスク」より北部を指して鳥の世界と呼ひなすもまた奇ならざるべし

湖沼川中には大小の魚類夥しく釣を垂るれば數十尾を獲る事難きに非ず網を投ずれば一時に大小數千の雜魚を捕獲するは容易にして水禽と魚類とは余が「トルハンスク」に到着の當時尤も好んで貪ぼり食ひしものなりしも時經て食に馴るゝに隨ひ此類の珍物も葱の葉一本に價ひせざりき

斯の如く「トルハンスク」町に於ては獸肉鳥肉魚肉の如き食品は之れを求むるに餘裕あり四季共に不足を感せざるも蔬菜穀類の如きは甚だ僅少にして之れが耕植を試むるも生長する以前に於て枯死するもの少なからず然れども近來海藻菜葱、馬鈴薯等の試植は耕培の方法其宜しきを得るがため一年一回は稀れに收穫し得べしと云へり此地方は地下三尺許よりは四季氷結絶ゆることなく地熱としては唯深き地層の下と及び

地平面三尺許とにして二尺より以下に至れば土砂非常に冷となり植物を凍殺するの力あり加ふるに拂曉時々降霜あるが爲めに午後十一時頃よりは降霜を凌がんが爲め耕園を覆ふの準備をなさゞるべからず大根、菜、麥類、胡羅蔔、胡瓜等は發育の不充分にして唯二重窓下に時ならぬ花を開き或は成熟する等に留まれり

「トルハンスク」町に於て尤も不自由を感ずるは飲料水にして市街より「エニセイ」河に至る八露里なるが故容易に之れを運搬する能はざるの不便あり「トルハン」河の水ありと雖も四近より流入する汚水のために流域を亂され異臭あり毒蟲ありて到底飲料水とするに足らず之れがため市街に住居する町民は重もに「ウシクウオ」及び「モギリナウオ」の兩湖水を飲用となす而して前者は水頗る清冽なると雖も「バクテリヤ」非常に多く後者にもまた滴蟲夥しく沸騰せる後にあらざれば之れを飲用する能はずされば土民中衛生を重んずるものは大抵馴鹿の乳汁より得たる水を用ゆるを常とす町内に四商店あり一は麥粉他は織物雜貨金屬魚類毛皮等を販賣せり

物價は「クラスノヤールスク」よりは五割乃至七割或は二倍の價格を有せり年々の商品取引價格は十一二萬留内外にして此れ等は重に遊牧人種と交易し或は販賣するものなり「トルハンスク」町に於ては年々六月上旬に於て公共市場を開く此際四近の殖民地及び遠方の遊牧人種の來集する殆んど二千以上に及び麥粉、鹽、獸皮、魚類、金屬、織物及び其他の雜品を合して五日間に販賣する金額二十萬留餘に及ぶと云ふ

地位北部に偏する丈け住民は恐樣にして世務に暗きが如くなるも彼等は屢々外國人即ち英、瑞、那、及び歐露の文明國人に接する丈け新思想を有する事之れを「エニセイスク」方面の住民に比するに殆んど大差なきを認む地位交通に不便なるがために郵便物は一年僅かに一二回「エニセイ」河に因りて運送し來り去るのみ海路の交通は此れまた一年僅かに一回なるを以て唯夏期一回の外は西比利亞地方との交通梗塞して「トルハンスク」町は完く露國の版圖外の如き觀あらしむ余が此地に着せし時に當り住民は交々余に問ふに北清事件の事を以てし且つ言ふやう「清國の禍亂露國の出兵日本の援兵(露國人は日本の出兵を以て露國を援護するものとなす)等は此回の郵便物に依り漸く知るを得たり唯怨むらくは來年六月下旬まで今回の事件の結果を知る事を得ざる」と無智蒙昧の遊牧人種は論外として可なるも現に土着の胡索克商人等にして日本國を知らざるものあるのみならず相當の教育を受けたりし僧侶が「日清は同國なり清國は帝國にして日本は王國なり」など語るを聞くも可笑しく「朝鮮國は何處にありや」と問へば「黑龍滑頭にあり」など、異樣の答案を得たるに呆れ此後は唯日本の文明に進歩せる事

を少しく誇大に說明し彼等が膽を消し目を張るを見て徒然の憂を慰め居たりき

其三　「トルハンスク」「ドジンスク」間所觀

七月一日北風濃霧を送り來りて咫尺を辨せず時氣は下降して攝氏六度を示したり時を檢すれは午前七時「トウストイ、ノース」行の郵便監督官は此日を以て「エニセイ」河を流下する事なりしを以て余は之れに便乘を乞ひ再ひ一行四名と「トルハン」河を下りたり間もなく「エニセイ」河に出でたりしが水脈は甚しく增加して十日以前に認めたりし淺瀨砂洲の如きは影だに留めず見渡す限り茫々として流域湖沼の如く濁流奔騰して水勢猛烈を加へたり河身の廣さ大凡十露里もあらん對岸の光景は模糊として望遠鏡の力を藉るにあらざれば明かに之れを認め難し殆んど單調一樣の江畔に隨ひ西し東し北して流下したりしが午後十時「アラキシコイ」部落近く「クレーカ」河と「エニセイ」河との集合點に至りし頃ほひ監督官は測緯器を示して言ふやう「日本の旅行者よ船は最早北極圈に入りたり一年を晝夜に短縮し得可き世界の別天地は即ち此邊より北部を指すなり不夜世界とは即ち此れより以北の事なり半歲間は太陽の地平線に入らざる爲め殆んと常に白晝にして半歲は太陽地平線に出でざるも北極光の爲めに自然の大燈火を作り暗を照らして白晝の如し」されば北極圈內の土人が常用する言語には晝夜の二字なきは宛かも赤道附近の土民が四季なる文字を常用せざるが如し元來北極圈內外の區別は緯度を以て之れを分ちたるものにして要する所太陽の出沒に因りて之れを定めたるものなり見らるゝ如く北極圈內外の光景は同一にして到底之れを見分くると難きのみならず溫度の高低を以て辨別し得可きにあらず」と語れるを余は聞きつゝありしが「最にさなり貴說の如く北極圈の區域は單調の光景に因り之れを識別し得可きにあらず如何に此道に明らかなる專門家なれはとて測緯器なく太陽なくんば決して北極圈の何れが內なるか外なるかを辨別し得ざるべし」と此れより雜談に移り舟中枕を交へて鼾聲高く夢に入りたりしが翌二日午前七時覺眠すれば船は「エニセイ」河の左岸の漁場にと着したり此處に一行は上陸して食事に取懸りしが思ひ思ひに鮮魚を調理しつゝ五尺に足らぬ灌木の枯木を集めて之れを束ね下流の「ドジンスク」に携帶せんが爲め數多く之れを舟に搭載して此處を出發したり此れより下流は草木の類益減少して午後二時頃に至り最早灌木だも認むること能はざるに至りたり此邊には河畔の小高き處土民の穴居家屋を認む舟中なりしを以て遠隔せる陸地を明視する能はざりしも湖沼は夥しく散點し水禽の飛翔其無數なるより考ふれば此地方は凡て沼澤地なる可し「トルハンスク」より以下河身は幅員六七露里乃至十露里に擴張し流域中には

無數の島嶼散在せるも島中には灌木なく草なく唯遊弋に倦みて砂上に眠る水禽を認むるのみ水底深くして九乃至十二「サージェン」に達し水勢緩漫にして一時間の速力四露里内外なりき唯「ノーウオ、イルマコフスキ、ユルト」と「プラビンスク、ユルト」の間百七十露里許の流域は兩岸より河身強く壓窄せらるゝが爲めに廣袤三露里許に縮少し水深二十「サージェン」一時間の速力二十露里に及べるの處ありたり此れより左岸は低原限りなく開け右岸は高丘をなして前方を見渡すと能はざりしが斷崖の上には無數の馴鹿此處彼處に遊びつゝ戯むるを認めたりき

「ドジンスク」村に達せしは七月三日午後十一時なりしが太陽は地平線を距る四尺許の處にありて宛かも幻燈に顯はれたる日の如く掛ける旭日の觀ありたり「トルハンスク」より「ドヲンスク」に至る水路五百露里餘を六十四時間にて流下したりしが四回の碇繫時間の十三時間を減すれは流下の眞速力は一時間平均十露里弱に上りしなり

「ドヲンスク」は「エニセイ」河の右岸「ドジンカ」河の注入點にある「サモイド」「トングース」人の混住部落にして露人の二戸も之れに加はれり地は北緯六十九度二十四分の處にあり「トウストイ、ノース」氣象觀測所の出張所は此處に設けらる土人は重に短矮人種の「サモイド」にして「オスチヤーキ」人「トングース」人は十中二三に止まれり上陸の後余等一行は先づ酋長「アルヘントフ」の家を訪ひ刺を通じて面會を求め數日間の滯留を乞ひたりしに氏は露語にて快よく之を諾し余に向かひ「貴客は日本の旅行者なるか這は得難き珍客なり邊僻の寒土君か探檢の材料に資するものなきも厭ふ莫くんば暫時足を駐められよ見らるゝ如く北極近き寒天地には氷の外他に見る可きものなく馴鹿の外他に食す可きものなしされど土人生活の模樣を探檢せらるゝは幾分か後學に利益する所あらん」と余は導かるゝ儘室内に入り先づ家屋の構造の異風なるに驚きたり一方の窓を除き室の四周上下は凡て馴鹿の皮を以て張り詰め壁の凹凸せるは馴鹿の角頭に押されたる爲めなる可く室内には爐なく器物なし隣室に通ずる鹿皮の垂幕を上げて之を窺へば此處は寢室と覺しく小兒は室の一隅に安臥し四邊には鹿皮の堆かく積れるを見る室の他隅には鹿皮製の櫃大小十數個は駢列し馴鹿の乾肉鹿乳より製せる麵麭の幾百をも認めたり室内の各側面には數多き鹿角を釣し之れに懸れる古洋服垢つきたる露西亞更紗「フラネル」等の被服類をも見受けたり室内には食卓なく椅子なく主客相對して跪踞しつゝ談話するを常とす

「アルヘントフ」氏は「ドヲンスク」方面の酋長にして露國政府の訓令に因り「トウストイ、ノース」氣象觀測所の配下に屬して觀測に從事し傍ら馴鹿の飼牧に餘念なし氏の現有せ

る馴鹿の數は二百九十八頭にして鹿角鹿酪鹿皮等を輸出する年々二千留以上に及ぶべしと云ふされど此地方には通貨なきが故に英吉利瑞典那威露西亞諸國と貿易するは單に物品交換のみにて得たる物品は之れを遊牧民に配當して馴鹿を徵收するものなりと貿易品の重なるものは酒類、煙草、織物類、金屬類にして就中酒類煙草類は最多額を占むると云へり氏は年齡已に四十を超へ身長四尺二寸もあらん豐頤にして全身丸く肥え血色赤黑く毛髮肩を掩ひて辯舌また朗かに深く露語に通じ露國の文章に巧みなり蓋し氏は往年「クラスノヤールスク」男子中學校に留學せるか爲めなるべし滯留中余は北極光の事に就き氏の意見を叩きしとありしか氏は地文學者の新說を駁し終りに「北極光は單に磁氣の作用のみにあらず電氣の働きのみにもあらず畢竟地平線下の太陽光線が北極に接近せる氷山を照らしたるもの〻空中に反射するに基因するものなるは宛かも虹霓の空中に顯はる〻か如く太陽西にあれは北極光は東に顯はれ南にあれは北に現はる〻に因りて之れを知り得可く且つ五分間に北極光は其位置と形狀とを變して太陽西南より益西に轉すれは北極光は東北より益東に位置を轉するに徵しても明かなり且つ夫れ電氣又は磁氣の作用のみとすれば現に北極光の位置を換ゆる毎に形を變するの理なく北極光中には倒さまに白熊の氷上に徘徊する光景をも認む能はざるべし」と談氣象のとに移りしに「此地方より以北には溫帶地方の如き夏日の蟲雲なく夏季と雖も雲狀をなせる雲なし唯北部より風揚し來る寒霧のみにして風は六月初旬と八月中旬に微風あるも雪に至りては六七八月の三ヶ月前後を除きては殆んと下降するとなし已に九月に至れは北部より來る寒霧は即ち粉雪にして俗稱綿雪の如きものは此地方には見るを得ざるなり四季の空氣は常に乾燥して設令へば鹿肉の如きも三昼夜にして水氣完く消失するを常とす地熱と太陽熱とは薄弱にして就中地熱は地下數露里を掘るに非らざれば之を感すると雖かるべく盛夏と雖も地下五六寸は太陽熱の爲めに結氷融解するも一尺以下は幾百年間結氷の融解するとなかる可し、されば此地方の土民は十中八九は氷中の穴居にして地を掘る一丈四方の氷室内に鹿皮を張り床は之れを敷き上部は之れを覆ひ地下に別室を設けて冬時馴鹿の稚兒を起臥せしむる處と定むるなり氷室内なれは頗る寒氣を感す可きが如くなれとも決して然らず室内は常に攝氏の十二度を上下するを見れば貴客の如き此地方の狀態に暗きものには豫想外のとなる可し余か住居の如きは此地方に於て殆んと上等に位せるものなり壁の中心は馴鹿の角を交叉し其内外には二重に鹿皮を張りたるものにして六月初旬より八月末までは壁の中心より氷塊を排出して之れを空虛となし九月初旬

に至れば氷塊を詰入れて一は防寒の用に供し一は猛獸の來襲を防くものなり」と此れより談は飲食の事に轉じたりしを機とし余は「何故に此地方に乾肉の外火食を用ひざるや」と問へば氏は「さればなり火食をなさゞるは決して宗教上の宗規にもあらず要するに燃料を得ざるが爲めなり縱令ひ燃料を得ると假定するも氷室内に火を焚かば我等同胞の家屋は忽ち融解して水となり果てなん」と哄笑せるとありき

留まる事三日「アルヘントフ」氏に導かれて氏が牧場を見廻はりしが三百頭近き馴鹿は此處彼處に群をなし各一隊は大凡三十頭もあらん三頭の狗は之れを監視せり各隊は團隊の牧場を自ら區劃して決して他の團隊の區域に侵入するとなし時に誤て他團隊の牧場に侵入するとある時は此處に兩團隊の衝突を起して爭鬪を開始するとあり總じて馴鹿は性柔順にして最も規律を嚴守し牧場の如きは飼牧者の指揮を要せず馴鹿自身に之れを定むるが故に數年間一ヶ所の牧場に日用の飼料を求むるとあり馴鹿の食餌とするものは地衣と名づくる蘚苔類にして草の如きも草にあらず赤色に灰色を混じたる地衣科の一種に屬す地衣は我國占守島の各處にも之れを見得べし其繁殖と發育とは殊に速かにして五日を經ざる内寸餘に伸ぶるものあり四季共に發生して結氷の下に成長すると宛かも澤邊土柔かなる處に發育するが如しと云へり

七月七日午前十時郵便監督官の回航するあり二隻の鹿皮船二名の「トングース」人を雇ひ狗を使用して一行四名は「エニセイ」河を遡ぼるとに決したり

船の準備成れりとて水夫の「トングース」に促され厚く「アルヘントフ」酋長に謝し一行三名づゝ鹿皮船に乘り込みたり

船躰の構造は巾四尺長さ二丈許にして前部は尖りて魚尾の形狀をなし後部は丸くして圓形をなし宛かも魚頭に似たり舵機は後部に設けられ帆には三角形の「ヅック」を準備せり舵機は狗の引き船をなす時にのみ用ひられ狗を使用すると能はざる處に至れば「トングース」自ら櫂を取りて之れを操縱するなり櫂は一挺兩齒にして水掻きは兩側にあり中部は即ち握り得べき柄にして短言すれば日本に用ゆる二枚の櫂を反對に結び付けたるものと同一なり「トングース」が此兩齒櫂を使用するとの活潑に迅速に巧妙なるは驚くべきものにして一たび櫂を手にすれば船は水音高く一進一退其自在なるとは氷滑り器械を用ひて巧みて氷上を進退するが如し船躰は赤楊或は水楊を撓めて之れを中心とし周圍は二重又は三重に馴鹿の皮を以て之れを包合せるものなるが故に船躰極めて輕快にして速力强く加ふるに暗礁砂洲等に觸れ或は坐礁するとあるも容易く破壞するが如き憂なしと云ふ舷頭より舵尾に至る迄楊柳を撓めて骨子を作り

一は雨天の時に天幕を張り一は蚊張を張りて蚊蚋の害を避くるの用に供す船底には空隙を設け底より一寸許りの上部には柳に編みたる簀子を布き之れを覆ふに馴鹿の皮を以てするが故に翦屑ながら蹠踞するとを得るなり

二隻の小舟を「エニセイ」の急流に引き上らんとて伴はれたる十四頭の狗は丈け二尺長三尺以上の肥えたる逸物にして何れも大ならず小ならず躰格殆んど相平均して勇壯に見ゆ特徴とすべきところは耳小さくして鋭く直立し頭大きくして鼻頭細く眼小さく尾を卷き肥肉長毛無骨の中にも愛すべき所あり各一隻に七頭を繋ぎ一組二頭づゝ凡て三組にして一頭は老練敏捷の老狗を撰びて先導たらしむ一行の進行を始むるや岸に沿ふて走り得べきところは即ち走り、走り得べからざる處は淺瀨を撰び或は三四露里に餘る滔々たる江流を横ぎりて對岸に達する等嚮導者の任務は重に案内をなすに止まるも之れが智恩によりて曳船すべき狗群は困難に陷ゐる事ありと云ふ、食料は一晝夜夏時三回にして乾燥したる魚肉を用ゆ一晝夜に於て休憩すべきは五六回にして此際綱を解き彼等をして自由放意に野外に遊戯せしむ、されば少壯なる狗群は四方に駈け廻り遊戯に餘念なきに反し嚮導狗は獨り小高き處に蹲踞しつゝ彼等を監督するは訓致の然らしむる處なるべし進退動止を指揮するには鈴を鳴らして合圖となす

第一鈴には用意、第二鈴には結束、第三鈴には出發續け打ちの急振には駈足、靜かに鳴らせば即ち並足に歩む可きを嚮導狗が聞き取り指揮を誤らざるは實に感ずべきことなりとす

「トングース」人に向ひ一晝夜に於て平均幾露里を遡り得べきやと問へば初日なれば一日六十露里を過ぐべからずと語りぬ

其四　「エニセイ」河遡征

間もなく小舟は「エニセイ」河畔にと出でたり見渡せば「エニセイ」の急湍は浩蕩として勢ひ奔馬の如く滔々として雄雷の音に似たり斷崖に碎け砂洲に遮られて流下せる泡沫は宛も吹雪の如く時に波間を離れて飛び散るの光景最も悽愴を極む此江流を如何にして遡上すべき怜悧なるも狗は狗なり、水に馴るゝも遊牧人種は遊牧人種なり輕捷なるも小舟は小舟なり如何にして此洋々たる急流を遡るべきなど默想しつゝある中曳船の準備は整へぬ嚮導は老狗にして首より胸にかけ肩に廻はし革製の紐もて弛く之れを結び手綱の如く左右より之れを後部に引き二間ばかりを隔てゝ一本の横棒をつくり之を二頭の狗の頭邊にあて綱は肩に廻はし各自二條の綱を後部に引き一間許りを隔てゝ設けられたる横棒に四條の綱を結びつけ二頭の狗の頭邊より胸にかけ肩に

廻すこと宛も前の如くにして前後の距離を短縮し引力を平均せしめ最終の四條は一纜めとして之れを船頭に結び付くるなり第一鈴には互に戲れつゝありしが第二鈴には已に駈け出さむとあせるものあり第三鈴鳴るに及び今迄知らざる爲ねしてありし嚮導者の老狗は徐々進行を始めたりしが六頭の壯狗は緩歩しつゝ之れに隨ひたり岸に沿ひ南する三露里許の處に至りて御者の「トングース」は俄に鈴聲を早めたるを聞くと等しく嚮導者の老狗は一躍宙を翔けるが如くに馳せ出したりしに爾餘の十三頭は之れに續きて駈け出し是れより一時間六七露里の速力を以て舟は流を遡りたり同乘の商人及郵便局員等は此の如き航行を怪しみもせず平然として喫煙し居たりしが余は唯だ奇異の感に打たれ嚮導狗の動靜如何にと瞥見しつゝありたり此日は天氣晴澄風止み氣死し時氣頗る高溫を示したり削れる板の如き低原に沿ひ前後十四頭の狗は時を移して走りしが舟は急湍を開きて碎破を左右に引きつゝ「エニセイ」河を遡る三十露里許りにして一の小河にと達したり馴れざる光熱に苦しみ渴に堪へざりし一行は勢鋭く河流に飛び入り暫く間に彼岸にと達したりしが身振ひしつゝ濕れたる水を拂ふや水滴は雨の如くに飛び散り乘船者の顏背けしも笑止なりき此より益々南して六七露里を走りし頃斷崖多き河畔にと出でたりしが嚮導の狗は身を躍らして水に入り流れを亂して斜めに「エニセイ」の急湍を横ぎり島畔に眠れる水禽を驚かしつゝ岸にと着したり此島は「カラトースキ」と名くる長さ大凡三十露里の大島嶼にして周圍は凡て砂濱の樹林なき砂洲なり

此時狗隊は痛く疲勞を感ぜる模樣なりしを以て一行は此處に休憩するとに決し解裝して狗を放ち食餌を與へて鋭氣を養はしめ網を江畔水深き處に投じて數多き雜魚を獲、瓦斯罐を用ひて煮燒きし睡後狗隊を召集し斯くて再び島畔に沿ひ河流を遡りたり「ドジンスク」より「トルハン」河の注入點に至る大凡五百露里間は四晝夜を要したりしが此れより上流には淺瀨、暗礁、急湍、岩石等多く狗隊の力にては到底遡上し難きを以て「トルハンスク」在住の「トングース」人二名と及び一隻の小船とを雇ひたり

曳船狗隊一行の上「トングース」河の注入點より上流三百露里の「ガンガト」灘近傍に到りしは七月十三日午後十時頃なりしが此方面は森林に富み沿岸は奇巖怪石劒を植うるが如く鋸の齒の如き嶮岨なるを以て繫舟に便ならざるより江畔を距る五六露里許の森林中に露營するとに決したり此地方は「エニセイスク、ダヒガー」と名づくる有名なる大森林帶の北端にあるが故に樹幹高大ならざるも根、白樺の樹林帶は麻畠の如くに茂生し栗鼠野鼠の類夥しくして獵狩に最も好適の地なるが故に一行は舟中連日の鵜屈

を綏めんが爲め野營を森林中に設けたり此地方には豺狼の類夥しく出沒するが故に水夫の「トングース」に命じて數十株の枯木を集めしめ大篝火を六七ヶ處に設けて狼群の來襲を防くの準備をなし一行は旅裝を解き新たに設けたる柵内に入りて各々脆き夢に入りたりしが午前三時半太陽の地平線を距る數尺なりし頃ほひ樹枝を縫ふが如くに飛び叉ふ栗鼠小鳥の翱翔するを認めたりき

一行の露營するや狗隊は一頭の嚮導狗を除き十三頭は周圍に圓陣を作り各狗六尺許を隔てゝ圓陣形に一行を圍みて横臥するを常とす左れど嚮導狗は日沒より日出迄終始圓陣の内外を巡邏しつゝ時に蹲踞し時に横臥するとあるも目睫するにあらず終夜巡廻して豺狼の來襲を望觀し四方に眼を配ばりて他の狗隊の如く眠るとなし一旦豺狼の來襲するや嚮導狗は吠吼して之れを狗隊に警告すると同時に圓陣を形造くりて安眠せる狗隊は一齊に蹶起し來襲の狼群に向つて戰鬪を開始するの勇壯なるは殊に感ずるに餘りあるされば狗一頭につき狼二頭に對するが如き敏捷慓悍の働を以て格鬪するが故に彼我の頭數相匹敵するの際は豺狼の群は常に敗走し死傷と捕虜とを遺して逃竄するを常とせるも狼群は常に三十乃至四十頭つゝの團隊を作りて襲ひ來るが故に此際旅行者は獵銃もて狗と搭鬪する狼群を狙擊し狗隊に應援するを以て大數の狼群は腹背の挾擊に支へ難く數多き死尸を殘して逃走するを常となすと云へり北部土人の狩狼は常に冬期にあり總じて北部の冬期は森林地より河湖に至るまで悉く氷結して滿目一樣の銀世界に變するが故に森林中には最早食すべきものなきに至り、飢餓に迫れる豺狼は食を求めんが爲め漸く殖民地に向ふを以て狩狼者は三頭曳の橇に乘じ狼群を誘はんが爲めに森林を馳驅すれば狼群は此所彼所より現はれ來り先づ馬匹に向つて突貫し來るを御者は鐵鞭もて之れを打ち拂らひ狩狼者は前後左右を狙擊する中馬は疾風の如くに前面に駈け拔くるも打ち殘されたる狼群は猶も追跡して數露里に及ぶ中悉とく狙擊せられて幾十の死尸を殘留するに至る左れば狩狼は猛獸狩獵中最とも危險の中に數へられ狩狼者は人馬諸共に往々豺狼の毒牙に生命を失ふとあるも一回の狩狼にして成功せは露貨百留乃至百五十留を得べしと云へり

七月十四日朝來濃霧あり加ふるに此邊よりは河身强く斷崖に壓窄せられて水勢急激曳船にては遡上困難なるを以て午時一隻の小舟に狗隊を搭載し「トングース」人に棹さゝしめ橇取らしめなどして流を遡り此れより狗隊に船を曳かしめ斯くて一行は七月二十三日大「カス」河の注入點「セレナレニコーワ」村に達し此所に「オビ」「エニセイ」運河經由の汽船を待ちつゝありしが七月二十八日「オビ」汽船會社船「イルトイッシュ」號の來航す

るあり之れに便乘して「エニセイスク」に寄港し「クラスノヤールスク」町に着せしは八月二日午前六時半なりき

「クラスノヤールスク」町より北極圏内の「ドジンスク」村に至る水路大凡千九百露里之れに遡上の里程を加ふれば三千八百露里にして之れを日本の里數に換算すれば大凡九百五十露里を彼れ此れ二ヶ月間にて旅行したりしなり其間危險と困難とに遭遇せしこと少々にあらざりしかども貝加爾湖東に於けるが如き遭難は殆んど皆無なりし着後客舍に鋭氣を養なひ前途の遠征に思を碎きつゝありしが此れよりは逆征して一旦蹉躓したる蒙古砂漠の横斷を試むべき歟或は中央西比利亞の「オムスク」より「オビ」河を遡りて「セミパラチンスク」に達し高加索方面に遠征の針路を取る可き歟或は西比利亞鐵道線路に因り烏拉爾山を踰えて歐露に入る可き歟前途何れも遭遠探撿の材料また富豐なる可きも要する處歐露に入り歐洲進化の程度を觀察し東方問題研究の參考材料を蒐集するは目下の急務なるべしと覺悟し斯くて明治三十三年八月十七日「クラスノヤールスク」町を發し鐵路夢を載せたる儘「トムスク」府にと向ひぬ

單身踏査

東露の實狀　終

明治三十六年十月十一日印刷
明治三十六年十月十七日發行

東露の實狀
定價金七拾錢

著者　筑波篤

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地
發行者　目黑甚

新潟縣長岡町表四ノ町廿番戸
發賣者　目黑十郎

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷者　佐久間衛治

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店

不許複製

77
291

77
291

026856-000-0

77-291

東露の実状

筑波　篤／著

M36
ADF-0037